UeHAUP'80

翼なき者　風のーと

「翼なき者」

小学校に入る前のことだったと思う。家族が揃っているとき歌を歌っていたら、しみじみと云われた。「お前は歌が下手だなぁ。音痴だな」
私はそれ以来人前で歌を歌わなくなった。歌えなくなった。
小学校一年だか二年のことだったと思う。学校で描いた絵を家に持って帰ったとき、云われた。「お前は絵が下手だな。これは人か？」
私はそれ以来絵を描かなくなった。描けなくなった。
今でもそうだ。

あの時。
翼をもがれたんだと思っている。

小学校の三年のとき、私は詩(うた)と出会った。詩を詠むことを知った。

「雲ってホントに不思議だね」
休み時間、さほど親しくはない子からいきなり云われた。
それは私が詠んだ「雲」という詩のへの感想だった。
「雲」でどういう詞を綴ったのかは覚えていないが、「雲ってホントに不思議だね」の言葉は覚えている。
私が書いた文章に誰かが反応してくれる。私はそれだけのことが嬉しかった。
詩人になりたいと思った。

高校に入り、親しくなった友人と同人誌を立ち上げた。
別の友人とはバンドを組んだ。歌が歌えず、楽器も演奏できない私の担当は作詞だった。
仲間内で作った自主映画の脚本も手がけた。
高校三年になるまでは、いつも、何らかの文章を書いていた気がする。

けど。
高校三年の初夏。私は気づいてしまった。
私の云いたいことは誰にも伝わっていないっていう事実に。
私に翼は生えていなかったという事実に。

「受験」という魔法の言葉を言い訳に、私はしばらく文章を書かなくなった。
バンドも映画作成も休止状態となった。

「受験」が終わって。
もともと人数の少なかった同人誌は書き手がいなくなって、休刊から廃刊へ。そして私は別の同人誌に移った。
休止していたバンドは名前を変えメンバーを一部変え再結成されたが、私は新しいバンドには呼ばれなかった。

数人で活動していた自主映画は、その道に進んだ友人がそこで知り合った仲間を引き込み、大所帯となった。
専門としている人たちと全くの素人では技術も知識も比較にならない。
二年後、私は居場所を失いそのグループからドロップアウトした。

新たに加入させてもらった同人誌もレベルが高くて、私は自分の力のなさをさらに知ることになる。
それでも、唯一残った発表の場にしがみつくように私は書き続けた。

時間がたてば気持ちが薄くなる人が多くなるのは理。
移った同人誌も発行間隔が季刊から半年となり一年となり、そして休刊に。

学生から社会人となって一番変わるのは視線だと思う。
先を見つめていた視線より、目の前の現実を直視するように求められる。
口では「夢は作家大先生になること」と云いながらその夢を叶える努力に時間はかけない。ただ日々を過ごすだけ。

そのまま長い間。

歳を重ねれば、その中に喜びも悲しみも怒りもやるせない想いも経験する。何度も何度も。
現実社会で消化しきれない想いを抱えていた２００４年、平成十六年。
何を思ったのか今となっては定かではないけど、いきなり連続アニメの脚本を書きたくなった。

最初は思うように筆が進まず、一話書き上げるのに一ヶ月。その後は早いときで一話一週間。遅くて三週間。しばらく休筆した時期もあって全九話がアップしたのは半年後。

その過程で私は思い出した。文章を書くことの楽しさ。書きあがったものを読み返してみて、独りよがりで表現力のない文章であることを再確認するけど、私は言葉を綴るのが好きなんだってことも再確認した。

翼を持つ者のように空を飛ぶことはできないけれど、翼なき者でも地を走ることはできるし、走れなくても歩くことはできる。そして、夢を見続けることも。

それから私は再び文章を書き始めた。詩を詠いはじめた。

「夢は作家大先生になること」

そして、詩人になりたいと今また思っている。

ふらいあうえい

「ふらいあうえい」

空を飛ぶ夢を見たよ
祈るように両手広げ　瞳閉じて
思い切り地面　蹴とばしたよ

ふらいあうえい　天つ風に乗り
ふらいあうえい　きみのもとへ

流れ星を追い越して
多くの願い聞き届けた
でも僕の願いはただ一つだけ
ただ一つの願いが　叶うことを願うだけ

そしてその願いのとおり
君が僕を見て笑ってくれるよ
空を飛ぶ僕を見て

夢の中の僕と　現実の僕との違いは
ただ空が飛べるか　飛べないかだけ

ふらいあうえい　天つ風に乗り
ふらいあうえい　きみのもとへ

窓を開け部屋の外に出るよ
四角に切り取られた灰色の空が僕を嘲笑うから
思い切りコンクリートの床　蹴とばしたよ

ふらいあうえい　空の高さ越え
ふらいあうえい　星のもとへ

「ふらいあうえい」

ほっぷ、すてっぷ、じゃんぷっ。

僕は空に舞い上がった。

『ほっぷ』の時点で既に足には、まるであのビニールのプチプチを踏みつけたような『ふわっ』とした感覚が生じ。

『すてっぷ』ではさらにその感触が強くなって、実際には足が地面につく一センチ手前で空気の圧力に跳ね飛ばされ。

『じゃんぷ』の時点では、明らかに足は地面に届かず、さらに突き上げるように僕の躰を宙に浮かび上がらせる。

空に舞い上がったと言ったけど、正確にはまだ空には届いていない。

人の背の高さを水に浮かぶように漂っているだけだ。それも、気を抜くとすぐに地面に落ちてしまいそうになる。

落ちる前に慌てて平泳ぎで上に昇っていく。

二階の窓ぐらいまで上がったとき、はたと思い出す。

『もう一回、ほっぷ。すてっぷ。じゃんぷをすればいいんだ！』

ほっぷ、すてっぷ、じゃんぷっ。

今度こそ掛け値なしに僕は空に舞い上がった。

もう気を抜いても地面に落ちてこないし、例え落ちそうになったとしても『じゃんぷ』をすれば、また空に戻れる。

平泳ぎをしなくてもクロールをしなくても、躰をちょっと傾けるだけで行きたいところに滑っていける。そう。まさに滑るって感じ。ツツツーっと空を切り裂いていく。

休むときは鳥のように電信柱のてっぺんで片足立ち。みんながテクテク道を歩いているのを高みの見物。

ほとんどの人が下を向いて歩いていて、僕には気がつかない。気がついて手を振ってくれるのは小さな子供だけ。

僕も手を振り返すと目と目が合ってにこっと笑う。

笑う女の子の顔がサーシャの笑顔とダブって、僕はサーシャのもとに飛んで行くことに決めた。

サーシャっていうのは、二年前に一緒のクラスだった女の子のこと。別にみんなからサーシャって呼ばれていたわけじゃなく、僕だけの呼び名なんだけど。それに、僕も面と向かって『サーシャ』って声かけたことはないけど。

でも、そんな些細なことはどうでもいいこと。大事なのはサーシャのもとに飛んでいくことを決めたってことと、僕は空を飛べるってこと。

ほっぷ、すてっぷ、じゃんぷっ。

僕は空高く舞い上がった。

サーシャのもとに向かっていると、僕と平行に流れ星が落ちてきた。流れ星は宇宙の塵だって聞いたことがあるけど、近くで見ると流れ星は三十ワットの丸型蛍光灯だった。

蛍光灯に願い事すると叶うなら、毎日自分の部屋で上を見て願い事すればいいのにって思いながら、しばらく流れ星と並んで飛んでいると、みんなが僕に向かってお願い事をしてくる。もしかしたら流れ星にお願いしてるのかもしれないけど、蛍光灯は何も聞いてくれないから、代わりに僕が聞き届ける。

『お金持ちになれますように、それから家内安全』『金！金！金！』『たかくんといつも一緒にいたい。たかくんと結ばれたい』『車がほしい』『やりたいやりたい』『大金持ち！それに、家がほしい』『世界が平和で家族が健康でいられますように』『女、金、もてたい』

はいはい。みんなの願い叶うといいね。

僕はちょっとスピードを上げる。流れ星も右に曲がって僕から徐々に離れていく。

蛍光灯の流れ星も離れて見ると白く輝いて見えるから不思議だ。

そんな流れ星に向かって、僕も願い事をしてみる。僕の願いはたったひとつ。その『たったひとつの僕の願いが叶いますように』

ほっぷ、すてっぷ、じゃんぷっ。

僕はサーシャをめざした。

ツツーっと街を越え。ツツーっと山を越え。はやる想いは空の高さを越える。

ツツーっ。ツツーっ。そして僕はサーシャを見つける。

サーシャは白つめ草の敷き詰まった緑の河原で僕を迎えてくれるかのように両手を広げて空を見ている。

ツツーっ。ツツーっ。僕はサーシャの上で円を描く。僕の描いた円がゆっくりとサーシャの頭に降りていき、やが

て白く輝きだす。
まるで流れ星の蛍光灯のように。まるで天使の輪のように。

天使の光に包まれたサーシャは、空を飛んでいる僕に気付く。
そして、空を飛んでいる僕に向かって微笑んでくれる。あのすばらしい笑顔を見せてくれる。
さっきした、たった一つの願いが叶う。
嬉しさのあまりはしゃぎすぎ、僕はバランスを崩して、まっ逆さまに急降下。

ほっぷ、すてっぷ…ダメだ！落ちる！
僕は足をバタッとびくつかせた。

ハッと目が醒める。まだ胸がドクドクいってるけど、それは空から落ちそうになったからか、サーシャが笑ってくれたからかは判らない。きっとドキドキの原因はその両方なのだろう。

壁際の目覚し時計を見ると、まだ起きるのにはちょっと早い時間。
『起きようかな、もう一度寝ようかな』って考えていると、目覚し時計の横で壁に貼られた等身大のサーシャの写真が笑ってる。
でも、残念なことに僕を見て笑っているんじゃなく、横を向いて笑ってる。
夢の中では僕を見て笑ってくれたのに。現実の世界では笑ってくれない。
僕でない方を見て笑うことはあっても、僕を見て笑ってくれることはない。
夢の中では僕を見て笑ってくれたのに。

夢の中の僕と現実の僕との違いは、空が飛べるか飛べないかだけ。ただそれだけ。
だから僕が空を飛べばサーシャはきっと笑ってくれる
僕に向かって微笑んでくれる。

明けていない朝はまだ薄暗い。
七階の窓からは向かいの鉄塔から伸びる高圧電線が正面に見える。

窓を開け、ベランダに出ると、重く立ちこめた灰色の雲が
僕の上にのしかかってくる。
僕が飛べないよう押しつぶすために。飛べない僕を嘲笑
うように。

ほっぷ、すてっぷ、じゃんぷっ。
僕は空に舞い上がった。

サーシャに笑ってもらうため。僕に向かって微笑んでも
らうため。
空を飛べばサーシャは微笑んでくれるから。

「GUNDAM μ　2―7」

1　崑明美術館事務室

電灯は半分しかついておらず、薄暗い事務所。ピョンがモップを片手に掃除をしている。
いきなりドアが開いて、ジンイルが入ってくる。ピョン、ドアのほうを見る。

ピョン　「あ、おはようございます」

ジンイル、顔を伏せ、ぶつぶつと何かつぶやく。どうやら「おはよう」と言ってるようであるが、声が小さく聞こえない。
そのまま、自分の席にどかっと座る。

ピョン　「今日は早いですね」

ジンイル、ピョンを無視して答えない。
ピョンは掃除を続ける。ピョンの掃除がジンイルに近づく。
いきなり立ち上がるジンイル。

ジンイル　「格納庫に行ってくる」

ジンイル、ボソッと話すと事務室を出て行く。

2　オープニング

漆黒の闇。
オープニングテーマ流れる。
スタッフロール流れる。

漆黒の闇がゴソゴソと細動する。
闇にズームアップしていく。
闇と見えたのは黒光りする無数の微細な姿はまるで昆虫のような機械である。
その機械たちが触手を動かし銀色の物を作り続ける。

単純な分子構造図。
その単純な分子構造図がいくつも重なり合ってポリマー

の構造図を形成する。

崑明美術館格納庫。
ザクの足元でホナウドがＰＣＵを見ている。ＰＣＵには盗み撮りされたサーシャのアップの写真が映っている。
カメラ、サーシャの瞳にズームする。サーシャの青い瞳が地球に変わる。

地球。カメラパンする。下弦の月が現れる。
月を背景にＮガンダムがビームライフルを構える。
タイトルテロップ　「ＧＵＮＤＡＭ　μ」

黒鉄鋼色とくすんだピンクのツートンカラーの陸戦ガンダムが走りながらビームライフルを撃つ。そのガンダムにサラ・シーカーの顔が重なる。
陸戦ガンダムと同じカラーのＧＭが薙刀型のライトサーベルを器用に振り回す。ＧＭにリャンリャンの顔が重なる。
同じくＧＭがライトサーベルをフェンシングのように突き出す。ＧＭにアンナ・リーの顔が重なる。
小花とシンゾー・ヤマトモが並んで立っている。カメラ引く。シンゾーの隣に朱華、小花の横にサラ、リャンリャン、アンナがいる。
更にカメラが引く。サラの後ろに陸戦ガンダム、リャンリャンとアンナの後ろにそれぞれＧＭが立っている。

崑明美術館正門。
憂鬱そうにゆっくりと歩いてくるサーシャ。鉄の門を重そうに少しだけ開け、中に入る。
美術館を見上げ、憂鬱そうにゆっくりとため息をつく。

まるでフィギュアスケートをするように華麗にホバーリングをするリックドム。くるっと回って静止し、マシンガンを撃つ。リックドムにムトゥの顔が重なる。
ビルの陰から頭を出しビームライフルを撃つハイザック。二三発撃つとすぐにビルの陰に隠れる。ハイザックにチャ・ジンイルの顔が重なる。
ビームサーベルを下段に持ち走るザク。ビームサーベルを振り上げる。ザクに洪ヒロシの顔が重なる。
ビームライフルを担いでいるザク。ライフルを気障にくるくるっと廻して構える。ザクにホナウド・シウバの顔が重なる。

ＢＢ、ＢＢに寄り添うようにしゃがみこんでる何アヤ。カメラ引く。ＢＢの隣にムトゥ、チャ・ジンイル、キッド。アヤの隣にフック・ジュニオール、ヒロシ、ホナウドがいる。
更にカメラが引く。ムトゥの後ろにリックドム。ジンイルの後ろにハイザック。ヒロシとホナウドの後ろにザクが立っている。ホナウドの隣に、サーシャ・レスコフ、チョン・ピョン、キムがいる。

崑明美術館格納庫。
美術館内部から格納庫への扉が開き、人が入ってくる。
カッカッという足音。
その足音に気付き、ホナウドがＰＣＵを閉じ、笑顔で振り返る。が、すぐにその顔が曇る。
ジンイル、ホナウドに気付き会釈をする。

ビームサーベルを手に宙を舞うＺガンダム。攻撃を華麗によける。Ｚガンダムにノリ・ノーザンの顔が重なる。
両手をついたＧＭキャノンが肩のキャノン砲を発射する。
ＧＭキャノンに太田義男の顔が重なる。
立っているノリ。カメラ引く。ノリの隣にトマシュ・ポボロスキー、ンディキ、辛龍浩、アン・ドク、ノ・ソヒ、義男がいる。
更にカメラが引く。ノリの後ろにＺガンダム。義男の後ろにＧＭキャノンが立っている。

崑明美術館玄関。
サーシャが壁に寄りかかるようにして立っている。
電話をかける決心がつかないようにＰＣＵを閉じたり開いたりしている。
キッドが門から入ってきて、サーシャに気付く。
サーシャはキッドに気がつかない。

タイトルテロップ　「ＰＨＡＳＥ　２―７　ふらいあうえい」

キッド　「こんなところで、何してるの？」

３　崑明美術館事務室

ピョンがゴミ袋を束ねている。

ドアが開き、キッドが入ってくる。少し遅れてサーシャも入ってくる。

キッド　「おはようございます！」
ピョン　「あ、おはようございます」

ピョン、顔を上げ、キッドとサーシャを見る。

ピョン　「あ、レスコフさん。レスコフさんも今日は早いですね」
キッド　『『も』？」
ピョン　「あ、いえ、チャさんも今日、早かったものですから」
キッド　「ジンイルさん？」

キッド、ジンイルの机を見て、その後サーシャを見る。

キッド　「今、ジンイルさんは？」
ピョン　「格納庫行くって言ってました」
キッド　「ふーん。…レスコフさん。昨日の件でジンイルさんと待ち合わせ？」
サーシャ　「全然違いますよぉ」

サーシャ、困った顔でキッドに答え、迷惑そうにチラッとピョンを見る。
ピョン、サーシャの目線から目をそらす。

ピョン　「ゴミ捨てに行ってきます」

逃げ出すように、部屋から出て行くピョン。

キッド　「珍しくレスコフさん、早いなぁって、さっき思ったんですよ」
サーシャ　「実は、朝、シウバさんからメールがあって。…もう格納庫で待ってますって」
キッド　「格納庫？ハハ、大変じゃないですか。修羅場になっちゃいますよ」
サーシャ　「もー。笑い事じゃないですよ。シウバさん、本気でジンイルさんとのこと勘違いしてるんですから。…ちょっと私も格納庫行ってきます」
キッド　「ハハ。あ、じゃあ、ついでに壷のこと聞いてもらえますか？あ、もちろんレスコフさんの用が済んでか

らでいいですけど。ハハ」
サーシャ　「壷？何でしたっけ？」
キッド　「ほら、昨日話した『Bさんがシウバさんに壷を返して欲しい』って」
サーシャ　「ああ、昨日の話ですね。…はいはい」

サーシャ、慌てたように小走りで部屋を出て行く。
そんなサーシャをニヤニヤしながら見ているキッド。
背後で大きなあくびをする声が聞こえる。キッド、振り返る。

ムトゥ　「おはようございます」

タオルを片手にムトゥが給湯室から出てくる。

キッド　「あ、ムトゥさん。昨日の当直当番はムトゥさんだったんですか」
ムトゥ　「ええ。…まだ九時前じゃないですか。今日はみんな早いですね」
キッド　「あのジンイルさんももう来てるみたいですよ。…雪でも降るんじゃないですかね。ハハ」

陽気に笑うキッド。

4　崑明美術館格納庫

睨むようにドアを見つめているホナウド。
そのドアがサッと開き、サーシャが姿をあらわす。
その瞬間、ホナウドの顔が満面の笑顔に変わる。
サーシャ、すぐにホナウドに気付き、会釈をする。そして格納庫を見渡す。
一見したところ、格納庫の中にはホナウド以外の姿は見えない。
サーシャ、ゆっくりとホナウドに近づく。

ホナウド　「ありがとう。来てくれて…」
ジンイルの声　「あー！サーシャさん！めずらしーね、こんなとこに来るなんて」

ジンイル、ハイザックのコックピットからワイヤーロープで降りながら大声で叫んでいる。

サーシャ、ホナウドをちょっと見、それから困ったような顔でジンイルに向かって軽く手を振る。
不機嫌そうなホナウド。

ホナウド　「ちょっと場所、移しましょうか」

ホナウド、外に向かって早足で歩き始める。
その少し後ろを下を向いたサーシャがついていく。
その様子を不思議そうにジンイルが見下ろす。

5　崑明美術館格納庫脇

ホナウドが中から出てくる。サーシャも後に続いて出てくる。
ホナウド、脇に曲がると、笑顔でサーシャに向き直る。
下を向いたままのサーシャ。
ホナウド、両手でサーシャの手を包み込むように握る。一瞬ビクッとするサーシャ。

ホナウド　「ありがとう。来てくれて本当にありがとう」

サーシャ、下を向いたままゆっくりと手をふりほどく。

サーシャ　「ごめんなさい」

ホナウド、笑顔のまま、サーシャの次の言葉を待つ。
サーシャ、黙ったままである。

ホナウド　「？」

サーシャ　「……ごめんなさい。やっぱり、今回の話、お受けできないです」

きょとんとするホナウド。

ホナウド　「どういうことですか？」

サーシャ　「ごめんなさい。私、今回の話、お断りします」

サーシャ、逃げるように立ち去ろうとする。
ホナウド、サーシャの腕をむんずと掴む。

ホナウド　「どういうことですか！説明してください。や

はり、チャさんが原因ですか！」
サーシャ　「ジンイ……チャさんは全然関係ないです。街を出るって言っても、両親もこの町にいますし…」
ホナウド　「じゃあ、ご両親も一緒で構いません」
サーシャ　「そういう訳じゃなくて。…ごめんなさい。私、シウバさんとは合わないと思います。お付き合いするのは考えられないです。ごめんなさい」

ホナウド、掴んでいた腕を離してしまう。
サーシャ、急に走り出す。
呆然と立ちすくむホナウド。

6　崑明美術館廊下

ジンイルがゆっくりと歩いている。
サーシャが走ってきて、ジンイルを追い抜き、そのまま事務室に飛び込む。
あっけに取られるジンイル。
ＢＢの声　「何なんだ？」

振り返るジンイル。ＢＢが立っている。
ジンイル　「さあ？」

7　崑明美術館事務室

キッドが自分の席についている。
部屋に入ったところで、サーシャが息を切らしている。
キッド　「どうしたの、そんなに慌てて」
サーシャ、それには答えず、自分の席に向かう。
キッド　「壷のこと、話してくれた？」
サーシャ、あっと、立ち止まる。
サーシャ　「わ。忘れてました」
キッド　「えっ〜。しょうがないなぁ」

立ち上がるキッド。入り口に向かう。

キッド　「格納庫ですよね。シウバさん」

サーシャ　「え。ええ」

キッド　「ちょっと行って話してきます。Bさんが来る前に」

ドアを開けるキッド。と、そこにはBBが立っている。気まずい表情のBB。キッドの笑顔も凍る。

キッド　「…お、おはようございます。…これから格納庫に行ってきます」

BB　「…あ、おはよう」

キッド、逃げるように部屋を出て行く。

代わりに、BBが部屋に入ってくる。その後に続くようにジンイルも入ってくる。

ジンイル、サーシャに近づき、隣の席に座る。

ジンイル　「なんかあたふたしてたけど、シウバさんと何かあったの？」

サーシャ、一瞬ピクッとする。

サーシャ　「別に何もないわよ」

ジンイル　「そう？サーシャさんが格納庫来ることも珍しいし。何があったのかなって」

サーシャ　「何もないわよ」

BB　「シウバさん？…あの人は困った人ですねッ。倉庫から勝手に壷を持っていってしまうんですからッ」

BB、自分の席に座りながら話す。

ジンイル　「勝手に？それって泥棒みたいじゃないですか」

BB　「みたいッ？みたいじゃなくて、泥棒って言うんだよッ」

ジンイル　「そうっすね。泥棒っすね。そうかシウバさん、泥棒なんだ」

苦い顔のサーシャ。ジンイルがサーシャを見る。

ジンイル　「あれ？どうしたの、サーシャさん。あ、もしかしてシウバさんから壷、プレゼントされた？あの人、サーシャさんに気があるみたいだし」
ＢＢ　「そうなんですかッ。レスコフさんッ」
サーシャ、慌てて首を横に振る。
サーシャ　「そんなことないですよ」
ジンイル　「その動揺、怪しいなぁ」
サーシャ　「もー、そんなことばっかり言ってぇ」
サーシャ、立ち上がり、奥の部屋に消えていく。
顔を見合わせるＢＢとジンイル。

7　崑明美術館格納庫

不機嫌に大股でザクに向かって歩くホナウド。
その後をキッドが小走りで追いかける。

キッド　「…昨日の夜も何回も連絡したのですけど、繋がらなくて…」
キッと振り返るホナウド。
ホナウド　「じゃあ、何ですか！僕がここのものを盗んだとでも言うんですか！」
キッド　「そんなこと言ってないじゃないですか。どうしたんですか？って聞いてるだけですよ」
ホナウド　「その言い方が、まるで僕が盗んだように聞こえるって言ってるんですよ」
キッド　「ごめんなさい。そういう意味じゃないです。…何か知りませんか？」
ホナウド　「だから言ってるでしょ！僕は何も知らないって！」
ホナウド、キッドに背を向け歩き始める。
キッド　「いやぁ、Ｂさんがね、昨日の夕方、シウバさんを倉庫で見たって言うから」

ホナウド、急に足を止める。ホナウドの顔が赤くなる。

ホナウド　「ＢＢが見てた？」

キッド　「えぇ。倉庫にシウバさんがいるのを見たって」

ホナウド　（独り言）「ＢＢが見てた…」

キッド、ホナウドに追いつき、ホナウドの肩に手を乗せる。

ホナウド　「触らないでください！…僕に触るな！」

ホナウド、キッドの手を乱暴にふりほどく。

キッド、よろけて尻餅をつく。

ホナウド、キッドを睨みつけると足早にザクに向かう。

キッド、ゆっくりと立ち上がり、服の汚れを確認する。そして、二三度上着を叩いてほこりを落とす。

キッド　「シウバさん。待ってください」

キッド、口ではそういってるものの、半ばあきらめた表情をして、追いかけもせず、ただ立ちすくんでいる。

ホナウドはザクに乗り込む。キッドはその様子を黙ってみている。

ホナウドがコックピットに入ると同時にザクが動き出す。

キッド　「どこ行くんですか」

キッドを無視するようにコックピットが閉まり、ザクがホバーリングで外に向かう。

格納庫から外に出る瞬間、ザクが右手で格納庫の扉を殴る。

大きな音が格納庫にこだまする。

耳を押さえるキッド。

８　　崑明美術館事務室

ＢＢ、席でニュースサイトを見ている。ジンイルも自分の席に戻っている。

サーシャの姿はまだ見えない。

突如大きな音がする。

思わず立ち上がるＢＢ。

ＢＢ　「何だッ？」

ジンイルはきょとんとしてそれには答えない。
と、ＢＢのＰＣＵが着信を告げる。
ＰＣＵを取り出すＢＢ。電話形態にする。

ＢＢ　「こちらＢＢ。…なんですってッ？…どうして止められなかったんですかッ！…まあ、いいですッ。後で話しましょうッ！」

ＢＢ、ＰＣＵを仕舞うとジンイルを睨む。

ＢＢ　「今日の宿直はッ」
ジンイル　「…確かムトゥさんです」
ＢＢ　「シウバさんが壷を盗んで逃げ出したッ。ムトゥさんと二人で追いかけて…撃墜しろッ！」
ジンイル　「ムトゥさんと二人でって、俺もですか？」
ＢＢ　「あたりまえだろッ！早くしろッ！」

ジンイル、やる気がなさそうにゆっくりと立ち上がる。
立ち上がりながらＰＣＵを取り出し、片手で器用に電話形態にする。

ジンイル　「フォン・トゥ・ムトゥさん。…ムトゥさん？チャです。…え？その件です」

ジンイル、ゆっくりと歩き出す。

ＢＢ　「ダッシュだッ！」

ジンイル、ＰＣＵに話しながら面倒臭そうにうなずく。が、緩慢な態度は変わらない。

ジンイル　「えぇ。シウバさんが逃げ出したらしくって。…Ｂさんがすぐに追いかけてって撃墜しろって…」

ジンイル、部屋から出て行く。
入れ違うように、部屋の奥からサーシャがカップを持って出てくる。

サーシャ　「どうしたんですか？」

ＢＢ　「シウバさん…。シウバが壷とＭＳを盗んで逃げ出したらしいッ」
サーシャ　「逃げ出した？…そうですか。やっぱり」
ＢＢ　「やっぱりッ？どういうことですッ」
サーシャ　「あ、いえ」

サーシャを睨みつけるＢＢ。たじろぐサーシャ。

サーシャ　「この街から出たい。…出るつもりだって。…シウバさん、そう言ってたものですから」
ＢＢ　「なるほど、計画的だったのですねッ。壷を盗んだのもッ」

サーシャ、『壷』『壷』というＢＢにあきれた感情を隠さない。
ＢＢはそれに気付かずぶつくさと文句を言いつづけている。

9　崑明美術館格納庫

キッドが呆然と出入口を見ている。そこへムトゥがやってくる。

ムトゥ　「すごい音がしましたけど、シウバさん、何かしてきました？」

キッド、無言で出入口を指し示す。
そこには殴られて大きく歪んだ扉がある。

ムトゥ　「ガキみたいな人ですね」

ムトゥ、そう言うとリックドムのコックピットに向かう。
ワイヤーロープで上がっている途中で、ジンイルが格納庫に入ってくる。

ムトゥ　「チャさん。遅いですよ」
ジンイル　「すみませーん」

ジンイルもハイザックのワイヤーロープに乗る。

ジンイル　「キッドさん！通信士の初仕事。サーシャさん

と二人でよろしくお願いします」

ハッとするキッド。

キッド　「通信士って私がするんですか？」

ジンイル　「そう決めたじゃないですか。キッドさんとサーシャさんとアヤさんでやるって！」

ジンイル、コックピットに飛び込む。

ジンイル　「とりあえず、回線七四で。…ムトゥさん。回線ナナヨン！」

キッド、ＰＣＵを開き操作する。ＰＣＵからムトウの声が聞こえる。

ムトゥの声　「了解。回線ナナヨン。…ムトゥ、リックドム出る！」

ジンイルの声　「チャ。ハイザック、行きますよ」

発信するリックドムとハイザック。

10　ザクコックピット

スクリーンの右隅に盗み撮りされた、横を向いたサーシャの笑顔の写真が映し出されている。

ホナウドは操縦しながら、ぶつくさと文句を言っている。

ピポッという音と共に、サーシャの写真の隣にウィンドウが開き、そこにムトゥの顔が映し出される。

ムトゥ　「シウバさん。どうしたんですか？とりあえず止まって下さい」

フロントスクリーンに映っているバックの映像にリックドムとハイザックが入り込む。

舌打ちをするホナウド。

ムトゥ　「シウバさん！止まって下さい。でないと…。…撃墜命令が出ています！」

ホナウド、無言でスクリーンに映し出されているムトゥを睨みつける。

11　崑明市街

車道を高速でホバーリングしていくザク。
歩道を歩いている人々はザクが巻き起こす風に身をかがめる。

若い男は、ザクの去った方向と来た方向を見て、慌ててビルの陰に飛び込む。
そこへ、リックドムが通り過ぎる。
逃げ遅れた歩道の年寄りは再びの爆風に巻き込まれ、街灯に体を打ち付ける。

続いてハイザックがやってくる。が、ハイザックは急に止まる。
ビームライフルを構えるハイザック。

ザクコックピット。

スクリーンのムトゥの顔が急にジンイルの顔に置き換わる。

ジンイル　「シウバさん！」

ジンイルの声と同時にコックピット内に警告音が鳴り響く。

ホナウド　「ビームかっ！」

緑のビームが背後からザクを貫く。

徐々に警告音が小さくなる。

ホナウド　「シムモードビームか。莫迦にしやがって！」

ザク、振り返りながらビームライフルを構える。

ホナウド　「貴様だけは許さない！」

ザク、ハイザックに向かってビームを発射する。ビームラ

イフルから朱色のビームが迸る。
一発。二発。

サイドスクリーンの中のジンイルが慌てた顔でＭＳを操作してる。
その横でサーシャの写真が笑顔を見せている。それはまるでジンイルに向かって微笑んでいるように見える。
ホナウド、舌打ちをし、瞳を大きく右から左に移動する。
それにつられて、ジンイルの映像がスクリーンの右隅から左隅に移動する。
移動している途中で、ジンイルの映像がムトゥに変わる。

ムトゥ　「実弾！？…シウバさん。今の行動で…」

ムトゥの顔が急激にキリッとしたものに変わる。

ムトゥ　「今の行動は敵対行動と判断するっ！…チャ！遅れるな！」

ムトゥの映像が突如消える。と同時にザクのビームライフルに衝撃が走る。

リックドムがホバーリングのままザクマシンガンを撃っている。
ザク、リックドムに向かってビームライフルの引鉄を引く。
ビームは発射されない。
ザク、何回もビームライフルの引鉄を引く。
ビームは発射されない。ライフルを見ると一部が損傷している。

市街地歩道。
ザク、ビームライフルを投げ捨て、背を向けて逃げ出す。
投げ捨てられたライフルはビルにあたり、歩道に落下する。
そして、歩道で身を屈めていた赤い服の女性を押しつぶす。
その横をリックドムの足が散発的にザクマシンガンを撃ちながら通り過ぎる。
次いでハイザックの足が通り過ぎるが、すぐ戻ってきて、落ちているビームライフルをすくい上げる。

ハイザックコックピット。

全方位スクリーンに逃げるザクが小さく映っている。
ハイザック、拾ったビームライフルの引鉄を引く。と、短く朱色のビームが発射され、近くのビルに当たる。
ライフルの破損していた部分には、女の体が潰れてめり込んでいる。

ジンイル　「もったいないなぁ。まだ使えるじゃん」

ライフルを見るジンイル。ライフルについている女の体に気がつく。

ジンイル　「げ。汚いな」

市街地－道。
ハイザックはライフルを大きく振り、女の体を振り落とすと、拾ったビームライフルを腰に固定する。
振り落とされた女の体は頭部と胴体に分かれ、胴体は不自然に足を広げた状態で車道のアスファルトに叩きつけられる。
頭部は車道の脇に待避していた車のフロントガラスに突き刺さる。

車の中では、運転席では若い女性が顔を引きつらせて、助手席ではチャイルドシートに収まった幼児が無邪気に手を叩いて笑っている。

市街地－俯瞰。
一部が崩れているビル。崩れたところから黒煙が出ている。
その横をリックドムとハイザックが通り過ぎる。
遠くでザクが逃げるようにホバーリングしている。そのザクを追いかけるようなリックドムとハイザック。

急にハイザックが立ち止まりビームライフルを発射する。
ザクは器用に避け、ビームはビルに当たる。崩れ落ちるビル。
ハイザック、再びザクを追尾する。

今度はリックドムがホバーリングをしながらザクマシンガンを二発撃つ。
一発はザクの右手に命中するが、もう一発はそばのビルに当たり、大きな穴があく。
斜向かいのビルの二階には窓から頭を出しているオダが

いる。

12　石林天幕

手馴れた様子で義男が食器の洗い物をしている。その奥ではトマシュがゴミ掃除をしている。
義男のポケットでＰＣＵがバーストメールの着信を告げる。
義男、ＰＣＵを耳にあて、しばらく聞いている。

義男　「隊長！」

義男、大声を出すと、洗い場から飛び出す。
トマシュはあっけに取られたままその様子を見ている。

義男　「隊長！崑明軍から何か聞いてますか！？」

怪訝そうに義男を見るノリ。

ノリ　「どうしたんですか、ヨシさん。何があったんですか？」

義男　「崑明市内でＭＳによる市街戦です！」

ノリ　「ＭＳの市街戦？トマシュさん？何か知ってますか」

トマシュ　「いえ、何も聞いていませんが。……問い合わせますっ」

ノリ　「ンディキさん！軍が何か掴んでないか調べてください。…辛伍長。こちらも出る準備しておいてください！」

うなづきながら天幕を飛び出していく龍浩とソヒ。遅れてアンが飛び出していく。
義男は中央のテーブルにつき、ＰＣＵからキーボードとディスプレイを投影する。

義男　「繋がってくれよ…」

テーブルの上に投影されたディスプレイパネルにリアルタイムニュースサイトの映像が映し出される。映像の中に時折ブロックノイズが発生するが内容は十分確認できる。

義男とノリがニュースサイトの映像にくぎ付けになる。
トマシュもＰＣＵで話しながら横目で映像を見ている。

義男　「逃げるザクに追うリックドムとハイザック…」
ノリ　「仲間割れ…ですかね」
義男　（小声で独り言）「ザク…洪さん？……いや、シウバさんだな」
義男　「…仲間割れ、ですね。きっと。…これをチャンスとしてこちらも一気に攻め込みますか？」
ノリ　「……」

トマシュ、ＰＣＵをしまう。

トマシュ　「崑明軍は何も知らないようです。向こうでも確認するといってました」
ノリ　「罠。ってことはないですかね？」
義男　「罠？」
ノリ　「情報ではＢＢ団のパイロットは六人。画面に映っているのは三機のＭＳ。内部分裂を装い、これを機会と乗り込んできた崑明軍を待ち伏せる」
トマシュ　「なるほど、待ち伏せですか」
ノリ　「映像を見てるとザクは一切反撃してませんよね。それに追うほうも、わざと照準を外しているようにも見えるし」

息を切らせながらソヒが天幕に飛び込んでくる。

ソヒ　「ズィージ、ＧＭキャノン、共に発進準備完了です。いつでも出れます」
ノリ　「ちょっと待って」
トマシュ　「罠って言われると、確かに追われているのが一番古い型のＭＳだっていうのも、それっぽく感じられますね。…一旦、出撃は止めて様子を見ますか？」
ノリ　「そうしましょうか。…でも、そうするにしても情報は欲しいですね」
義男　「じゃあ、私が崑明の街まで行って、様子見てきましょうか。どのみち、近々自宅に戻って、ユングさん関連の資料持ってこなくちゃいけないですし」

ノリ、探るような目つきで義男を見る。

ノリ　「ヨシさんですか。…ヨシさん一人でですか」

義男　「一人じゃまずいですか？」
ノリ　「いや、そういう訳じゃ」
ソヒ　「じゃあ、私もヨシさんと一緒に崑明に行きます」

ノリ、ソヒを見る。そしてひとしきり考える。

ノリ　「判りました。崑明への偵察はヨシさんとソヒに行ってもらいましょう。いいですか？」
義男　「いいですよ」
ノリ　「じゃあ、ヨシさん、よろしくお願いします」
トマシュ　「ソヒもよろしくな」

トマシュ、そう言いながら、一瞬ソヒから義男に目を移す。
ソヒ、その一瞬の意味に気付き小さくうなづく。

ソヒ　「はい。…じゃあ、ヨシさん行きましょうか」

義男、ソヒの全身を上から下へと見渡す。

義男　「行きましょうって、まさかその服で行くつもり？」

ソヒ、自分の服を見る。

ソヒ　「あ。軍服って訳にはいかないですね。着替えてきますっ」

照れくさそうに急いで天幕を出て行くソヒ。
笑っているノリとトマシュ。

13　崑明市街

挿入歌「ふらいあうえい」流れる。

逃げるザク。追うリックドムとハイザック。
距離は徐々にせばまってきている。

ハイザックが急に立ち止まり、ビームライフルを撃つ。
後ろ向きのまま、それを器用に避けるザク。

リックドム、ホバーリングのままマシンガンを撃つ。
マシンガンがザクの腰から足にかけて命中する。

もんどりうって反転し、近くのビルに寄りかかるようにして正面を見せてとまるザク。
一瞬の間。
ザクのコックピットが開き、中からホナウドが出てくる。ハイザック、ビームライフルの照準をザクに合わせる。そして引鉄を引く。
ホナウド、両手を横に広げた格好で、ザクのコックピットから空中にダイブする。
その瞬間、朱色のビームがザクの胸を貫く。
爆発し、黒煙につつまれるザク。

リックドムがマシンガンを構え、警戒しながら黒煙の中に入る。
徐々に黒煙は晴れていく。
黒煙の中からはビルの残骸に埋もれた大破したザクが姿を表す。
ざっとあたりを見渡すリックドム。が、すぐに興味を失ったように瓦礫に背を向ける。
ムトゥ　「引き上げるぞ」

ビームライフルをくるくる回すハイザック。
ジンイル　「爆発の直前にシウバさんが脱出したように見えたけど。確認しなくていいの？」
ムトゥ　「いいだろ。どうでも」
リックドム、ホバーリングでもと来た方向へ戻る。
ムトゥ　「作戦終了。ムトゥ、リックドム。帰還する。撃墜機体回収に誰かよこしてくれ」
リックドムを追いかけるようにハイザックもホバーリングする。

14　石林天幕

ノリとトマシュはリアルタイムニュースサイトの映像に見入っている。
ンディキはＰＣＵを操作しながら、時折ニュースサイト

の映像を見る。
義男はハーフバイザーの開いているほうの目でニュースサイトを見ながらキーボードを叩いている。
ハーフバイザーにはメールツールが映っている。

ニュースサイトの映像に爆発するザクが映る。

ノリ　「あっ」
トマシュ　「ほう。…芝居…じゃなかったみたいですね」
ノリ　「…でも、パイロットは直前に脱出してませんでしたか？」
トマシュ　「え？そうでしたか？」

ニュースサイトには瓦礫に埋まったザクが映し出されている。

義男　「スローで再生してみますよ」

ＰＣＵを操作する義男。
ディスプレイパネルには爆発直前のザクのコックピットがアップで映し出される。
ゆっくりとコックピットが開き、なかからホナウドが出てくる。その様子がスローモーションで映し出される。
ホナウド、両手を広げ飛び降りる。目を閉じたながら落ちていくその様は十字架に架けられた神の子のように見える。
直後にビーム命中。爆発。

トマシュ　「確かに脱出していますね。でも、爆発に巻き込まれたようにも見えますが」
ノリ　「ええ。…ヨシさん。この点も崑明で確認できたら確認してきてください」
義男　「ほい。了解っす」

義男、ハーフバイザーをかけたまま答える。
と、そこにノリのＰＣＵが電話の着信を告げる。

15　崑明軍格納庫

新、ゴ、シンゾーが慌しく動いている。
リャンリャンとアンナはパイロットスーツで作業を手伝

っている。
サラは平服のまま華の横で電話をかけている。
サラ　「…ええ。こちらにも公の情報は入ってきていません。調べたところどうやら身内同士の撃ちあいのようですが。…え？罠？…」
華　「罠？」
シンゾーが、華に駆け寄ってくる。
シンゾー　「三機とも出る準備は出来ました」
うなづく華。
シンゾー、サラを見る。が、サラは電話に集中している。
サラ　「そうですか。崑明に偵察ですか。…え？太田少尉が？…」
サラ、華を見る。勢いでうなづいてしまう華。
サラ　「では、こちらも私が崑明に入ります。…現地で情報交換をお願いします」
シンゾー　「僕も行きます。行かせてください」
サラ、華、シンゾーを見る。
サラ　（ＰＣＵに向い）「はい。判りました。…では、よろしくお願いします」
サラ、ＰＣＵを胸ポケットに仕舞う。そして半ば睨みつけるようにシンゾーを見る。
シンゾー　「あ、すみませんでした。…三機とも出る準備は出来ました」
サラ　「崑明に行って何するつもり？」
シンゾー　「あ、ごめんなさい。街がどうなってるか心配だったので」
サラ　「そう、それだけ？」
シンゾー　「は、はい」
サラ　「本当にそれだけかしら？街が心配なのはここにいる全員が同じよ。崑明に行きたいのは何か他の理由があるのじゃなくて？」

シンゾー　「……」
サラ　「いえない理由かしら」
シンゾー　「いえ…」
シンゾー何か言いたげだが、ためらうように口篭もる。
華　「思っていることがあったら、遠慮せずに言ってみなさい」
シンゾー、華を見る。そしてゆっくりと話し始める。
シンゾー　「サラさんは『街が心配なのはみんな同じ』って言いましたけど、それは違うと思います。僕は崑明に友達も知人もいます。僕が心配なのは崑明の街です。崑明に住む人たちです。生活の場としての崑明です。…サラさんや、ここにいる人たちが心配しているのはそういう崑明じゃなく、支配する土地としての崑明なんじゃないですか？自分の所有物が破壊されることへの心配なんじゃないですか」
華、じっくりとシンゾーの顔を見る。
サラは若造のたわごとと言った目でシンゾーを見る。
華　「…同じ『崑明が心配』でも、君は人が心が心配で、我々は形が形式が心配と言う訳か。我々は住んでいる人のことを考えていないか」
シンゾー、少し考えてからうなづく。
華　「口のうまい政治家の答弁のようだが、君のような若い世代から発せられると真実に聞こえるな。…気に入った。その台詞、次の演説で使わせてもらおう」
華、シンゾーを見て微笑む。え？という表情のサラ。
華　「サラ大尉。シンゾー君を崑明に連れて行ってあげてくれ。…シンゾー君。帰ってきたら、君の目で見たありのままの崑明を私に報告してくれ給え」
シンゾー　「はいっ」
笑顔になるシンゾー。呆れ顔のサラ。

16　崑明美術館格納庫

リックドム、ホバーリングのまま格納庫に入ってきて所定の位置でクルっと器用に反転し壁を背にして立つ。
ハイザックは入り口でホバーリングをやめるとゆっくりと歩きだす。
下ではハイザックのハンガー入りをピョンとヒロシが手伝っている。
ハイザック、手に持っていたビームライフルを腰にセットしようとするが、すでに腰には拾ったビームライフルがセットされている。
仕方がないといった感じで、持っていたライフルを壁のフックに乱暴に架ける。
ムトゥがワイヤーロープで降りてくる。
キッド　「お疲れ様です！」
キッド、ムトゥを迎えるように近寄る。
ムトゥ　「機体回収は？」
キッド　「キムさんとフクちゃんに行ってもらってます」
ハイザック、ハンガーに入り、コックピットからジンイルが出てくる。
ジンイルは大声でピョンに指示を出している。
キッド　「一息入れたら会議室に来てください。Bさんが話を聞きたいって言ってました」
ムトゥ　「団長が？」
ムトゥ、一瞬不機嫌な顔になる。
ムトゥ　「了解です」
ムトゥ、早足で立ち去る。その後姿を見ているキッド。
キッド　「チャさん！終わったら会議室に来てください！」
ジンイル、キッドのほうを見て肩をすくめる。

17　崑明軍格納庫前

ジープの助手席にシンゾーが座っている。運転席側のドアのそばにはサラが立っている。
サラ、手短にリャンリャンとアンナに指示を出している。

サラ　「崑明の戦闘も一段落したようだし、多分出ることにはならないと思うけど、一応警戒態勢のままスタンバっていて」

了解のしるしに敬礼するアンナとリャンリャン。

サラ　「では行ってきます」

サラも敬礼を返すと、ジープに乗り込む。そして、ちらっと助手席を見た後、車を走らせる。
が、すぐにジープは停止する。
後部座席を覗き込むサラ。
そこには小花が隠れている。

サラ　「姫様。降りてください」
小花　「あれ、見つかっちゃった？…いいじゃない。私も連れてって」

助手席のシンゾーも驚いたように小花を見ている。

サラ　「今回はダメです」
シンゾー　「うん。小花はやめといたほうがいいよ。まだ街の状況は判ってないんだし」
小花　「シンゾーはよくて、私はダメなの？そんなの変じゃん」
サラ　「とにかく今回は降りてください」

サラ、つまみ出すように小花をジープから降ろす。
ふくれる小花。

18　エンディング

エンディングテーマ流れる。

エンディングスタッフロール流れる。

石林から崑明へ続く道。
スクータに乗っている義男。
義男の後ろではソヒが義男にしがみついている。

坂道を下る小花。小花に風がまとわりつく。小花と並んでシンゾーも坂道を下る。
坂道を下るＢＢ。ＢＢに風がまとわりつく。ＢＢの一歩後ろを歩いているアヤは立ち止まるが、ＢＢはそのまま歩きつづける。
坂道を下るサラ。サラに風がまとわりつく。坂の途中で坂を上がってくる義男とすれ違う。
坂道を下るノリ。ノリに風がまとわりつく。そこへソヒが小走りに上からおりてきて、ノリに追いつく。

19　崑明市街（ＰＣ房アポロンのビルの近く）

公園のような広場のような避難所スペース。
十数人ぐらいの人がいる。その中に南とオダの姿も見える。

南のＰＣＵがバーストメールの着信を告げる。
ＰＣＵを操作する南。

南　「もう大丈夫みたいよ。…義男も一旦帰ってくるっていうから、もう店に戻りましょうか」

ＰＣＵの表示「宛先：不明、発信者：不明、件名：帰る（発信者ヨッシ）、本文：多分もう大丈夫。一旦そっちに帰る。午後には店に顔を出す」

PHASE 2-7　ふらいあうえい　登場人物

チョン・ピョン
チャ・ジンイル
キッド
サーシャ・レスコフ
ムトゥ
ホナウド・シウバ
ＢＢ

太田義男
ノリ・ノーザン
トマシュ・ポボロスキー
ノ・ソヒ

サラ・シーカー
シンゾー・ヤマトモ
朱華
小花

太田南

祈るように両手広げ
瞳閉じて
ふらいあうえい
天つ風に乗り
ふらいあうえい
きみのもとへ

らら　ちゃぶ台の上の世界

「らら - ちゃぶ台の上の世界 -」

第一場　ぼろアパートの一室

第一幕

昭和六十年、夏の夜。

いかにも学生のための下宿といった感じのぼろい二階建てアパートの二階、南の角部屋。

玄関土間の横には流しがあり、一畳ほどの板の間が上がり口と台所と兼ねている。

台所の先は襖で区切られている。奥の部屋は和室の六畳間のみで、東と南に木枠の窓がついているが、ベランダはない。南の壁には映画版ガンダムのポスターとドクトル・ジバゴのポスターが貼ってある。

六畳間にはビニールロッカーが一つとちゃぶ台、扇風機、ラジオカセットがあるだけで他には何もない。ただ、天井に黒いゴミ袋がぶら下がっている。

和室にはTシャツにジーンズの上原淳（うえはらじゅん）が、ちゃぶ台にひじをつきながら分厚い漫画雑誌を読んでいる。

ラジオからはＮＨＫ－ＦＭのクラシック音楽が流れている。

舌打ちをして、漫画雑誌を突き飛ばす淳。漫画雑誌は、ちゃぶ台から落ちる。

淳　「なんだよ。このタイムパラドックスの甘さ。…ま、たかが漫画だけど」

淳、畳の上に転がった漫画雑誌を枕に寝転がる。

淳　「にしても、アッちーな。やっぱクニ帰りゃ良かったかな。ウジャが帰んないって言うから付き合ったけど、こっちにいても、やることないしなぁ…。まだ早いけど、寝るかな。…その前にエロ本、エロ本」

淳、上半身を起こし、ビニールロッカーの後ろをガサゴソ探す。

淳　「なんだか今日は『プチトマト』の気分なんだよな」
淳、ビニールロッカーの裏から一冊の雑誌を取り出すと、その雑誌を開きながらうつ伏せに寝転がる。
美月の声　「えっ。児童ポルノ！」
淳、美月の声に驚き、あたりを見回す。執拗に見回す。しまいには起き上がって、窓から首を出し外を調べ、和室を出て台所から玄関の外まで調べる
玄関から忍び足で戻ると、再びうつ伏せで寝転がるが、すぐに起き上がって、壁に耳をつける。
何も聞こえないのを確認すると、慎重に元の位置に戻りうつ伏せで寝転がるが、すぐにため息をついて、雑誌を部屋の隅にすべり飛ばす。
美月の声　「いたっ」
淳、跳び起きる。そして、中腰で恐る恐るの表情で雑誌を見つめる。
と、雑誌のあたりが突然輝きだす。輝きは光を増し、猛烈な光量で、部屋が真白くなる。
しばらくして光が弱くなると、そこにはやたらと短いスカートを穿いた上原美月（うえはらみつき）が立っている。
淳、および腰で腕を開く。
美月　「ははは。なにそのカッコ。讃岐の造（みやつこ）じゃあるまいし」
淳　「誰？」
美月　「『讃岐の造』。ほら『今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ』」
淳　「『竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、』」
美月　「『讃岐の造となむいひける』」
淳　「『さかきの造となむいひける』」
美月　「あ、おとーさんは『さかきの造』派なんだ。わたしも信条的には『さかきの造』派なんだけど、最初に習ったのが『讃岐の造』だったから、口で言うときは『讃岐の造』って言っちゃうんだよね」
淳　「はぁ？」
美月　「ほら、そのカッコ。雲海の『竹取翁』そっくりじゃん」
淳　「だから誰？何！」

美月　「雲海。彫刻家の」
淳　「鎌倉の仁王像作った？」
美月　「それは運慶。『竹取翁』は米原雲海。高村光雲の弟子」
淳　「高村光雲って光太郎の親父？…って、じゃなくて、お前！誰！」
美月　「え～。…きっとかぐや姫じゃない？竹取物語なんだから。ほら、『その竹の中に、本光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。』」
淳　「『そを見れば、三寸ばかりなる人…』」
美月　「『それを見れば、五尺三寸ばかりなる人、いとうつくしうて居たり』」
淳　「五尺三寸じゃなくて三寸！それに座ってなくて立ってるじゃないか！」
美月　「九センチの人なんかいるわけない。それに、ほら、わたし、光の中から出てきた美しい人でしょ。それって正にかぐや姫じゃない。…あ、もしかしてわたしがミニ穿いてるから、座って欲しいんだ。パンツ見えないかなって思ってるんでしょ。なんせ児童ポルノ見るような人だもんね」
美月、足元から雑誌を拾い上げる。汚らしいものをつまむように親指と人差し指ではさみ、ひらひらさせる。
淳、あわてて、美月から雑誌を奪い取る。
淳　「な、な、何言ってるんだ」
美月　「ハハハ。…ちゃんと自己紹介すると…。上原美月。二十四歳。就任三年目のピチピチの高等学校歴史科教員ですっ」
淳　「はぁ？」
淳、美月をじっと見据える。美月は笑顔を返す。
長い時間。
淳　「俺は？」
美月　「はぁ？」
淳　「じゃあ、俺は？」
美月　「…上原淳。昭和三十八年四月十七日生まれ。いまは、えぇと大学生？」
淳　「ピーとかパーとか言ってみろよ」
美月　「はぁ？」
淳　「石坂浩二のテレビドラマみたいに『未来から来まし

た。娘です～』とか言うんだろ」
美月　「さすが、おとーさん。話が早い！…石坂浩二のドラマって言うのは判らないけど」
淳、美月を嘗めまわすように見る。
そして、窓を開け外を確認し、丁寧に鴨居のあたりを調べだす。
淳　「ドッキリじゃないのか？…ま、どのみち俺は信じないぞ」
美月　「えぇ～。じゃあ、どうしたら信じてくれるの？」
淳、台所に行き、小さな冷蔵庫の中から缶コーヒーを２つ持ってくる。
和室に戻ってくると、座りながら、ドンと缶コーヒーをちゃぶ台に置き、ちゃぶ台を引きずり、部屋の中央に移動させる。
淳　「とりあえず、立ってないで座れよ」
美月　「やっぱ、パンツ見るつもりなんだ」
淳　「そうだよ。でもいいだろ、俺は親父なんだから。パンツどころか裸だって見てるんだろ」
美月　「まあ、それはそうだけど…」
美月、ゆっくりと腰をおろす。
淳はサッと手を伸ばし、美月のスカートをめくり上げる。
美月は「キャッ」と言って、淳の手を払いのけ、さらに淳の頭をはたく。
淳　「なにすんだよ」
美月　「おとーさんこそ、なにするのよ」
淳　「親の頭、叩く奴があるか！」
美月　「……ごめんなさい。…って娘のスカートめくる親がどこにいるのよ！」
淳　「言ったろ、俺はお前が自分の娘だなんて信じないって。お前は俺が親だって言うんだろ」
美月　「むー」
淳　「いいから座れよ」
美月、警戒しながらゆっくりと腰をおろす。
淳はサッと手を伸ばし、美月のスカートをめくり上げようとする。が、美月は淳の手をうまくかわす。

そして、淳と対角となる位置に座り、淳を睨むように見る。
淳はその目を避けるように、そっぽを向く。そして、缶コーヒーを開け、一口飲む。
美月も缶コーヒーを開けようとする。

淳　「で、何の用？」
美月　「え？うーん」

美月、プルトップと格闘している。

淳　「なんだよ。缶も開けられないのかよ」

淳、美月に向かって腕を伸ばす。
美月、警戒しつつも淳に缶コーヒーを渡す。
淳、思いっきりプルトップを引き、缶コーヒーを美月に手渡し、毟ったプルトップをちゃぶ台に放る。
美月、淳が放ったプルトップをつまみ上げ、缶とプルトップを交互に見る。

美月　（小声で）「しょうがないじゃん。こんなカッコのプルトップなんか見たことないんだから」

淳　「で、何の用」
美月　「うーん」
淳　「くだらない漫才しに来たわけじゃないんだろ」
美月　「うーん。特に用はないんだけど…」
淳　「何？未来はたいした用がなくてもタイムマシンが使えるのか」
美月　「ん。それは違う。まだ試運転みたいなもんだから。たまたま、ららが開発した人達と知り合いだったから、試運転に乗せてもらっただけ」
淳　「らら？」
美月　「ん？なに？」

淳、美月を指差し、再び尋ねる。

淳　「らら？」

美月、指の示す先に当たらないように体を反らし、後ろの壁を見る。そして、しばらくきょろきょろする。

美月　「だから何？」
淳　「いや、だから、ららって？…お前のこと？」

美月　「あっ。わたし、わたしのこと、ららって言った？」
淳　「おう」
美月　「そうかぁ。…やっぱ、おとーさんと話しているからかなぁ。他の人と話すときは、ららって言わないようにしてるんだけど。ほら、わたし、一応、高校の先生でしょ。先生が自分のこと、ららなんて呼ぶのおかしいじゃん」
淳　「…」
美月　「無意識で言っちゃったんだろうなぁ。…最近は、おかーさんと話すとき以外は絶対に言ってないのに」
淳　「……。そうか、ららか」
美月　「おとーさんもわたしのこと、ららって呼んでたよ」
淳、壁のポスターを見る。ガンダムのポスターには、ララァ・スンの顔が描かれており、ドクトル・ジバゴのポスターにはジュエイー・クリスティの顔が描かれている。
美月も淳の視線を追い、ポスターを見るが、意図がわからず、不思議そうに首をかしげる。
淳　「そうか、ららって呼んでたか」
美月　「うん」
淳　「名前、なんだっけ？」
美月　「わたしの？」
淳　「ああ」
美月　「美月。…上原美月。二十四歳。就任三年目のピチピチの高等学校歴史科教員ですっ」
淳　「何。お前の母親はディズニーランド好きなのか？」
美月　「そんなでもないよ。ＴＤＲは、まだららが子供の頃は年に一回ぐらいは行ってたけど」
淳　「ＴＤＲ？」
美月　「トウキョウ・ディズニー・リゾー…。ランド。（小声で）…この時代、まだディズニー・シーないんだっけ」
淳　「ディズニー市？ディズニーランドって、浦安から独立してディズニー市になっちゃうのか？千葉県ディズニー市？東京都ディズニー市？もしかして東京都ディズニー市ピーターパン一丁目とか？」
美月　「そんな訳ないじゃん」
淳　「そ、そうだよな。…でも、一年に一回行ってるのに、別に好きって訳じゃないって言うのか」
美月　「そのくらいは普通なんじゃない？」
淳　「行った奴は、みんな、いい、いい。もう一回行きたいって言ってるけどホントなんだ」
美月　「そうだね。…でも、なんでおかーさんがディズニ

ー好きだなんて思ったの？」
淳　「みつきって、ミッキーマウスからとったんじゃないのか」
美月　「違うよ。三月生まれだからみつき。美しい月って書いてみつき。おとーさんがつけたんじゃん。そう聞いてるよ」
淳　「…」
美月　「はじめ美奈月がいいって言ったらしいけど、三月生まれでみなつきはおかしいっておかーさんから言われて、美奈月の奈を取って美月にしたって」
淳　「美奈月がダメで美月か。…三月生まれって、何年の三月生まれだ」
美月　「一九八九年三月十三日」
淳　「一九八九？昭和で言えよ。…いまが一九八五年だから…昭和六十四年か」
美月　「でも、ららは三月生まれだから…」
淳　「だから？三月だろうと六月だろう六十四年は六十四年だろうが。…ってあと四年で俺が子持ちになるって言うのか」
美月　「うん」
淳　「それって、お前が出来たから、結婚するって奴か」
美月　「ううん。ちょうど一年目の結婚記念日にららが生まれたって。それに、らら、予定日より一ヶ月ぐらい早く生まれたらしいし」
淳　「…ふーん。で、どんな奴なんだ、お前の母親って」
美月　「なんかやだなぁ。お前って言われるの。いつもどおり、ららって呼んでよ」
淳　「ふんっ」
美月　「ねぇ！」
淳　「なに二十四（にじゅうし）にもなって甘えてるんだよ。俺より年上だろ」
美月　「え？…そうかぁ、ららのが年上なのかぁ。…おとーさん、いま、二十…？」
淳　「二十二」
美月　「でも、しょうがないじゃん。年上でも。らら、おとーさんの子供なんだし。子供が親に甘えるのは当然でしょ。…あ、そうか。判った。自分でもなんでかなぁと思ってたんだけど、判った。らら、おとーさんに甘えるためにやってきたんだ。たいした用がない訳じゃなくて、おとーさんに甘えるっていう大事な用のために来たんだ」
淳　「なんだよ、それ」
美月　「もう決めたもんね。徹底的におとーさんに甘える

んだ」

美月、立ち上がると淳の背後に回り、背中にしがみつく。

淳　「なにすんだよ。いい加減にしろよ！」

美月　「ちゃんと、わたしのこと、ららって呼ぶまで離れないんだもんね。返事もしないんだもんね」

淳　「お前、高校の先公なんだろ。みっともないと思わないのか」

美月、淳にしがみついたまま、そっぽを向いて返事をしようとしない。

淳、何か言おうとするが、黙り込む。

しばらく美月が淳にしがみついている状態が続く。

淳　「…」

淳　「判ったから。…らら…は先公なんだろ。みっともないだろ。いい加減やめろよ」

美月　「へへへ。じゃ、おとーさんが変な気、起こす前にやめよかな」

美月、淳の隣に座る。

淳、美月のスカートをめくろうとするが、空振りに終わる。

淳　「お前…ららは学校でもそんなんなのか？」

美月　「そんな訳ないじゃん。学校じゃ、美人でリンとしてて、生徒がちょっとでも騒ぐと、冷静な態度で叱りつけて、みんなからクールビューティーって言われてるんだから」

淳　「いまと全然違うじゃないか」

美月　「それがＴＰＯってもんでしょ」

美月、いきなり立ち上がる。顔が急に引き締まり、目つきも鋭く、声も凛とする。

美月　「いい、上原君。歴史は暗記の教科ではないのよ。全て原因があっての結果が連綿と続いてるだけのことなの。一つの時代は一つ前の時代の結果であり、一つ先の時代の原因であるの。その時代が何故そうなったかを、それより前の時代から探り出すこと。時代の要因が次の時代をどう変えるのかを突き止めること。それが歴史。当然、現代もその流れの一部であるから、前の時代の結果であ

るし、先の時代の原因でもある訳。歴史を勉強するのは今までのときの流れから、未来がどうなるのか割り出すため。歴史学っていうのは、そういう推理の学問なのよ。判った？上原君。…そこ！興味がないなら聞かなくてもいいから人の邪魔になることだけはやめなさい！」

淳、唖然として美月を見上げる。そして、小さく拍手する。しゃべり終わった美月は照れたように耳の後ろを掻きながら、再び座る。

淳　「さすがプロだなぁ。俺とは全然違う」

美月　「でもねぇ、結構苦労も多いの。なんかねぇ、ららに教師は合わないのかなぁって。最近そう思ってるんだ」

淳　「そうか？今のちょっとだけでも、俺がこの前やった教育実習とは比べ物にならないぞ。…もしかして、ららが先公やってるのは、俺がやってたから？」

美月　「え？やってたって、何を」

淳　「だから、ららが先公なのは俺が教員やってたからかって聞いてんだよ」

美月　「おとーさん、学校の教師なんかやってなかったよ」

淳　「そ、そうなのか？…チッ」

美月　「あ、そういえば、おとーさん、教員免状持ってたんだよね。採用試験も受けたの？」

淳　「先月、受けた。いま、結果待ち」

美月　「そうかぁ。じゃあ、残念だったんだ」

淳　「そうかぁ。そうだろな。試験、全然判らなかったもんなぁ。ま、教育実習やって、俺に教員は向いてないって判ったけどさ」

美月　「向いてないって思った？」

淳　「なんか、うまく教えられないんだよな。俺の言ってることが理解してもらえないとイライラしちゃうし」

美月　「おとーさんもそうなんだ」

淳　「しょうがない。夏休み明けたら、竹越（たけこし）に頼んで、あいつのバイト先のソフトハウス紹介してもらおうかなぁ」

美月　「えっ？おとーさん、まだ就活してないの？教員採用試験受けたって事は、いま、大学四年なんでしょ」

淳　「なんだよ、シューカツって」

美月　「就職活動」

淳　「変に省略するなよ」

美月　「それにしても、いま何月だっけ？八月だよね。そんなんで大丈夫なの？」

淳　「科の半分ぐらいは内々定貰ってるけど、まだ何もやってない奴も多いぞ。第一、まだ協定前じゃんか」
美月　「なに、協定って」
淳　「就職協定」
美月　「就職協定？なにそれ？」
淳　「十月になるまでは就職活動禁止！ま、守ってるところなんてどこもないけどな」
美月　「十月？そんなんで、就職先決まるの？！」
淳　「会社選ばなきゃ、どうにかなるだろ」
美月　「…。さすがバブル初期ね」
淳　「バブル？」
美月　「んっ…。なんでもないっ」
淳　「…そうかぁ、落ちたのか、教員採用試験。覚悟はしてたけど、落ちるのはちょっとショックだなぁ」
美月　「らら、余計なこと言っちゃった？」
淳　「ま、しょうがないか」
美月　「大丈夫だよ。なるようになるよ」
淳　「そうだな。…なるようになる」
淳、美月　「ならないようにならない」
淳と美月、顔を見合わせて笑う。

淳　「なに？俺が言ってた？」
美月　「うん。ときどきね」
淳　「そうか、言ってたか……。ふー。しょうがない。夏休み明けたら、シューカツだ」
美月　「はーぁ。ららももう一回、就活しようかな」
淳　「なんでだよ。ららはもう勤めてるじゃんか」
美月　「だからぁ、いま、ちょっと悩んでるだよね。なんか学校の先生、自分には合ってないのかなって」
淳　「なんかヤな事でもあるのか？」
美月　「んー。ちょっとね」
淳　「そうかぁ。…でも大丈夫。辞めるにしろ続けるにしろ、なるようになる。ならないようにならない」
美月　「…うん。そうだね」

岡田タエ子（おかだたえこ）が淳の部屋の前を通り過ぎようとする。が、部屋の中から声が聞こえるのに気がつき、立ち止まる。

淳　「でもなぁ、俺、自分に会社勤めが勤まる自信がないんだよなぁ。自分で言うのもなんだけど、型にはまるタイ

プじゃないと思うんだ」
美月　「ららも」

タエ子、淳の部屋のドアをノックする。

タエ子　「上原君。いるの？」
淳　「はーい！」

淳、立ち上がって玄関に向い、ドアを開ける。

淳　「あ、大家さん。なんですか？」
タエ子　「いやね。声が聞こえたからいるのかなって」
淳　「あ、すみません。うるさかったですか？」
タエ子　「だいじょうぶよ。ちょっとぐらいうるさくっても。どうせ夏休みで、アパートには上原君以外、誰もいないんだから」
淳　「大山さんも留守ですか？」
タエ子　「そうそう、その大山君。実家帰ったかどうか、上原君、知らない？」
淳　「さあ？」

美月が玄関に寄ってくる。

タエ子　「あら、恋人が来てたの。それじゃあ、お邪魔だったかしら」
淳　「あ、いえ、恋人なんかじゃ」

美月、軽く会釈をする。
タエ子、嘗めるように美月を見る。目がミニスカートでしばらく止まり、そして、顔でまた止まる。

タエ子　「あ、あら、妹さんね。目のところなんかお兄さんそっくりね」
淳　（美月に向い）「ここの大家さん」
美月　「父がいつもお世話になってます」
タエ子　「ちち？」
淳　（美月に向い）「お前は向こう行ってろ」

美月、淳を無視する。淳、軽くため息をつく。

淳　（美月に向い）「ららは向こう行ってろって」

美月、ニコッとして奥の和室に入り障子を閉める。
淳、耳の上に人差し指の先を押し当て、ねじる。
淳　「すいません。ちょっとココが弱いもんで」
タエ子　「そう。大変ねぇ。でも、あの格好。おばさん、向かいの溝口さんのお仲間かと思っちゃったわよ」
淳　「溝口さん？あ、アヤカさんですか」
タエ子　「そ、ホントは溝口圭子（みぞぐちけいこ）っていうんでしょ。でもアヤカとか名乗っちゃって。絶対水商売の子よね。あの子」
淳　「一回、偶然、そういう店で見かけました」
タエ子　「上原君も水商売の店とか行くの？ダメよ。まだ学生なんだから」
淳　「は、はぁ」
タエ子　「そんなことじゃなくて、大山君のこと、知らない？」
淳　「大山さん？ですか」
タエ子　「いつもはお盆にも帰らないのに、珍しく今年は帰ろうかなって言ってたから心配になって」
淳　「何が心配なんですか？大山さんはもう立派な社会人なんだからだいじょぶでしょ」
タエ子　「いやね、なんか今日帰るって言ってた気がするのよ」
淳　「はぁ。それで？」
タエ子　「だから…って、上原君ニュース見てないの？」
淳　「すいません。うちにはテレビ、ないもんで」
タエ子　「あら、そうだったわね。あのね、飛行機が行方不明になったのよ。きっと小川さんの呪いよ。大山君、納豆好きだから」
淳　「ちょ、ちょっと待ってください。全然話が判んないんですけど。飛行機が落ちたのは小川さんの呪いで、それは大山さんの納豆好きのせい…ですか？」
タエ子　「何言ってるの、まだ飛行機は落ちてないわよ。縁起でもない。行方不明になっただけ。小川さんのこと数百人の殺人犯だなんていわないで。…ま、十中八九、海に落ちてるんだろうけど」
淳　「大家さん、落ち着いて。落ち着いて。順追って話してくれませんか？まず、飛行機が行方不明になったのは判りました。次は小川さんの話、お願いします」
タエ子　「しょうがないわね。ゆっくり話すから、ちゃんと聞いてね。…こんなんで判んないなんて…。妹さんがあんななんだから上原君はもっとしっかりしなくちゃダメ

よ」
淳　「はぁ、すいません」
タエ子　（ものすごくゆっくり話す）「あのね。小川さんが、大山君の納豆、臭くてたまらないって嫌っているのは知っているわよね？」
淳　「え？そうなんですか、知らなかったです」
タエ子　（ものすごくゆっくり話す）「そう？そうだったのよ。毎日、大山君が朝晩食べてる納豆が臭くてたまらないって。それでね」
淳　「もう少し速く話してもらっても大丈夫です」
タエ子　「そ、そうね。もうちょっと速く話すわ。…で、大山君の納豆って本場の藁納豆でしょ。それに大山君、時々ゴミの日忘れて、一週間ぐらい出さないときあるから。特に夏場なんかは匂いがきついのよ。ほら小川さんは大山君の隣でしょ。去年は小川さん、夏休み早々に大阪に帰ったからよかったんだけど、今年はバイトでずっとこっちに残ってたでしょ」
淳　「そういえば、残ってますね。小川さん」
タエ子　「大阪の子には、納豆は天敵なのよねきっと。で、耐え切れなくなった小川さん、捨ててあった大山君のゴミから納豆の藁拾って、藁人形作って、自分の部屋の壁にゴンゴンって」
淳　「え？納豆の」
タエ子　「そう」
淳　「納豆の藁人形を自分の部屋に？」
タエ子　「そう」
淳　「それはかえって臭いでしょう。自分の部屋の壁に古い納豆の藁、打ちつけるなんて」
タエ子　「そうなのよ、今までは部屋の周りだけが納豆臭かったのに、小川さん、自分の部屋の中まで納豆臭くなっちゃって。ま、呪いをかけようなんて事するから、バチが当たったのかもね」
淳　「でも、なんで納豆の藁でなんか、藁人形作ったんですか」
タエ子　「ほら、ここは田舎じゃないから藁なんかめったにないでしょ。藁はお正月のお飾りぐらいじゃない。今はお盆前で、お正月までまだまだ間があるから。それに、藁人形には呪う相手の物を入れると効果的って言うでしょ」
淳　「でも何も納豆にしなくても。大山さんのゴミあさったなら、他のもの入れれば…」
タエ子　「上原君も判らない子ね。小川さんが憎いのは大山君じゃなくて納豆じゃない。なに？上原君は小川さん

のこと、大山君を呪い殺すような怖い子だと思ってるの？」
淳　「いえいえ。そうは思ってないですけど。というか、いままで小川さんが藁人形作ってるなんて知らなかったですし」
タエ子　「ウソおっしゃい。上原君、知ってたでしょ。五寸釘。五寸釘って言ったら、呪いの藁人形しかないじゃない」
淳　「はぁ？五寸釘？」
タエ子　「小川さん、おばさんのところに、五寸釘くれませんか？って来てね。そのとき言ってたわよ、残っている部屋は全部回ったんだけど、誰も五寸釘持ってなかったって。先月末のことよ。そのときここに残ってたのは、大山君と小川さんと一〇三の暗い子と上原君だけだったじゃない。来たんでしょ小川さん。五寸釘貰いに」
淳　「五寸釘？…あ、釘持ってないかとは聞かれましたけど。なかったんで、画鋲じゃいけないかって言ったら、じゃあいらないって。あれがそうなんですか？」
タエ子　「小川さんが上原君になんて聞いたかなんか、おばさん知らないわよ。それにしても、藁人形打つのに画鋲だなんて、上原君も面白いわねぇ」
淳　「…はぁ」
タエ子　「まあ、小川さんもちょっと抜けてて、あの長い五寸釘をここの薄い壁に打ち付けちゃったものだから、先が隣の部屋に出ちゃってね。隣の部屋はほら大山君。で、大山君、鼻の下から血を流しながら、おばさんのところに来て、壁から釘が飛び出してるから見てくれって」
淳　「鼻の下？」
タエ子　「おばさん、見に行ったら、釘の出た先が、ちょうど、何とかって言うアイドルのポスターが貼ってあったところで、そのアイドルの鼻の穴から二センチぐらい飛び出してたかな。でも、なんで、大山君、鼻の下から血、出してたんだろうねぇ」
淳　「…さぁ」
タエ子　「でもそれが、あまりにもそっくりだったから、おばさん大山君に言ってやったのよ。箒でも掛けるのかって。ははははは」
淳　「…。すいません。何がおかしいんですか」
タエ子　「はは…は、は、は。…上原君はなんにも知らないのね。くだらないテレビばっかり見てないで、たまには落語も見なさい。粗忽の釘って噺。…って上原君のとこテレビないんだったわね」

淳　「はぁ。で、それで？それが飛行機とどう？」
タエ子　「判らない？ほら、粗忽の釘でしょ。聞き届けた神様も、きっと粗忽者だったのよ。で、…って、やっぱり呪いを聞くのも神様なのかしらね。それとも悪魔？」
淳　「普通、丑三参りって神社でやるから、神様でいいんじゃないですか」
タエ子　「そうね、神社だから神様ね。で、その粗忽の神様が呪いの対象の納豆を大山君と間違えて、大山君が帰省で乗った飛行機、落としちゃったのよ」
淳　「んー。粗忽者の神様が、大山さんの乗った飛行機、落とした？」
タエ子　「だから、まだ行方不明で、落ちてないって言ったでしょ。ま、多分落ちてるけど」
淳　「でも、大山さん、田舎、水戸ですよ。飛行機じゃ、帰んないんじゃないですか？帰るとしたら電車でしょ」
タエ子　「あれ？そうだったかしら。あらいやだ。そうだわね。水戸だから納豆ばっかり食べてるんだったわね。あー。安心した。そうよねぇー。大阪行きの飛行機に水戸出身の大山君は乗らないわよね」
淳　「飛行機、大阪行きなんですか？」
タエ子　「ニュースで繰り返し、羽田発大阪行き日航一二三便って繰り返し言ってるから、覚えちゃったわよ…。あれ？大阪？じゃあ、大山君じゃなくて小川さんよ。神様、納豆と小川さん間違えちゃったんだわ。あらやだ。どうしましょ」
淳　「小川さん、今年は帰らないんじゃないですか？」
タエ子　「ほら、藁人形がバレて急に恥かしくなったんでしょ。バイト休んで、大阪帰るって、先週。一週間ほど留守にしますからよろしくお願いしますって、先週の金曜の朝に」
淳　「先週の金曜ですか」
タエ子　「大変。おばさん、小川さんの実家に連絡してみるから。なにか判ったら上原君にも教えるからね！」

タエ子、慌てるように外へ飛び出し、階段を下りていく。
淳、あきれながら部屋に戻る。
和室では美月が、淳が隠していた雑誌を見ている。

美月　「なんだったの？大家さん」
淳　「飛行機が落ちたんだって。納豆の呪いで。ってまだ落ちてないけど」
美月　「飛行機？あ、そんなこともあったみたい。確か群

馬県の山に落ちた奴でしょ。御巣高とか。…それって納豆の呪いだったの？」
淳　「群馬？なんで東京から大阪への飛行機が群馬で落ちるんだ」
美月　「知らないよ。ららが生まれる前のことなんだから。それにしても、おとーさん。こんな本持ってて逮捕されない？」
淳　「ん？…おい。何見てんだよ。引っ張り出すなよ」
淳、美月から雑誌を取り上げる。そして、ビニールロッカーの後ろに隠す。
美月　「写ってるの、明らかに小学生じゃない。おとーさんって児童性愛者なの」
淳　「ふ。ふつーに本屋で売ってる本持ってて、つ。捕まる訳ないだろ。それに、俺、そんな変態じゃなくて、ただ本屋で買っただけだよ」
美月　「えぇー！こんな本、普通に売ってるの！」
淳　「あ、いや。あの、さすがに、ふつーの売り場にはないけど」
美月　「ひどいもんね。子供の権利条約前は」
淳　「あ、いや。だから、俺はロリコンじゃないからな」
美月　「どうだか」
淳　「ホントだってば。軍曹じゃないんだから」
美月　「軍曹？軍曹って、おとーさんの友達の、あの体の大きい自衛隊の人？」
淳　「自衛隊？まだ大学行ってるけど、軍曹。留年決定って言ってたから来年は卒業できないみたいだけどな」
美月　「一度、うちに遊びに来たことがある人でしょ。らが小学生のとき。確かマロさんとか言った大学の先生と安東さんと一緒にＰＳ２のゲームやった。…あの人ロリコンなの？」
淳　「ＰＳ２？…軍曹か？あぁ。あいつは小さな子が好きだな。本人は隠してるつもりらしいけど、バレバレ」
美月　「そうかぁ、だからあの時、らの頭やたらとなでてたんだぁ。変だと思ったんだよなぁ」
淳　「なに！軍曹、そんなことしたのか」
美月　「んー。正確に言うと、そんなことした、じゃなくて、これから、そんなことする、なんだけど」
タエ子の声　「上原君～！小川さん、実家にいたから！小川さんの実家に電話したら、一昨日から向こうにいるって！おばさん、安心したわよ！」

暗転。（場は変わらない）

夜明け間近。外はすでに薄明かりになっている。
美月はちゃぶ台に覆い被さって寝ている。淳は足をちゃぶ台下にいれ、畳に大の字になって寝ている。
淳、もそもそと動き出す。薄く目を開けて起き上がると、台所の横のトイレに入る。
間。
やがて、淳が水を切るように手を振りながら、トイレからでて、眠そうに和室に戻る。
和室に戻り、寝転がろうとした瞬間、美月に気がつく。
淳、しばらくの間、美月にみとれる。
そして、抱きかかえるようにして、美月を仰向けに畳に寝かすと、ちゃぶ台をビニールロッカーに立てかけ、部屋の隅に丸めてあったタオルケットを美月に掛ける。
が、美月は横に寝返りを打ち、足のタオルケットははだけてしまう。タオルケットから飛び出した、ミニスカートの足。
淳の目がその足に釘付けになる。そして、その視線はゆっくりと上半身にあがっていき、胸でしばらく止まり、顔に行き着く。
淳、じっと美月の顔を見つづける。そして、優しく美月の頬をなでる。
淳、美月に顔を近づけ、キスしようとする。
美月、ふと目を開ける。しばらく状況を確認するように、寝ぼけ眼で淳を見つめる。が、やがて、ビクッとする。

美月　「お、おとーさん！なにしてるの！」
淳　「あ、いや。な、なにも。…まだ、なにもしてないじゃないか」
美月　「うっ。…じゃあ、なにしようとしてたの！全く、なんて親なの！寝ている自分の娘を犯そうとするなんて！」
淳　「そ、そんなことする訳ないだろ。…ららはかわいいなって見とれてただけだろ。ほら、莫迦な親がよく言うじゃんか。自分の娘が世界で一番かわいいって。…それに、万が一、何かしようとしてたとしても、そもそも、ららがそんな服着てくるからいけないだ。若い女が、若い男の所で、パンツ見せながら寝てるってのは、そういうことだろ。それに、ほら、俺は俺が親だなんて信じてないんだからな」

美月　「言ってること、矛盾してるじゃん！」

淳、いきなり立ち上がる。

美月も起き上がる。そのとき、美月に掛かっていたタオルケットが下に落ちる。

美月、そのタオルケットを見つめる。

淳　「そもそも、なんでそんな服きてるんだよ！大家さんの言うとおりだよ。向かいのトルコ嬢じゃあるまいし」

美月、タオルケットを見ている。

淳、Tシャツの捲れを叩いて直すと、ラジオの前に落ちている財布を取り上げる。

淳　「そんな服着て、挑発しときながら、なんだ。その言い草は」

美月、タオルケットを見ている。

美月の声　「最近、おとーさんの言うことは、矛盾だらけ！自分のことばっかりで、人のこととか、わたしのことかとか考えてないじゃん！」

淳の声　「うるさい！」

何かが割れる音。それに続いて、大きなものが投げられる音。

美月の声　「いい加減にしてよ！それが大人のやることッ！」

ドンッと扉の閉まる音。

美月、ビクッとする。そして淳を見る。

淳、美月には目を合わせず、部屋から出ようとする。

美月　「どこ行くの！」

淳　「喉渇いたから、そこのコンビニで飲むもん買って来るんだよ！」

淳、美月に背を向ける。

美月、ぎゅっと淳のTシャツの後ろを掴む。そして下を向く。

淳　「離せ」

美月、下を向いたまま顔を上げない。
淳、美月を無視して部屋から出ようとする。
美月、両手で淳のTシャツを掴む。

美月　（弱弱しく）「…いいじゃん」

淳、美月を引きずるように前に進む。

美月　「いいじゃん。…喉渇いたら、水飲めばいいじゃん」

淳、振り返って、美月を睨みつける。
Tシャツを掴んだままの美月は、淳の体のねじりで、淳にしがみつくような体勢になる。
それでも美月は下を向いたままである。

美月　（泣きそうな声で）「水でいいじゃん。外行くことないじゃん」

美月、台所側から、淳の体を部屋の境の柱に押し付ける。
淳、半ば唖然とする。

美月　「外、行かないでよ！」
淳　「どうしたんだよ」

淳、力を抜く。美月は頭を淳の胸につけ、淳を柱に押しつづける。

淳　「一体どうしたんだよ。なに泣いてんだよ」
美月　「泣いてなんかないよ。しょぼしょぼしてるだけ。わたし、朝はいつも目がしょぼしょぼなの知ってるでしょ」
淳　「知らないよ」
美月　「知っててよ！わたしのことは、なんでも知っててよ！」
淳　「…判った」

美月、淳を和室の窓際まで押し込む。淳はされるままになっている。
美月、後ろを向くと指で顔を拭いながら、台所に向かう。

淳　「…キスしたかった。…キスしようとした」

美月、振り返る。

淳　「ららの寝顔見てたら、なんだかキスしたくなって、キスしようとした。だからキスさせろ」

美月　「…ヤ・ダ・ヨ」

美月、涙目のまま、ニコッと笑い。台所に行く。そして、冷蔵庫を開けるが、すぐに閉め、流しに置かれていたコップを簡単に洗うと、水を注ぐ。

淳、財布をラジオの前に放ると、ドッと胡座をかく。

美月、コップをじっと眺め、そっと口をつけて、一口だけ飲む。そして、コップを持ったまま和室に戻る。

美月、コップを半回転させてから淳に渡す。

淳、コップを受け取ると、グッと水を飲む。

美月　「わたしの…ららの分も残しといてよ」

淳、飲むのをやめ、コップを美月に渡す。

美月、コップを受け取ると、コップをくるっと回し水を飲み干す。

美月　「間接キッスぅ〜」

淳　「ばーか」

美月、コップを持って、台所に行き、コップをざっとすすぐ。

美月　「でも、このスカート、変かな」

淳　「…ん？…短すぎだろ」

美月、コップを流しの中に置きっぱなしにして、和室に戻ってくる。

美月　「そうかなぁ。うちの学校の子なんか、もっと短い子ばっかりだよ。ま、長いとは言えないのは確かだけど」

淳　「それより短いなんて、それこそ、パンツ見えちゃうじゃんか」

美月　「うん。だから、みんな、階段上がるときとかは、鞄で隠しながら上ったりしてるんだよね」

淳　「なに考えてんだよ。隠したいのか見せたいのか、どっちかにしろって。…ま、ららもここではそんなカッコで外出るなよ」

美月、淳の隣に座る。

美月　「ダメかなぁ」

淳　「ダメだね。言ったろ、向かいのアパートのトルコ嬢じゃないんだから」

美月　「トルコじょー？…前のアパート、トルコの人、住んでるの？」

淳　「ああ」

美月　「で、なんでトルコの人と一緒じゃいけないの？この時代、そんなに外国人に排他的だったっけ」

美月、仰向けに寝転がる。美月の視線の先に黒いビニール袋。

美月　「ねぇ。おとーさん。あれ、なに？」

淳　「ん？…雨漏り」

美月　「雨漏り？洗面器、下に置くやつ？」

淳　「畳に洗面器置いたら、雨の日、布団敷けないだろ」

美月　「ふーん。生活の知恵、だ」

淳も美月の隣に仰向けに寝転がる。

淳　「去年。去年の春に屋根張り替えたから、今はしないけど」

美月　「ん？」

淳　「雨漏り。もうしないけど、面倒だから、まだそのまま」

美月　「雨漏り、もうしないのか。…それはちょっと残念。一度見てみたかったなぁ」

淳　「なに言ってんだ。結構大変なんだぞ、畳とか、布団とか濡れると」

美月　「でも、いうんでしょ。洗面器。ぽんっ。ぽんっ。って。…見てみたかったなぁ…」

美月、瞳を閉じる。

間。長い間。

淳、半身を起こし、タオルケットを横にして、美月と自分の腹に掛ける。

そして、しばらく美月の顔を見つめる。

美月　「キスなんてしたら、ダメだからね」

淳　「や。絶対してやる。チャンス見て、絶対してやる」

淳、笑いながら仰向けに寝る。

美月　「タオルケット。ありがと」

淳　「ん」

美月　「らら、すぐおなか冷えちゃうんだよね」

淳　「ん。知ってる」

美月　「ウソばっかり」

淳　「俺もそうだから」

美月　「え？」

淳　「知ってたろ。俺も、腹、すぐ冷えるの」

美月　「え？…そうなんだ」

淳　「知ってろよ」

美月　「そうだね。…わたし、おとーさんのこと。全然知らなさすぎだよね」

間。

美月　「ごめんな…」

淳　「ららの彼氏はどんなヤツなんだ？」

美月　「え？わたし？彼なんていないよ」

淳　「タイムマシン作ったヤツ。彼氏なんだろ」

美月　「違うよ。彼氏いない暦二十四年。淋しい人生」

淳　「なに？じゃあ、恋人でもないただの知り合いに、タイムマシン借りたのか」

美月　「うーん。なんて言うかなぁ。ららも一応、開発メンバーの一番端っこに入れてもらってるから」

淳　「えっ？ただの新米高校教員がタイムマシンの開発メンバーに入ってるのか？」

美月　「ん。名簿上は」

淳　「ホントに？」

美月　「あ、ららに理論とか機械構造とか聞かないでよ。全然判んないから」

淳　「じゃあ、なんでメンバーに入ってる」

美月　「ん。それはねぇ。ららがヒント言ったから。ただそれだけ」

淳　「ヒント？」

美月　「そう言えば、それも元はおとーさんの受け売りか

も」
淳　「俺の？」
美月　「いま、おとーさんは未来のわたしと話していて、わたしは過去のおとーさんと話してる」
淳　「は？タイムマシンで未来から来た人間が過去に人間と話す？俺、そんなこと言うのか」
美月　「そうじゃなくて。ららがものすごーく速く動くとゆっくりのおとーさんは過去になって、おとーさんから見ると、ららは未来で…、あれ？逆だっけ？」
淳　「はは。相対性理論だね」
美月　「それとE＝mc2。元気いっぱい速度もいっぱい！」
淳　「そんなことも言ってた？」
美月　「あと、火星人で火星の土地売ってるとか」
淳　「ホントの事いうと、それは、安部公房」
美月　「で、それがね。ヒントになったらしくて、完成したんだって」
淳　「火星の土地が？」
美月　「相対性理論とエネルギー・質量保存の法則。火星は関係ないけど。そんな流れで、なんだか名誉会員になっちゃった。ま、それも、非公式の名誉会員だけど」
淳　「ま、なんにつけ、偉い偉い」
美月、突然上半身を起こす。
美月　「あっつい。ね、クーラーは」
淳　「ある訳ないだろ」
美月　「扇風機、なんでつけないの」
淳　「壊れてる」
美月　「なんで～」
淳　「故障。ふた開けたけど、判らなかった」
美月　「あつい～！窓もっと開けていい？」
淳　「どうぞっ」
美月、起き上がり、窓を全開にする。そして、窓枠に腰掛ける。
淳も身を起こして、座る。
美月　「おとーさんは彼女いないの？」
淳　「この部屋見て、いるように見えるか？」
美月　「そりゃー判んないよ。こういうの好きな人だっているんじゃない？」

淳　「なるほど。雨漏りの音聞きたいとか言う、ららみたいなやつもいるもんな」
美月　「そうだよ」
淳　「じゃあ、俺達、付き合う？二人とも相手いないんだし。気も合うじゃん」
美月　「え～。…うーん。ちょっと考える」
淳　「なんだ、即答じゃないんだ。真剣に考えるなよ」
美月　「え？冗談だったの？」
淳　「はは。冗談の訳ないだろ。本気本気」
美月　「でも、付き合っても、すぐに捨てられちゃうんでしょ」
淳　「なんで」
美月　「だって、おとーさん、もうすぐおかーさんと付き合いだして、結婚するじゃない。今のわたしの歳にはおとーさん結婚してるんだよ」
淳　「そう言われてもなぁ。全然、実感ないんだよなぁ」
美月　「…おとーさんって、おかーさんのこととか未来のこととか、全然聞かないよね」
淳　「聞いたじゃん」
美月　「え？いつ？」
淳　「ディズニーランドが好きなのか？って」
美月　「あぁ。でも、それだけじゃん。…おかーさんのこととか、未来のこと、あまり、興味ないの？」
淳　「あるよ。興味。でも、知らないほうが面白いことって、世の中いっぱいあるじゃん」
美月　「うん。まぁ」
淳　「それに、もう、未来のいろんな事が判ったし」
美月　「え？…例えば？」
淳　「俺、あと三年で結婚するとか、その翌年、子供が生まれるとか。教員採用試験に落ちるとか」
美月　「うーん。そうだね」
淳　「あと、未来はみんなパンツを見せながら歩ってるとか。ディズニーランドはだんだん大きくなるけど、浦安からは独立しないとか」
美月　「みんながみんな、スカート短い訳じゃないけど」
窓の外の向かいの道を派手な服を来た派手な化粧の溝口圭子（みぞぐちけいこ）が千鳥足で通る。
美月、ふと圭子を見る。
淳　「それと、多分。…多分、昭和は六十四年の三月を迎えることなく終わるとか」

美月　「え？なんで？らら、そんなこと言った？」
淳　「俺は教員採用試験に受かるほど頭は良くないけど、まったくの莫迦って訳じゃないぞ」
美月　「え～。なんで判ったの～」

美月、立ち上がる。
外の圭子が美月に気がつき、やがて、不信そうな目つきで美月を睨む。

淳　「あと、今回のタイムマシン実験は失敗する」
美月　「え？どうして」
淳　（小声で）「そして、俺は…俺は」

美月、外の圭子が自分を見ていることに気がつき、怪訝に思いながらも軽く会釈をする。
圭子、美月から目を離さない。

美月　「おとーさん。…おとーさん。外、変な人。見てる」
淳　「ん？」

淳、窓に近寄り外を見る。そして圭子を認め、会釈する。
圭子の顔が険しくなる。

圭子　「ウーさん！」

淳、再び会釈する。
圭子、よろけながらも勢い良く、南の階段を上がってくる。

美月　「誰？」
淳　「あれが向かいのアパートのトルコ嬢」
美月　「え？あの人がトルコ人？」

圭子、「ウーさん」と叫びながら、淳の部屋の前までたどり着き、ドアを叩く。
淳、しぶしぶ玄関に向かう。美月も半ば淳に隠れるようについていく。
圭子、いきなりドアを開けて中に入り込む。そしてサンダルを脱ごうとするが、うまく脱げず、そのままあがり込み、美月を平手打ちにする。
淳、圭子を制する。

淳　「アヤカさん！なにするんですか！」

圭子　（美月に向い）「ウーさんはアタシのお客なんだから、手出さないでよね！」
美月　「？」
淳　「なに言ってるんですか、アヤカさん！」
圭子　（美月に向い）「アンタ、最近流行りのホテトルでしょ。アンタみたいなのが増えて、こっちはお客が減って大変よ」
淳、美月　「ホテトル？」
圭子　「ホテルまで出かけてくトルコ。こういうマンションとかホテルに来る出張トルコ。ウーさんも、こんな女こんなトコに呼ばないでお店来てよぅ」
美月　「ここって、明らかにホテルとかマンションじゃなくて、アパートだよね。それも、思いっきりボロアパート」
淳　「ボロとか言うな。ま、否定はしないけど」
圭子　「なにかわい子ぶってんの。いいトシのくせに。素人はだませても、私はプロなんだからね。ウーさん。この子、若そうに見えるけどウーさんより年上だよ」
美月　「騙してなんかない。はじめからちゃんと二十四ですっていってるもん。ね。おとーさん！」
圭子　「ほーら、ボロが出た。『おとうさん』だって。ウーさんはね、普段アンタが相手しているような年寄りのスケベ親父じゃないのッ。まだ、学生さん！『おとうさん』なんて呼んだって興奮しないの！」
淳　「アヤカさん。落ち着いて。何勘違いしてるんですか。ららはそんな商売女じゃなくて…」
圭子　「商売女？悪かったわね。商売女で」
淳　「そうじゃなくて…。うーん。とにかく…」
圭子　「へん。妹だとか言うつもりなんでしょ。確かに一見まともに見えるけど、普通の子がそこまで短いスカートはくと思う？」
美月　「…」
圭子　「普通のお嬢様風っていうのが流行りだもんね。最近。……ま、どーでもいいけどアタシのお客は取んないで！」
淳　「お客、お客って、いい加減にしてください。そこまで言うほどじゃないじゃないですか。一回しか行ってないんだし」
圭子　「なに言ってるのウーさん。一回だなんて。あのとき、三回イったじゃない」
淳　「うっ。…と、ともかく、ららはそういう女じゃないですから」
圭子　「ふーん。アンタの源氏名、ララっていうの。最近

の子は、ホントそういう変な名前ばっかりだねッ」
圭子、三月を睨む。美月も圭子を見返す。
淳は美月と圭子を交互に見る。
圭子　「はん。確かに兄と妹なんだ。あ、アンタのほうが年が上ってことは姉と弟か？はーん。ウーさんも自分の姉貴がそういう商売してるんだったら、うちなんか来ないでそっち行けばいいのに！」
淳　「？」
圭子　「なるほどね。店に行かないで自分とこで乳繰り合ってんだ。姉弟で乳繰り合うなんて、はん、変態家族が」
淳　「なに言ってるんですか、アヤカさん。ららは俺の姉貴なんかじゃないですよ」
圭子　「そこまでそっくりな顔しといて、そうシラを切る？」
美月　「おかしい？家族が互いを愛し合うのはおかしい？父親が娘をいとおしいと想って、娘がおとーさんを好きだと想うのはおかしいッ？」
圭子　「父親と娘が、姉が弟とセックスするののどこがまともだって言うのよ！」
美月　「そりゃあ、そこまでしたら変態よ。あたりまえじゃない。でも、よく言うわね、女の体を商売道具にしているあなたが。そもそもね！あなたみたいな、男に媚売って、体売って、生活しようなんて思ってる人がいるから、男に寄生して生きていこうなんて人がいるから、二十世紀は最後まで男尊女卑の風潮が消えないのよ。どうせ、あなたも思ってるんでしょ。若いときはテキトーに楽しんで、三十ぐらいになったら平凡に結婚して、子供作って、平凡に暮らしたいって。若いときに遊びあるった人間が、平凡に暮らせると思う？この時代に来てホント良かった。よーく判ったわ。今の家庭環境がなんでこんなに悪いか。学校教育が崩壊しているか。まさにこの時代にある原因が、今の時代の結果になってる訳よ！あなたみたいな親が産んだ子が、しつけなんか一切されず、甘やかされたり、ほったらかしにされたりして、他人と一切コミュニケーションが取れなく育っていくのよ。そんな子を押し付けられるこっちの身にもなってよ」
圭子　「アタシだって結婚したら、いい奥さんになるわよ」
美月　「なれる訳ないでしょ。一時の迷いで子供作って結婚して、すぐにダンナに飽きて離婚して。あなたらの世代はそんな人ばっかりじゃない！別れたら、またすぐに他

の男とくっついて。全く見境ない。そんなんだからＨＩＶだってあっと言う間に広がるのよ。そう言えば、あなた、アヤカって言う名前だったわよね。わたしが教えてるクラスにもいるわよ。あなたと同じ名前のものすごく暗い子。そのクラスの担任に聞いたら母子感染のＨＩＶだって。あなたたちの考えなしの行動が次の世代まで傷つけてるのよ！そんなんだから、当然その子はいじめられるわよ。いじめがない学校なんてある訳ないじゃない。今のいじめはメチャクチャ陰湿。そりゃあ、いじめる側だって一生治らない病気に感染したくないから、直接手とかは出さないから。陰湿な精神的ないじめ。でも、それを注意しようもんなら、いじめてる側の親が、子供の人権とか喚きながら怒鳴り込んでくるし。ホントあなたたちの世代は最低よ！」

圭子　「な、なに言ってんの。訳判んないことばっかり。アンタ、頭おかしいんじゃないの」

淳　「アヤカさん。すいません。今日はもう帰ってください」

淳、圭子を部屋の外に押しやる。圭子はあっさり部屋の外に出る。そして、「変態家族が！キチガイ家族が！」と捨て台詞を吐きながら階段を下りていく。

淳、圭子が立ち去るのを確認するとゆっくりと台所に戻る。

部屋の台所では、美月が黙って、雑巾で床を拭いている。

淳、美月の頭をなでるように軽く叩く。

淳　「ららは偉いな」

美月　「全然偉くないよ」

淳　「自分の意見を言えるんだから、そりゃ偉いだろ。さすが社会人だなぁ」

美月　「相手のこととか考えないで、ガガガガガって言っちゃうんだから。思ったことそのまま言っちゃうんだから」

淳　「いいんだよ。それで。それがららの長所だろ」

美月　「短所だよ」

淳　「どっちでもいいよ。長所でも短所でも。それがららなんだから。…でも、さっきの。言ってる内容は半分も判らなかったけどな」

美月　「え？そう？…説明する？」

淳　「いいよ。しなくて。楽しい話じゃないんだろ？」

美月　「うん」

淳　「でも、話せば、ららが楽になるんだったら、俺は聞くぞ。…いつでも聞くぞ」

淳、再び美月の頭をなでるように軽く叩く。

美月　「やっぱ、このスカート、変かな」
淳　「そうだな」
美月　「そうかぁ」
淳　「絶対、そんなカッコで外出るなよ」
美月　「うん。…でも、なに着ればいい」
淳　「俺のGパンとかTシャツとかあるだろ」
美月　「どこに」
淳　「ロッカーの中」
美月　「うん」

淳、美月、和室に戻ってくる。

淳　「なんだ。まだ五時過ぎたところか。変に目が醒めちゃったな」
美月　「うん」
淳　「ごめんな。…先に謝っとく」
美月　「なに？」
淳　「俺、ららの母親と離婚して、ららにヤな思いさせるんだろ」
美月　「なんで？おとーさん、離婚しなかったよ」
淳　「…離婚しな『かった』か」
美月　「うん。あ、ららがさっき言ったこと気にしてるんだ。大丈夫。うちは結構幸せだったよ。ま、そりゃ、わたしの反抗期とか、そういうちょっとしたことはあったけど…。ちょっとしたことは…ね」
淳　「そうか」
美月　「それより、ららのほうがおとーさんにメーワクいっぱい掛けたし、謝らなくちゃいけないこといっぱいだよ。…ごめんなさい」
淳　「子供が親に迷惑掛けるのは当然だろ」
美月　「でも…。…ごめんなさい。本当にごめんなさい」
淳　「まだ早いから、もう一眠りするか」
美月　「え。うん」

淳、畳に寝転がる。

美月　「ねえ。布団とか、ないの？」

淳　「あるけど…。それは勘弁してくれよ」
美月　「なんで」
淳　「今だって、相当自制してるんだぞ。布団の上で、らが寝てたら、耐え切れなくて、さっきの返事を待たずに、絶対、覆いかぶさるからな」
美月　「さっきの返事？…らに付き合ってくれってコクッたやつ？」
淳　「こくった？」
美月　「あ、告白のこと」
淳　「変に省略するなよ」
美月　「あれ、ホントに本気なの」
淳　「本気本気」

美月、淳に背を向けて横になる。そして、くるっと淳のほうを向く。

美月　「絶対、変なことしないでよ！」
淳　「うー。そこは違うだろ『おとーさんなら、いいよ』だろ」

美月、淳に背を向ける。

美月　「おとーさん、へんな雑誌、読みすぎ！」

全照明、落ちる。

パシッというはたく音。

美月の声　「変なことしないでって言ったでしょっ」
淳の声　「まだしてないだろ」
美月の声　「しようとも、しないで！」

暗転。（場は変わらない）

朝はもう明けている。
畳に大の字で寝ている淳。腹にはタオルケットが掛かっている。
部屋には美月の姿は見えない。
宇山弘行（うやまひろゆき）が、手前から後ろを振り向きながらやってきて、玄関ドアをノックする。

弘行　「うえ〜。いる？…おーい。うえちゃん」

淳、もそもそと動き出し、目をつむったまま応える。

淳　「うぉー」

弘行　「俺〜」

淳　「いま開ける」

淳、のそのそ起き上がり、玄関に向かうが、そこでハッと立ち止まり、周りを見回す。

淳　「ちょっと待ってて。いま開けるから」

淳、台所を確認し、ビニールロッカーを開け、トイレを開ける。そして、冷蔵庫の中も確認する。

淳、もう一度全体を見回し、玄関を開ける。

弘行はためらいもせずあがりこむ。

淳　「寝てた」

弘行　「なんかゴソゴソしてたけど、エロ本とか隠してたんじゃないの？」

淳　「ウジャ相手になに隠すんだよ」

弘行　「それもそうか」

淳、タオルケットを部屋の隅に放り、ちゃぶ台をセットする。

淳　「今日はなに？」

弘行　「や、別に用じゃないんだけど。うえ、今週、プール監視のバイト休みだろ」

淳　「あぁ」

弘行　「だから、いるかなと思って。俺も、デパート、定休日だから」

淳　「そうか、今日、火曜か」

弘行　「でもこの一番の暑さ盛りに、なんで一週間もプール休みなんだ？」

淳　「世の中、お盆だろ。お盆に泳ぐと、連れてかれるぞ」

弘行　「ん？先祖に足引っ張られるってヤツ？あれって海の話だろ。それにお盆の最終日の話じゃなかった？」

淳　「プールも海も一緒、一緒。…ってホントは、お盆はみんな帰省するから。小学校のプールは開けてても誰も

こないじゃん」
弘行　「ふーん」
淳　「茶、飲む？」

淳、立ち上がるついでにラジオのスイッチを入れる。ラジオからはクラシック音楽が流れる。
淳、台所に行き、やかんに水を入れガス台にセットする。
そして、和室に戻る。

淳　「飛行機、どうなった？」
弘行　「飛行機？あっ、昨日の」
淳　「群馬に落ちてた？」
弘行　「群馬？よく知らないけど、相模湾で破片が見つかったらしいぞ」
淳　「相模湾？山じゃなくて海なのか」
弘行　「なんで？」
淳　「いや。…ウジャはさ、タイムマシンできたらどこ行く？」
弘行　「タイムマシン？うーん。未来かな。十年後」
淳　「過去しか行けないとして」
弘行　「明治から大正かな。大正デカダンスの頃」
淳　「ウジャらしいな」
弘行　「うえは？」
淳　「俺は大昔。人間がはじめて生まれた時代」
弘行　「なんだよ、急に。タイムマシンなんて」
淳　「親父の若い時代に来たいヤツってどんなヤツかなと思って」
弘行　「ライバル心なんじゃないの。親父を一番身近なライバルって思ってる」
淳　「いや、女。親父を訪ねるのは女」
弘行　「俺に女のこと聞くなよ」
淳　「じゃあ、誰に聞くんだよ」
弘行　「んー。そうか。…ま、ファザコンかな。あとは子供の頃に親父が死んだとか」
淳　「やっぱ、そうだよな」
弘行　「なになに？同人誌の原稿？」
淳　「ん、そんなもん。ついでに、相対性理論。ウジャと話したんだっけ？草野（くさの）とだったかなぁ」
弘行　「どんなの」
淳　「ウジャと話してる俺が、光の速度に近い乗り物乗ってて地球を一周してきて、またウジャと会うと、ウジャは年取ってて、俺は若いまんまじゃん」

弘行　「ああ、アインシュタイン」
淳　「俺が光の速度で動きながらウジャと話をしてると、俺のが時間が遅いから、俺から見ると未来のウジャと話をしていることになって、ウジャから見ると過去の俺と話をしてることになるんじゃない？」
弘行　「なんか違う気もするけど。そもそもそれだけの速さでは動けないし」
淳　「で、Ｅ＝ｍｃ２だよ」
弘行　「アインシュタイン、パートツー？」
淳　「エネルギーは質量と光速の自乗に比例するんだよ」
弘行　「だから？」
淳　「だから、質量を変えずに、エネルギーだけ増大させれば光の速さは平方根で速くなるんだよ。逆に質量を変えずにエネルギーを減少させれば、光の速さは遅くなる！」
弘行　「ちがうって。ｃは定数（じょうすう）！質量を変えないとエネルギーは変わらないってことだよ」
淳　「そう考えちゃったらお仕舞じゃん」
弘行　「でも、そうだろ。実際は」
淳　「でもさぁ」

やかんのお湯が沸く。
淳は立ち上がり、台所へ向かう。そして、冷蔵庫の上からマグカップ二つとティーバッグ二つを取り出すと、マグカップにお湯を注ぎ、残ったお湯は小さなポットに入れる。
淳、マグカップを右手で二つ持って左手には醤油皿を持って和室に戻ってくる。

淳　「梅干茶」
弘行　「相変わらず好きだなぁ。まだ、銀座の明治屋に買いに行ってんの」
淳　「銀座じゃなくて、京橋。京橋の明治屋」
弘行、カップからティーバッグを取り出し、醤油皿に乗せる。

弘行　「銀座じゃなかったっけ」
淳　「最近は銀座の明治屋にも行くけど。…去年、フィルムセンターが火事で焼けちゃったじゃん」
淳はじっとカップを見つめ、一瞬、間を置いた後、ティー

バッグを取り出す。

淳　「あれからあんま、京橋、行かなくなっちゃったんだよね。八重洲スターとかだと、京橋まで出るのはなんか面倒だし。並木座行った帰りとか、京橋経由で東京まで歩くときに寄るぐらい。並木座も滅多、行かないし」

弘行　「じゃ、行ったらでいいんだけど、ハーシー、買ってきてくんない」

淳　「板？」

弘行　「板」

淳　「いつになるか判んないぞ。あ、そう言えばこないだ、どこだったかで見かけたな、ハーシーのチョコレート。どこだったっけなぁ」

弘行　「学校の近く？」

淳　「や、この近所。どっかの酒屋だった気がする。ま、また見かけたら教えるよ」

弘行　「あぁ」

淳　「そういや、学校っていや、ウジャ。教員採用、落ちたら浪人するの？」

弘行　「まだ考えてない」

淳　「あ、でも、ウジャ落ちるわけないんだよな。その点はいいよな」

弘行　「そんなこと決まってないって」

淳　「親父さんが現職の教頭の息子、落とす訳ないじゃん」

弘行　「そんなことないって。一次試験は成績次第。親父は関係ない」

淳　「コネあるやつはみんなそう言うよな。…それに一次もそれなりに出来たんだろ」

弘行　「ん。まぁ。…なんだよ、急に」

淳　「や、なんかさ。やっぱ、俺、ダメみたいだからさ」

弘行　「なんで、発表、まだだろ」

淳　「試験も全然出来なかったし。一次が通っても、コネなんて一切ないから」

弘行　「俺だって、二次、三次でどうなるか判らないって。それに最終に通ったって、採用待ちってこともあるんだから」

淳　「そんな訳ないじゃん。一次通れば、事実上、採用決定じゃん。地元の中学の校長、ウジャの実家で、親父さんとしょっちゅう麻雀してるんだろ」

Gパンにｔシャツ姿の美月が窓の外の向かいの道を通ってやってくる。

手にはコンビニのビニール袋を下げている。
そして、南の階段を上る音がかすかに聞こえる。
弘行　「それはそうだけど。採用にコネなんか関係ないよ」
淳　「言うなよ。採用にコネが関係あるのは、みんながみんな知ってることじゃんか。二次試験、三次試験はコネのないやつ落とす試験じゃん」
美月、南の階段から、玄関までやってきて、ノックもせず、ドアを開け、部屋に入ってくる。
美月　「ただいま」
淳、ビクッとして立ち上がろうとする。
美月、和室に入ってくる。そして、弘行に気がつく。
美月　「あ、お客さん？」
三人がそれぞれを見合う。
弘行　「なんだよ。うえちゃん。やたら食ってかかるから、なんか変だと思ったんだよ。…いつ？」
淳　「え？」
弘行　「いつ見つけた？」
淳　「…ん。ごく最近」
美月　「あっ。宇山先生だ。そうでしょ。こんにちは！」
弘行　「なんだよ。うえ。俺のこととか話してんのか。だったら、俺にも話しといてくれよ。いつから？いつから付き合ってるんだ」
美月　「残念でした。わたしたち、まだ付き合ってないよ。うえちゃんからは『付き合ってください』って言われたけど、まだ、わたし、返事してないから」
弘行　「なんだぁ。うえちゃん。やるなぁ」
美月　「えぇとね。そんなんだから、まだ自己紹介はしないけど、ごめんなさいね。わたしが『うん』って言って、次また宇山先生に会うことがあったら、そのとき自己紹介するね」
弘行　「そう。じゃあ、楽しみにしてるよ。…うちの学校の学生？」
美月　「わたし？それも残念でした。こう見えても、もう、社会人」
弘行　「じゃあ、年上？なにしてんの？」

美月　「さて、なんでしょう」
淳　「らら！」
弘行　「らら？」
美月　「ららでーす」
弘行　「あ、もしかして、俺、今日、邪魔だった？」
淳　「ん。ちょっと…」
美月　「だいじょぶだよ。おとー…。おととい。おととい、うえちゃんが話してくれた宇山先生でしょ。高校のときからの友達（ツレ）で大学も一緒。しょっちゅう一緒にツルんでた…。ツルんでるって言ってた」
弘行　「つれ？うえちゃんとはそういう仲じゃないよ」
美月　「あ、ツレって単に友達のこと。高校時代からの友達で、しょっちゅう一緒に遊んでるって。会ってみたいなーって、思ってたんだよ」
弘行　「そう。で、どう？会ってみて」
美月　「思ったより若いなって感じ。あと、もっと太ってると思ってた」
弘行　「えー。うえ。俺のことなんて言ったんだよ」
淳、弘行を無視して、マグカップに口をつける。

美月　「あ、ローズヒップ・アンド・ハイビスカス！」
淳　「ららも飲むか？」
美月　「うん」
淳、立ち上がろうとする。
美月、それを押さえて、自分が立ち上がる。
美月　「あ、いいよ。おとー…。おっとどっこい。うえちゃんは動かなくて。自分でするから」
淳　「マグカップはもうないから。湯飲み使って。お湯はポットの中」
美月、コンビニのビニール袋を持って台所に行く。
冷蔵庫から空のガラス製水容器をとりだすと、それに買ってきた麦茶のパックと水を入れ、再び冷蔵庫に仕舞う。
弘行　「なんで黙ってたんだよ」
淳　「え？…ああ。…まだ判んないじゃん。どうなるか」
弘行　「どうなるか判らない状態じゃ、アパートになんか来ないだろ」

美月、湯飲みとポットを持って和室に戻ってくる。
そして、淳の隣に寄り添うように座ると、醤油皿のティーバッグのうちどちらを淳が使ったか、目で淳に確認すると、淳の使ったティーバッグを湯飲みに入れる。

淳　「新しいの、まだ、あるぞ」
美月　「ポンパドールのローズヒップティーって二回目に淹れたののほうがおいしいじゃん。一回目だと香りと酸味がきつすぎて、まるで梅干茶みたいじゃない？」

美月、湯飲みにお湯を注ぐ。そして湯飲みをじっと見つめる。

弘行　「で、なにしてる人なの？年は？」
美月　「宇山先生って、女の人に平気で年聞くの？」
弘行　「うっ…。えぇと…。なんで、俺のこと『先生』って呼ぶの？」
美月　「だって、先生になるんでしょ。中学の」
弘行　「まだ、なれるかどうかは判らないよ」
美月　「だいじょぶだよ。宇山先生は。先生になれるよ。うえちゃんとちがって」
弘行　「また、コネとかそういう話？そんなことまで吹き込んでんの？うえ」
淳　「そんなことは言ってないぞ」
美月　「うん。聞いてない。宇山先生だったら、だいじょぶだと思っただけ」

美月、湯飲みからティーバッグを取り出す。

弘行　「ホントか？」
淳　「ホント、ホント。…そうだ。ららは教員になるコネ、あったのか？」
美月　「あー！なんで言っちゃうかなぁ。ららが教師やってるって。わざわざ、自己紹介はしないって言って秘密にしてたのに」
弘行　「えっ。もしかして、ららさんって、学校の先生！？」
美月　「ほら、バレちゃった」
弘行　「小学校？」
美月　「高校」
弘行　「高校！？じゃあ、大卒？」
美月　「あ、宇山先生も、『こんなヤツが、高校の先生？』って思ったんでしょ。うえちゃんと一緒。学生さんは、み

んな見る目がないなぁ。仕事とプライベートは全然違うって」
弘行　「はぁ。すいません。…でもそれだけじゃないです。うえがプールの監視員のバイトしている小学校の先生かなって、それなら出会いも判るし、短大出て小学校教員になったなら、年も俺らと変わんないでしょ」
美月　「ふーん。やっぱ、宇山先生だ。すぐに機転が利いて、そういうフォローができるから、ちゃんと先生になれるんだよ。おとー…うえちゃんは、そうはいかないもんね。そこが差かな。先生になれるかなれないか。コネなんかとは別次元でしょ」
弘行　「そうですよね。ほら、うえ。現職が言ってるんだぞ。コネは関係ないって」
淳　「うっ。でも…」
美月　「あ、それは、うえちゃんが先生になれない理由であって、わたしだって先生になるのにコネ使ったよ」
弘行　「どんな？」
美月　「父の古くからの友達が、教頭先生してて。その人、一時期、教育委員会のほうで採用担当だったこともある人で、その人にお願いした」
淳　「ふーん。親父さんの友達の教頭先生…」
淳、弘行を見る。そして、美月を見る。
美月、意味ありげに微笑みながらうなづく。
弘行　「はいはい。コネが有効なのは認めるよ。しょうがないなぁ。でも、一次までは試験結果だってば」
美月　「そうそう。ららだって、それなりの努力はしたんだから。コネなんて何点か分のゲタにしかならないよ。ま、配属校となると、コネがあるのとないのとじゃ、かなり違うけどね」
弘行　「ららさん。あんま援護になってないです」
美月　「しょうがないじゃん。実感なんだから」
淳　「親父さんの友達か。ウジャも将来、偉くなって、俺の娘が教員やりたいっていいだしたら、目、かけてやってくれよ」
弘行　「なんだよ。いきなり。なにそんな先の話までしてるんだよ。俺なんかより、ららさんに頼めよ」
美月　「ははは。…もう、この話よそ。プライベートで仕事の話ってヤじゃん」
美月、湯飲みを取り上げ、ごくっと飲む。

淳　「そういう感覚って、よく判んないよな。俺らまだ学生だから」
美月　「そうか。いいなぁ、学生さん。わたしも、もいっかい学生に戻りたいな。ま、来年になれば、二人も、らの気持ち、よく判るようになるよ」
淳　「あんまり、判りたくもないけど」
弘行　「そうか？俺は知りたい気もする」
美月　「だ・か・ら。もう仕事の話はおしまい」

美月、再び、紅茶を飲む。

美月　「あー。梅干茶。久しぶり。なんかなつかしいな」
弘行　「前から飲んでんの…飲んでるんですか？」
美月　「あ、宇山先生、わたしに、気、使ってる？いいよ、そんなの使わなくて。なんか宇山先生に気、使われると、変な感じだから」
弘行　「そ。そう？」
美月　「ん。そう」
弘行　「じゃ…。で？」
美月　「あ？梅干茶？…ん。子供の頃から」
弘行　「うえちゃんの影響じゃないんだ」
美月　「へへ。…子供の頃、親から梅干茶って言われてて、ずっと信じてた。高校入った頃かな。ホントは梅干じゃなくて、ローズヒップだって知ったの」
弘行　「そんな前から、あったんだ。これ。輸入されたの最近のことだと思ってた。やっぱり、明治屋で買ってた？」
美月　「明治屋？明治屋って？」
淳　「京橋とか銀座とかの」
美月　「京橋って、東京駅の近くの？…違うと思うけど。近所のスーパーじゃないかなぁ。子供の頃の話しだし、らが買ってた訳じゃないからよく判らないけど」
淳　「近所のスーパーで売ってるんだ」
美月　「あ、スーパーで思い出した。財布、返さなくっちゃ」

美月、立ち上がろうとして、よろける。
そして、ちゃぶ台につっぷすように覆いかぶさる。

淳　「どうした」
美月　「んー。ちょっと立ちくらみ」
淳　「だいじょぶか」

美月　「んー。ちょっと寝てれば」
弘行　「救急車とか呼ぶ？」
美月　「だいじょーぶ。横になる」

美月、滑るようにして畳に寝転がる。

淳　「貧血？」
美月　「んー」

淳、美月を仰向けに寝かすと、膝を高くさせる。そして、部屋の隅のタオルケットの端を筒状に丸めると、首の下に入れる。

淳　「ズボンのベルト外せ」
美月　「えー」

淳、美月のベルトを外そうとする。
美月、力弱く抵抗する。

美月　「やめてよ。おとーさん。こんなときに」
淳　「そんなことする訳ないだろ！貧血のときはズボン、緩めるんだよ！」
美月　「…宇山先生だっているのに」
弘行　「あ、ごめん。俺、出直すよ。…ららさん。本当に大丈夫？」
美月　「うん。ごめんね」
弘行　「じゃ、うえ。また」
淳　「悪いな」
弘行　「あぁ」

弘行、部屋から出て行く。
淳、弘行を一顧だにせず、美月のベルトを外し、ファスナーを全開にすると、Tシャツの裾を持ち上げ、数回体を扇ぐと、タオルケットでTシャツの中を拭き、そのままタオルケットを美月の体に掛ける。
そして、美月の横に座ると、右手で、美月の左肩のあたりをやさしく叩きつづける。
間。永遠にも思える間。

美月　「はー。ありがと」
淳　「だいじょぶか」
美月　「はー。おなか減った」

淳　「なんだ、それ」
美月　「おとーさんなら、いいよ」
淳　「えっ」
美月　「…って言ったら、こんな状態でも、なんか、する？」
淳　「よくあるのか？貧血」
美月　「話、そらそうとしないでよ」
淳　「……する。なんか、する」
美月　「絶対ダメだからね」
淳　「なんだ、それ」
美月　「しないって約束して」
淳　「なんだよ」
美月　「約束して」
淳　「いまは。しない」
美月　「…しょうがないなぁ。それで勘弁してあげよかな」
淳　「なんだよ。それ」
美月　「あー。おなか減った。台所にコンビニで買ったパンがあるから、一緒に食べよっ」
淳　「もう、だいじょぶなのか」
美月　「だいじょぶだと思う。判んないけど。判んないから、おとーさん、起こして」
淳　「なに甘えてんだよ」
美月　「へっへ。らら、おとーさんに甘えに来たんだもんね」
淳、抱えるようにして、美月の上半身を起こす。
淳　「いまは何もしないけど、そのうちいつか、なんかするからな」
美月　「ダメだからね！」

淳、美月の背中を軽く二回叩いてから、腕を離す。
淳、立ち上がり、ビニールロッカーを開け、ロッカーの下から白と黒のTシャツを取り出し、白をもとにもどし黒を三月に投げる。
そして、さらにタオルを美月に向かって放る。
淳　「冷や汗かいたろ。ちゃんと拭いて、着替えろよ。あと、貧血は締め付けるのダメだからな。ブラジャーとかも外しとけよ」
美月　「あ、変なことするつもりなんでしょ」
淳　「いまはしないって約束しただろ」

淳、台所へ行く。そして、後ろ手で襖を閉める。

美月　（小声で）「ばかエロ親父」

淳　「え？なんか言ったか」

美月　「袋の中に、おとーさんの財布、入ってるから」

淳　「買い物、俺の金、使ったのか！」

美月　「しょうがないじゃん。五百円玉とかユキチとかヒデヨじゃないんでしょ」

淳　「ゆきち？ああ、福沢？去年からもう福沢諭吉。五百円玉はもっと前からあるぞ」

淳、コンビニのビニール袋から財布を取り出す。

全照明、落ちる。

美月の声　「そうだっけ？…ヒデヨは野口。千円札」

淳の声　「あ、俺のイナゾー！イナゾーがソウセキになってんじゃんか！」

暗転。（場は変わらない）

窓際に白いTシャツがたたまれて置かれている。淳と美月はちゃぶ台の周りに座っている。美月は黒いTシャツを着ている。

美月、ちゃぶ台の上に上半身を投げ出す。

美月　「ふぅ。人心地ついたぁ」

淳　「よくあるのか？あんなこと」

美月　「ううん。はじめて。はじめてだから、ちょっとパニクッちゃった」

淳　「ぱにくっちゃった？…あ、パニック『る』」

美月　「タイムマシン、人体影響はないはずなんだけど、やっぱ、ストレスかなぁ。時代環境が変わったから。ま、たぶん、おなかが減ってただけだと思うけど」

淳　「ホントにもうだいじょぶなのか」

美月　「んー。たぶん。パン食べたから」

淳　「にしても、菓子パンか？ふつう、材料買って、なんか、ちゃちゃっと作るだろ」

美月　「あ、それはこっちが言いたい台詞。おとーさん、一切料理しないでしょ。買い物行く前に、ざっと見たんだから。調味料、醤油しかないじゃん。塩も砂糖もなくて、なに作るのよ」

淳　「砂糖はあるぞ。たまに珈琲飲むから」
美月　「あれはグラニュー糖。おとーさん、よく一人暮らしできるね。料理できないで」
淳　「ま、世の中、なんだって、どうにかなるさ」

美月、ちゃぶ台の上に寝たまま、目の前に転がっている空になったパンのビニール袋を指ではじく。

美月　「あー。やっぱ、ちゃぶ台は落ち着くなぁ」
淳　「え？」
美月　「うちにも、おんなじようなちゃぶ台、あって、そこで、こーしてるのが一番落ち着く」
淳　「ちゃぶ台？」

美月、体を起こして、ちゃぶ台を隅々まで眺める。そして、また、ちゃぶ台に上半身を投げ出す。

美月　「あ、そうか。このちゃぶ台だ。うちにあるの。まだ、傷がないから、気がつかなかったぁ」
淳　「傷？」
美月　「結構大きくバッテンの傷があるんだよね」
淳　「バッテン？」
美月　「一つは、子供の頃、ららがつけちゃった。たぶん、幼稚園の頃だけど。そのとき、ものすごーく、おとーさんに叱られた。なんで傷つけたか全然覚えてないんだけど、叱られたことだけは、ものすごく覚えてる」
淳　「そうか」
美月　「でもね。もう一つの傷は、おとーさんがつけたんだからね」
淳　「そうか。それで今度は俺が叱られたのか？」
美月　「えっ。そんな…。そんなことできるわけないじゃん…」
淳　「ららはやさしいな」
美月　「そんなことないよ」
淳　「そのとき、俺を叱れなかったから、わざわざこうして俺を叱りにきてくれたんだろ」
美月　「う…。う…」
淳　「ららはやさしいな」

美月、上半身を起こすが、下を向いたまま、淳をこぶしで叩く。

美月　「そうだよ。おとーさんがいけないんだからね。おとーさんがいけないんだ。おとーさんがいけないんだから」

美月、淳を叩き続ける。淳はだまって叩かれている。
美月、淳を叩き続ける。
そして、ふーっとため息をつき、淳を見つめる。

淳　「気、済んだ？」
美月　「これくらいで、気が済む訳ないじゃん」

美月、Tシャツの袖で目を拭く。

淳　「あー。どこで拭いてんだよ。一番いいTシャツなんだからな。それ」
美月　「セコー。Tシャツぐらいでウダウダ言わないでよ」
淳　「給料貰ってる、ららと違って、俺は学生なんだからな。Tシャツだって、ばかになんないんだよ」
美月　「そういう言い方がセコクでダサイんじゃん」

美月、再び袖で目を拭き、そのまま、あかんべをする。

淳、一瞬、美月に顔を近づけるが、すぐに横を向く。

淳　「ららはモテるだろ」
美月　「なに、またまた、いきなりー。言ったじゃん、彼氏いない暦二十四年だって」
淳　「いや、うーん。じゃあ、ホントなのかぁ」
美月　「なにが」
淳　「あ、いや、ほら。自分の娘が一番かわいいって」
美月　「それって、わたしのこと？」
淳　「あ、いや、まぁ」
美月　「ありがと。でも、そんなこと誰にも言われたことないよ。ま、学校じゃ、かわいいって言うより、クールビューティーだし」
淳　「そこが、想像つかないんだよな」
美月　「ま、生徒達には多少、人気があるとは思うよ。なんてったって若い女の先生なんだから。でも、その程度かな」
淳　「でも、ららにも好きな人はいるんだろ」
美月　「え。いないよ。そんな人」
淳　「そんなことないだろ」
美月　「じゃあ、おとーさんはいるの？いま、好きな人」

淳　「いるよ。好きな人は」
美月　「えっ？誰？…まだ、おかーさんとは会ってないよね」
淳　「たぶん」
美月　「じゃあ、誰？わたしの知ってる人？」
淳　「ああ」
美月　「えー！ホント？誰？おとーさん、その人といま、付き合ってるの？」
淳　「いや、付き合ってはいない」
美月　「じゃ、片想い？」
淳　「んー。俺は両想いだって、信じてるんだけど」
美月　「えー！誰？…じゃあ、そんな人がいるのに、昨日、わたしにコクッたの？サイテー」
淳　「だから『こくった』んじゃんか」
美月　「なにそれ？わたし、当て馬？」
淳　「美月」
美月　「なに」
淳　「俺のいま、好きな人」
美月　「ん？」
淳　「俺のいま、好きな人。…上原美月。高校の教員やってて、いつもは無理してクールビューティー気取ってるけど、ホントは泣き虫で朝になるといつも泣いてて、しょっちゅう腹ピーピーの二十四歳。俺より二つ年上の俺の娘。…俺のいま、好きな人」
美月　「なに言ってんの」
淳　「俺の好きな人。美月。だからこくった」
美月　「だって。…両想いだって言ったじゃん。その人と」
淳　「そうだろ。俺、はじめて、ららに会った瞬間からすぐに判ったぞ。この短いスカートの、いかれたおねえちゃんは、俺のことが好きで、俺になにか言いたいことがあって、やってきたって。俺に会いたくてやってきたって。で、顔よくみたら。あ、このおねえちゃんは未来からきた俺の娘で、俺にホレてるって、すぐ判った。だから両想い。だからこくった。ま、ホレてるのは男としてか、親としてか、までは判らなかったけど」
美月　「ばか。うそつき」
淳　「ああ、俺は、ららと違って教員試験に受かんないような、ばかだけど、うそつきじゃないぞ」
美月　「じゃあ、ホントにすぐ、わたしがおとーさんの娘だって判った？」
淳　「ああ」
美月　「うそ。だって、信じないって言ってたじゃん」

淳　「それはそーだろ。娘だって認めちゃったら、キスとかできないじゃん。あんなこととか、こんなこととかできないじゃん」
美月　「しなければいいじゃん」
淳　「しょうがないじゃん。一目見たとき思っちゃったんだから。かわいいなって。そういうことしたいなって」
美月　「ばか、へんたい、エロ親父！」
淳　「ららさぁ。『天に唾する』って言葉、知ってる？」
美月　「なによ。また。知ってるよ。そのくらい」
淳　「俺がばかエロ親父だったら、ららはそのばかエロ親父の娘だぞ」
美月　「そうだよ。ばか。おとーさんがいけないんだから。おとーさんのせいなんだから。おとーさんがそんなんだから、わたしもばかで、どーしょもないんだから。みんなおとーさんのせいなんだから」
淳　「いいじゃん。それで。そんなんが俺だし、そんなんが、ららなんだから。キチッキチッとしてたら、それは俺じゃないし、ららでもないだろ。全く他の人間になっちゃうだろ」
美月　「ふぁあ。…そんなんが、ららだからしょうがないか」
淳　「しょうがない、しょうがない」
美月　「しょうがないか。…なんか、悲しいような嬉しいような。…ま、しょうがないってこと判っただけでも、いっか。…ありがと、おとーさん。わたし、そろそろ帰る」
淳　「もう。もう、帰るのか」
美月　「うん。休みもそんなにないし」
淳　「まだ、八月半ばじゃん」
美月　「あっ。えっとね。ここは八月だけど、こっちはゴールデンウィーク中」
淳　「そうか。そうなんだ。…言いたいこと言わなくていいのか？」
美月　「うーん。どうしようかなぁ。…聞いてくれる？」
淳　「あぁ。俺はいつでも聞くぞ」
美月　「うん」
美月、淳を見つめる。が、一向に口を開かない。
美月、長い間淳を見つめる。そして、顔を伏せる。それでも、口を開かない。
淳　「判った。じゃ、俺の意見を言うぞ」
美月　「え」

淳　「俺、ららみたいに社会人経験はないから、うまく言えないけど、聞いてくれるか？」
美月　「うん」
淳　「人生なるようになるし、ならないようにはならないんだよ。いま、ここでこうなってるのは、なるようになった結果。どのみちどうあがいても、ならないようにはならないんだから、思った道を進めばいいんじゃないか。学校、もう、二年勤めたんだろ」
美月　「え。うん」
淳　「二年勤めて、自分に合わないと思ったら、やめてもいいんじゃないか、学校。ららの人生、ららのもんなんだから、人生、いまだけじゃないの、今回の旅で判ったろ。過去にも人生はあるし、未来にもある。自分の生まれる前にもあるし、死んだ後にもあるって。人生長いんだよ。きっと。一年二年ムダにしたっていいじゃん。それに学校辞めたからって、教員経験の全てがムダになる訳じゃないし。…ただ、辞める前に、ウジャにだけは挨拶しとけよ。コネとして使ったんだろ。採用のとき」
美月　「うん。一番最初に相談する。っていうか、宇山先生。わたしの学校の教頭先生。だから挨拶しないで辞める訳いかないし」
淳　「えっ？らら、高校だろ。ウジャ、中学じゃないのか？」
美月　「うち、中高一貫校。わたしはそこの高校歴史科担当。宇山先生は教頭先生」
淳　「公立で一貫校？」
美月　「うん。実験校扱い」
淳　「ふーん」
美月　「でも、なんで、わたしが学校辞めようか悩んでるって判ったの」
淳　「約束しただろ、昨日の夜。ららのことは、なんでも知ってるようにするって。だから、ちゃんと知ってた」
美月　「うそつき」
淳　「うそじゃないって。俺、いいかげんなことは言うけど、うそは言わない」
美月　「ホントに？」
淳　「ホントホント。…じゃあ、ホントの証明ついでに、もう一つ、言っとこうか？こっちは言いづらいし、もっとうまく言えないから、言うのどうしようかと思ってたんだけど」
美月　「…」
淳　「…俺の件だけど、ららはなんにも悪くないから。俺は知ってるから。…だめだよなぁ。だめなんだよなぁ。自

分に腹が立ってるのに、それが人にあたってるように見えちゃうんだよなぁ。どうしても。あのときも、ららに対して怒ってた訳じゃなくて、自分に対して怒ってただけだから。…あの頃のららには判らなかったかもしれないけど、判るだろ、いまのららなら。あのときの、俺がちゃぶ台、傷つけたときの、俺の気持ち。ららはなんも悪くないから。なるようになっただけだから」

美月　「……。…どうして知ってるの」

淳　「俺、ららのこと、なんでも知ってるから。ららが、なにを一番気にしているか、なにが一番心に引っかかっているか。俺、知ってるから」

美月　「どーして知ってるの！」

淳　「超能力。テレパシー。ららはタイムトラベラーなんだろ。だったら俺はテレパシスト」

美月　「ふざけないでよ！」

淳　「俺は知ってるよ。ららのことなんでも。ららは俺の娘なんだから、半分は俺なんだから。…ららもいいかげん素直になれよ。クールとか気取ってないで。所詮、俺の娘なんだから、俺と同じでホントはいいかげんで中途半端なんだろ。だいじょぶだから、なにもかも。ホントの自分を生きてみろよ。これから俺が、ららの為にできることは数少ないかもしれないけど、もうなにもできないかもしれないけど、ららのおかーさんは、きっと協力してくれるぞ。それが家族ってもんなんだろ。きっと。…ま、いまの俺には、まだよく判んないけど」

美月　「うん。…でも、それ、おとーさんもだよ」

淳　「ん？」

美月　「おとーさんも、ホントの自分を生きていいんかだら。わたしとか、おかーさんとか、きっと協力するから。家族なんだから」

淳　「あ、うん」

美月　「…よしっと。じゃ、おとーさん。わたしのことおとーさんの娘って認めたってことだ」

淳　「認めないよ」

美月　「いま言ったじゃん。自分の娘だって。家族だって」

淳　「認めないって。認めたら、あんなことやこんなこととか、できなくなるじゃんか」

美月　「おとーさん。矛盾してるっ」

淳　「別にいいじゃん。矛盾してても」

美月　「…いいよ。それで。それがおとーさんなんだから」

淳　「そうだろ」

美月　「うん。…やっぱ、来てよかった。…じゃ、ホント

にもう、帰るね」
淳　「ああ」
美月、和室の隅に歩いてく。和室の隅は輝きだす。
淳　「らら」
美月　「ん？」
淳　「バイバイ。らら」
美月　「ごめん。まだわたし、おとーさんにバイバイって言えない。そこまで整理できてない」
淳　「うん。きっと時間はあるよ」
美月　「そうだね」
美月、輝きに包まれはじめる。
美月　「おとーさんなら。いいよ」
淳　「え？」
美月　「付き合わないかっていう告白の返事」
淳　「え」
美月　「でもね。期間限定。おとーさんがおかーさんと出会うまでだからね」
淳　「ああ」
美月　「それと、変なことしちゃダメだからね」
淳　「美月！」
美月　「ん？」
淳　「美月。ありがと。…らら、バイバイ」
美月　「うん」
美月、完全に輝きに包まれる。そして、光が消えると同時に、美月の姿も消える。
淳、光があった場所を見つづける。
そして、ふーっと息を大きく吐く。
淳　「なにやってんだか」
と、急に再び隅が輝き、黒いTシャツとジーンズパンツの美月が黒いTシャツとGパンを持って現れる。
美月、持っていた服をラジオの前に置くと、ラジオの後ろから最初に着ていたミニスカートとシャツを取る。
淳は美月のその様子を、唖然と見ている。
美月　「忘れ物。忘れ物」

淳　「らら？」
美月　「うん。…ううん。美月。わたし、ららはもう卒業した」
美月、淳を見つめる。淳も美月を見つめる。
美月　「忘れ物したから、ちょっとだけ戻ってきた」
美月、淳を見つめる。そして、サッと淳に近づくと、軽くキスをする。
淳、離れようとする美月を抱きしめると、長いキスを返す。
淳が口をつけた瞬間からカチッカチッという大きな時計の音が部屋の中にこだまする。
長いキスと時計の音。
淳、美月を離す。
美月、ゆっくりと淳から離れ、窓際のTシャツの下からブラジャーを拾う。そして、かすかに残っている輝きの中に入る。
輝きの中で、淳に向かって、あかんべをする美月。
美月　「じゃあね」
美月、完全に輝きに包まれる。そして、光が消えると同時に、美月の姿も消える。
淳、自分の握りこぶしで自分の頬を思い切り殴る。
淳　「なにやってんだか。俺は」
淳、立ち尽くす。時計の音が徐々に消えていく。
タエ子の声　「上原君！テレビ見てる！？海に落ちた飛行機、山に落ちてたって！女の子が生きてて、いま、空飛んでる。落ちた女の子、空飛んでるのよ！上原君！テレビ見てる！生きてるって！」
幕。
第二幕
幕。
昭和六十三年、夏。昼間。

淳の声　「ここ、ここ。懐かしいなぁ」
洋子の声　「ふーん」
淳の声　「おー。確かに納豆の匂い。するなぁ」
洋子の声　「え？」
淳の声　「住んでたときは気がつかなかったけど、久々に来ると判るなぁ」
洋子の声　「だから何」
淳の声　「…納豆。匂うだろ」
洋子の声　「うん」
淳の声　「大山さんの納豆」
タエ子の声　「何か御用ですか？」
淳の声　「あ、大家さん。ご無沙汰してます」
タエ子の声　「あ？…あぁ、上原君。どうしたの」
淳の声　「こないだ結婚しまして、女房が前住んでたとこ見たいっていうもんで」
洋子の声　「はじめまして。洋子です」
タエ子の声　「あらあら、それはおめでとう。…上原君、南の二〇一だったわよね。じゃあ、今、空いてるから中も見てけば？おばさん鍵持ってくるから」

幕開く。

アパートの中には、ちゃぶ台が一つあるだけで、他には何もない。
天井の黒ビニール袋もなくなっている。
淳と洋子が手前からやってきて、玄関ドアの前に立つ。

洋子　（声をひそめて）「本当に古いね」
淳　（声をひそめて）「中見るともっと驚くぞ。ボロい上に狭くて」

タエ子が向こう側の階段を駆け上がってくる。
そして、鍵を開ける。

タエ子　「上原君が出てって一年だっけ？それから、入る人がなくってねぇ。ずっと空いてるのよ」
淳　「二年半です」
タエ子　「え？」
淳　「二年半です。僕がここ出てってから」

タエ子、玄関ドアを開けて中に入る、淳と洋子を招く。

タエ子　「そう。もう二年…。やっぱりこんな古いアパー

トダメかしらねぇ。最近はちっとも人が入ってくれなくて。ここの他にも四部屋も空いちゃってるのよ。さ、どうぞ」

淳と洋子、部屋に上がる。

タエ子は奥まで入ると、窓を開け放つ。

タエ子　「換気と掃除だけは、こまめにしているから、そんなに汚くないでしょ」

洋子は物珍しげにあたりを見回している。

窓の外の向かいの道を地味な服を来た圭子が通る。

圭子、窓が開く音で、アパートを見る。そして、タエ子を認めるとお辞儀をする。

圭子　「こんにちは」

タエ子　「あ、こんにちは。どうしたの？こんな時間に。珍しいわね」

圭子　「非番だったんですけど、急に呼び出されてしまって」

タエ子　「あらそう。お盆なのに大変ねぇ」

淳、窓の外を見る。

圭子、淳の姿が見えたのか、淳に向かって会釈する。淳も会釈を返す。

圭子、立ち去る。

淳　「誰でしたっけ？」

タエ子　「ほら、向かいのアパートの溝口さん」

淳　「溝口さん？…えっ、アヤカさんですか。随分雰囲気変わっちゃいましたね」

タエ子　「何言ってるの。昔からああいう人だったじゃない。…それに確か名前はアヤカじゃなくて圭子さんでしょ。銀行に勤めてる溝口圭子さん」

淳　「銀行？」

タエ子　「知らなかった？あぁ、上原君まだ学生だったから来なかったのかしら。勤めはじめの頃、おばさんとこに来て『口座作ってくれませんか』って、おばさんとこだけじゃなく、近所中まわってたみたいよ」

淳　「銀行員、ですか」

タエ子　「あ、でも小川さんの所には行ったんじゃなかっ

たかしら。小川さんも仕方なく口座作ったけど、『引越先には、この銀行、近所にないのよねぇ』って言ってたから。あれは女の学生さんだから溝口さんも頼みやすかったのかしらね」

淳　「小川さん…。大山さんの隣の人ですね。そうか、彼女、僕より二年後輩だったから、今年の春、卒業でしたね。ここから越していったんですか」

タエ子　「勤めた会社が埼玉のどこだかだっていうんで、年明け早々に引っ越していったわよ。ま、大山君と別れて、居づらくなったってこともあったんでしょ」

淳　「はぁ？大山さんと別れた？ってことは大山さんと小川さん、付き合ってたんですか？」

タエ子　「上原君それも知らなかったの？あれ、上原君が出て行ってからのことだったかしらね」

淳　「だって、小川さん、大山さんのこと嫌ってませんでしたか。納豆臭いって」

タエ子　「そうそう、それで藁人形騒ぎがあって、その後すぐよ。二人が付き合いだしたの」

淳　「え。あの藁人形のすぐ後ですか」

タエ子　「そうそう。上原君いたじゃない。藁人形の夏。あのあと、小川さんが、壁に穴あけてごめんなさいって大山君に謝りに行って、それがきっかけで付き合いだしたんだから」

淳　「そうだったんですか。全然知らなかったです。で、別れちゃったんですか」

タエ子　「なんかね。納豆臭いんですって」

淳　「でも、それは最初から判ってたことじゃないですか。大山さんが納豆好きだって」

タエ子　「違うのよ。大山君が小川さんに言うんですって。お前は納豆臭い女だって。小川さん泣いてた」

淳　「小川さんが納豆臭いんですか？大山さんじゃなくて？」

タエ子　「そうなのよ。納豆臭いんですって。（小声で）小川さんのアソコ」

洋子が淳のそばに寄ってくる。

タエ子、部屋を見る。

タエ子　「あれあれ、気がきかなくてごめんなさいね」

タエ子、ちゃぶ台をセットする。

タエ子　「お茶持ってくるから、ちょっと座って待っててね」
洋子　「いえいえ、お構いなく」
淳　「外から見て引き揚げるつもりだったので」
タエ子　「何言ってるの」
洋子　「ほんとにそのつもりだったので。だから手土産も持たずで、すいません」
タエ子　「いいのよ、そんなこと。上原君がこんなかわいい奥さん貰ったんだもの、それだけで、おばさん嬉しいわよ。……。あ。あぁ、あのときの娘さんね。どこかで見たことがあると思ってたのよ。ほら、一度ここ来たことあるでしょ？」
洋子　「はい？」
タエ子　「ほら、いつだったか暑い日。確か、今時分だったじゃない」
洋子　「はぁ？」
タエ子　「あらあら、ごめんなさいね。お茶だったわね。座って座って」

タエ子、立ち上がり部屋を出て行こうとする。
淳、畳にドッと座る。

と、洋子が腹を押さえ、うめきながら、ちょうど上半身がちゃぶ台に乗りかかるように倒れこむ。
その音にびっくりして、タエ子が振り返る。

淳　「おい！」
洋子　「うーっ」
タエ子　「どうしたの？大丈夫？」
洋子　「うーっ」
淳　「おい！どうした！」
タエ子　「あら、大変。上原君、救急車、呼ぶ」

うめきつづける洋子。

淳　「え。あ」
タエ子　「おばさん、救急車呼んでくる。下で電話してくるから！」

タエ子、慌てて外に出て行き、南の階段を下りる。
淳、洋子を心配そうに見ている。
洋子はうめきつづけている。

タエ子の声　「孝子！救急車！電話して！一一九番！上原君の奥さんが大変なの！一一九番って何番だっけ。救急車。一一九番！何番！？」

洋子、すっと立ち上がる。照明、洋子にスポットライト。洋子と見えたのは、実は美月である。

淳　「どうした。だいじょぶか」
美月　「おとーさん」
淳　「よぅ。気持ち悪いのか」
美月　「おとーさん。わたし、美月」
淳　「いま、大家さん救急車、呼び行って。だいじょぶだったら、いいって言わなくっちゃ」
美月　「おとーさん！わたし、美月！おかーさんじゃなくて、美月」

部屋の外に向かおうとしていた淳が、美月を見る。

淳　「美月？…らら？」
美月　「うん。美月」
淳　「ごめん。いま、構ってられない。よぅが、洋子が」
美月　「おとーさん！落ち着いて！」
淳　「だって、よぅが」
美月　「大家さん、呼んでくれたんでしょ。救急車。来るから。救急車。だいじょぶだから！」
淳　「…」
美月　「だいじょぶだから。おかーさん」
淳　「…」
美月　「だいじょぶだから。おかーさん」
淳　「…だいじょぶか。おかーさん」
美月　「うん」
淳　「そうか」
美月　「こんなときにごめんなさい。今回はあまり時間がないの。まず、わたしの話、聞いてくれる？」
淳　「だいじょぶか？洋子」
美月　「だいじょぶだから」
淳　「そうか」
美月　「おとーさん。話し聞いてくれる？」
淳　「だいじょ」
美月　「だいじょぶだから。おかーさん」
淳　「そうか」
美月　「おとーさん、わたしのときと違いすぎっ。…あの

とき、冷静で、ちょっとカッコいいなって思ったんだよ」
淳　「えっ」
美月　「落ち着いてよ。おとーさん」
淳　「あ、ごめん。そうか。ごめん。…そうか、ららか。…久しぶり。三年ぶりか」
美月　「こっちはあれから三ヶ月」
淳　「ん？」
美月　「わたしのほうは、あれから三ヶ月。あのときは五月だったけど、いまは八月。八月十二日」
淳　「こっちは三年だ。ちょうど三年の八月十二日」
美月　「今回はあまり時間がないの。まず、わたしの話、聞いてくれる？」
淳　「あ…ああ。ふぅー」

淳、大きく息を吐く。

美月　「ごめん。こんなときに。でも、今回しかチャンスがないから。…おとーさんの言ったとおり、タイムマシン。失敗。今月いっぱいで実験打ち切り。たぶん、わたしが使えるのは今回が最後」
淳　「…じゃあ、もう美月になったのか」
美月　「なに言ってるの？おとーさん、まだ混乱してる？」
淳　「いや、たぶん、だいじょぶ。美月に言われただろ。『わたし美月。ららはもう卒業した』って」
美月　「卒業か…。そうかも」
淳　「新しい美月に生まれ変わったんだろ」
美月　「違うよ、おとーさん。『卒業』は新しく生まれ変わることじゃないよ。高校を卒業しても、高校までの自分がいなくなる訳じゃないじゃん。大学を卒業しても、大学までの自分がいなくなる訳じゃないじゃん。それまでの、過去全ての自分を一旦整理して考えて、その上に新しい自分を追加するだけ。卒業しても、自分が生まれ変わるんじゃなく、いままでの自分の上に新しい経験が、目新しい視点が増えるだけ」
淳　「そうか。そうだな。…なんか、今日の美月はカッコいいな」
美月　「今日のおとーさんは、ちょっとダサダサ。ま、そのほうがホントのおとーさんらしいかもしれないけど。…あのときの、三ヶ月前の、そっちでは三年前のおとーさん、結構カッコよかったのに。ほら、わたしたち付き合ってることになってるでしょ。おとーさんの告白にわたし、うんって言ったから。それなのに、なんもしなかったの、

ちょっと残念かなって思ってるぐらい、カッコよかったよ。おとーさん。キスぐらいしとけばよかったかなって」
淳　「あのとき、俺、だいぶ無理してたから。美月もそうだろ。だいぶ無理して、ららになってたろ。あのとき。…でも、キス…。もしかして、美月、これから、あのときに荷物取り戻る？」
美月　「そのつもり。今回、タイムマシン使えたのも、残留物回収って名目があったから。ここに寄ったのはその途中」
淳　「そうか、じゃあ、今回は逆転してるんだ。俺には過去だけど、美月には未来なんだ」
美月　「なんのこと」
淳　「一旦、過去戻って、用事済ませて、また、ここに戻ってこれる？できたらそうして欲しいんだけど」
美月　「ん。できるけど。なんで？」
淳　「これが最後なら、フェアな状況で話したいなと思って」
美月　「え。なんで」
淳　「いいから、そうしてくれよ」
美月　「判んないけど、判った。じゃ、ちょっと行ってくる」
美月を照らすスポットライトが一瞬消えるが、すぐに再び灯る。
再びスポットライトを浴びた美月は憤慨してる。
美月　「ばか！へんたい！エロ親父！」
淳　「自分だって、キスした言っていってたじゃんか」
美月　「だからって、舌まで入れることないでしょ！このエロ親父！」
淳　「うー。でも。言い訳になるけど、あのときは、そうしなければいけないって思っちゃったんだよ」
美月　「もう！一回だけだからね！しょうがない。一回だけは許すけど、二回目は許さないから！もう、へんなこと絶対にしないで！」
淳　「あ。う。判った」
美月　「約束して！」
淳　「する。ごめん。約束する」
美月　「ちゃんと、『もうしない』って言って」
淳　「もうしない。…っていうか、ごめん。らら。あ、ごめん。美月。俺、もう美月は一番好きな人じゃないんだ。だから、もうなにもしない。美月は二番目に好きな人。こ

れからずっと、二番目に好きな人だから」
美月　「二番目？一番目は…って、おかーさんのことだね。聞くだけ野暮ね」
淳　「うん」
美月　「そっか。二番目か。…わたしも、もう、おとーさんが一番じゃないよ。おとーさんは三番目。二番目がおかーさんで、一番はわたし自身。それに、たぶんおとーさんの順位、これから下がる一方だから。わたしに好きな人ができたら、その人が一番になるし、子供が生まれたらもっと、おとーさんの順位下がるから」
淳　「うん」
美月　「…おとーさん。あのとき、時計の音した？」
淳　「え？…うん」
美月　「そうか。したんだ。おとーさんも」
淳　「うん」
美月　「じゃあ…。よく判んないんだけど。もしかしたら、このちゃぶ台の世界では、わたし、おとーさんとおかーさんに会えないかもしれない。このちゃぶ台の世界では、おとーさんとおかーさんの子供じゃないかもしれない」
淳　「え？」
美月　「歴史はね。なるようになるし、ならないようにはならない。でしょ」
淳　「あ。ああ」
美月　「でもね、それだけじゃなくて『なるようにする』ことはできるんだよ。きっと。よく判んないけど。ならないようにはできないけど、なるようにはできるんだよ。人の想いで」
淳　「え？よく判んないよ」
美月　「あのね。おとーさん。おとーさんの順位下がっても、わたし、おとーさんのことは好きだから。おかーさんもきっとおとーさんのこと好きだから。それだけは忘れないで。…このちゃぶ台に、傷、つけないで」
淳　「え？…うん」
美月　「それだけ。それが言いたかっただけ。…じゃ、おとーさん。バイバイ」
淳　「…おれは、美月のことずっと。これからずっと二番目に好きでいるから。俺は、俺はそれが言いたかった」
美月　「うん。知ってる。ありがと。…バイバイ。おとーさん」
淳　「バイバイ。美月」
美月のスポットライトが消える。

淳　「美月…。バイバイ」

照明、点く。

洋子がちゃぶ台の上に倒れて、うめいている。

タエ子の声　「孝子！お湯沸かして！救急車、来るって？…いいから、お湯。洗面器にお湯！…おばあちゃん、上原君の部屋、行ってるから、救急車来たら、消防署の人に教えてあげて、上原君のとこにいますって。消防署って、火事じゃないわよ！なに言ってるの孝子！救急車！…もういいわっ。下に降ろすから。上原君とおばあちゃんと二人で、上原君の奥さん降ろすから！」

淳、ハッと洋子に気がつき。洋子の背中に手をかける。

淳　「よぅ。どうした！よぅ」

洋子　「おなか。痛い」

タエ子、南の階段を駆け上がってくる。そして、部屋に飛び込む。

淳　「だいじょぶか」

洋子　「わかんない。おなか痛い」

タエ子　「いま、救急車呼んだから」

淳　「ありがとうございます」

洋子　「おなか痛い。…ごめんなさい」

遠くに救急車のサイレンが聞こえる。

タエ子　「救急車、近くにきたわね。上原君。奥さん、道まで降ろすわよ。すぐ救急車、乗せられるように」

淳　「はい」

淳、洋子を背負おうとする。

タエ子　「何してるの！上原君！動かさないの！こういうときは、頭動かしちゃダメ！」

淳　「あ、いや。大家さん。腹ですから。痛いの」

タエ子　「いいから、頭動かしちゃダメ！ちゃぶ台、そうだ。このちゃぶ台に乗っけていきましょ。上原君。前持って」

淳　「え？…はい」
タエ子　「奥さん。ちゃぶ台に乗って！…上原君！いい？持ち上げるわよ」
洋子を乗せたちゃぶ台を、淳とタエ子が持ち上げる。
幕。
救急車のサイレン、さらに近くなる。
ガンッという物がぶつかった音。
タエ子の声　「上原君、ちゃぶ台の足、階段に引っかかってる！しっかり持って！」
淳の声　「あ、はい」
幕間。
淳、椅子を持って登場。客席に向かって座る。
淳がいるのは病院の診察室である。
淳　「先生のお蔭です。ありがとうございます。お手数をかけました。…はい。もう女房と話はしました。まだ、麻酔が残ってるのか、ちゃんと話せなかったですけど。…え？残念？なにが残念なんですか？女房。だいじょぶなんでしょ。…ならいいじゃないですか。もう、いいんでしょ。すっかり。…じゃ、何が残念なんですか。女房の具合はもうたいしたことなくて、明日にも退院できるんだったら、残念なことなんかないじゃないですか。それとも、なにか別の病気ですか？…それも違う？…や、先生のほうが判らない人ですよ。…子供？子供はまだ生まれてないですよ。美月が生まれるのは来年の三月ですから。…そんなことありえないですよ。さっきも会ったんですから、美月に。…美月ですか？だから、美月は来年生まれる娘です。…おかしなこと言ってるのは先生のほうですよ。…。…。……。はい。…そうですか。…いや、判りました。理解できます。……。えっ？テーブル？救急車に乗っけたテーブル？あ、ちゃぶ台ですね。…そうですか。ちゃぶ台、病室にあるんですね。はい。持って帰ります。…すみません。ありがとうございました」
淳、頭を下げる。深深と頭を下げる。
暗転。

第二場　一戸建てのリビング

第一幕

幕。

二〇〇三年。夏。

淳の声　「一九八九年。昭和六十四年。昭和は終わった。その年の三月十三日。平成元年三月十三日。俺の、俺達の一回目の結婚記念日。美月は生まれてこなかった。生まれるはずの美月は生まれてこなかった」

淳の声　「一九九六年。平成八年一月。世の中は平成で年を数えることが少なくなってきた頃。俺は、家を買った。洋子と俺の二人だけが暮らすための家を買った。それまで暮らしていた賃貸アパートから運び込んだ荷物は、あれ以来、ずっと我が家で使われることとなった、脚に傷のある。あの時、階段で脚をぶつけた、脚に傷のあるちゃぶ台だけだった」

淳の声　「そして二〇〇三年。もう、ほとんどの人が平成の年号を忘れ、西暦でのみ年を数えるようになった夏」

幕開く。

白を基調とした明るいリビング。一間となっているキッチンには冷蔵庫と電子レンジがあるが、他に家具はなく、すっきりしている。

ただ、絨毯敷きの洋間に、不釣合いなちゃぶ台が一つおかれている。

半袖のYシャツ姿の淳が正面の扉からリビングに入ってくる。洋子も淳を追いかけるように入ってくる。

淳は非常に疲れた様子である。髪は短くし、腹が出ている。洋子は淳に比べるとかなり若く見えるがそれなりに年を取っている。

淳　「はんッ。なんだ！会社でも文句言われて、嫌味言われて。いえに帰っても、文句言われて、嫌味言われてかよ。俺は嫌味言われるだけの人生かッ！」

洋子　「そんなこと言ってないじゃん」

淳　「朝から晩まで嫌味言われて、それでも客だと思って、へいこらしなくちゃいけないのかよ！えッ！俺の人生、嫌味を言われるだけの人生かッ！」

洋子　「そんなことないよ。そんなこと言ってないよ。ヤ

だったら辞めようよ。今の会社」
淳　「そういう訳にはいかないだろッ！」
洋子　「だいじょうぶだよ。どーにかなるよ」
淳、流しに置いてあったマグカップを手にとる。そして、冷蔵庫を開け、中を見るがすぐに乱暴に閉める。
淳　「冷蔵庫まで、ばかにすんのか！夏は麦茶ぐらいいつも入れとけ！」
淳、マグカップをちゃぶ台に叩きつけようとする。
一瞬、照明が落ちる。そして淳にスポットライトが当たる。
淳、手を振り上げた状態で止まっている。
何かが割れる音。それに続いて、大きなものが投げられる音。
ドンッと扉の閉まる音。
間。
キキーッという車のブレーキが軋む音。そして、ドンッという鈍い音。
淳、再びマグカップをちゃぶ台に叩きつけようとする。
美月の声　「最近、おとーさんの言うことは、矛盾だらけ！自分のことばっかりで、人のこととか、わたしのこととか考えてないじゃん！」
淳の声　「うるさい！」
何かが割れる音。それに続いて、大きなものが投げられる音。
美月の声　「いい加減にしてよ！それが大人のやることッ！」
ドンッと扉の閉まる音。
間。
キキーッという車のブレーキが軋む音。そして、ドンッという鈍い音。
美月の声　「おとーさん！」
走る美月の足音。扉の開く音。

美月の叫ぶ「おとーさん！」の声が遠くから聞こえる。

淳、手を振り上げた状態で止まっている。

美月の声　「おとーさんも、ホントの自分を生きていいんかだら。わたしとか、おかーさんとか、きっと協力するから。家族なんだから」

美月の声　「あのね。おとーさん。わたし、おとーさんのこと好きだから。おかーさんもきっとおとーさんのこと好きだから。それだけは忘れないで。…このちゃぶ台に、傷、つけないで」

淳、手を振り上げた状態で止まっている。

照明、点く。

淳、崩れ落ちる。

洋子　「だいじょうぶだよ。どーにかなるよ。会社辞めても。わたしもパートで働いてるんだし。一年ぐらいならなんとかなるって」

淳、下を向いたまま、洋子にマグカップを渡す。

洋子　「どーにかなるよ。会社辞めても。うちは子供いる訳じゃないんだし。二人だけなんだし」

淳、ちゃぶ台に突っ伏す。そして、声を上げて泣く。洋子、淳に寄り添う。

淳　「ごめん。ありがとう。…ありがとう。よぅ。…ありがとう。らら」

キキーッという車のブレーキが軋む音。そして、ガシャという物が潰れる音。

洋子　「なに？」

淳　「車。…自動車。猫避けようとして、壁にぶつかったんだよ」

洋子　「え？」

淳　「俺、様子見てくる」

洋子　「わたしも行く」

淳　「あぁ。一緒に行こ。電話。子機。持ってったほうがいいかも。救急車とか呼ばなきゃいけないかもしれない

から」
洋子　「うん」
淳、ゆっくりと立ち上がって、Yシャツの袖で目を拭う。
暗転。（場は変わらない）

二〇一三年八月十三日。
テレビの横のミニコンポからはクラシック音楽が流れている。
リビングの中央のちゃぶ台で、半袖Yシャツの淳がノートパソコンのキーボードを叩いている。ちゃぶ台の横にはアイロン台が置かれている。
淳の頭には白いものが多く混じっている。
正面の扉から洗濯物を持って洋子がリビングに入ってくる。そして、Yシャツにアイロンを掛け始める。
洋子　「仕事？」
淳　「うちで仕事はしないよ」
洋子　「じゃ、なに書いてるの」
淳　「いままで書けなかったこと」
洋子　「なに秘密にしてたのよー」
淳　「ほら、昨日は八月十二日。御巣鷹山の日だったじゃん」
洋子　「ん？そうだっけ。いつだっけ？飛行機落ちたの。結婚前だったよね」
淳　「一九八五年八月十二日。昭和六十年八月十二日。二十八年前」
洋子　「よく覚えてるね」
淳　「それで、今年は二〇一三年じゃん。平成元年に生まれた子供が二十四になる年じゃん」
洋子のアイロンを掛ける手が止まる。
洋子　「そんなに。もう、そんなになるんだね」
淳　「覚えてる？二〇〇三年だったから十年前。ちょうど十年前」
洋子　「十年前？」
淳　「車が突っ込んできて、うちの塀。壊されたじゃん」
洋子　「あれって、そんな前だっけ。つい最近の気がするけど」

淳　「あれも八月十二日」
洋子　「よく覚えてるね」
淳　「タイムマシンのタイムパラドックスってさ、時間を遡るから問題になるんだよ。未来の人が過去を変えたり、過去の人が未来の事を知ったりすることで起きるんだよ」
洋子　「なになに？いきなり」
淳　「過去の人が、過去の事を知っても、いまの人がいまはもう過去の事を知っても、それは問題ないってこと」
洋子　「うん。まーね」
淳　「脚に傷があるこのちゃぶ台の世界か、バッテンの傷のあるちゃぶ台の世界か、どっちの世界にしても、平成元年生まれの娘が二十四になる年の八月十二日を過ぎたら、それはもう過去の話。だから書けることってあるんだよ」
洋子　「またなんか、話、作ってるの？」
淳　「え？…うん。…ホームドラマ。今度のはホームドラマ、家族の話」
洋子　「ふーん。…でも、そうか。もう二十四年になるんだね。生まれてたら。どんな風に育ってたかなぁ。二十四だともう社会人かなぁ」
淳　「学校の先生だよ」
洋子　「なんで？」
淳　「でも、性格的にあってないから、学校、辞めるけど」
洋子　「変なの」
淳　「変だよ。…俺とよぅの娘だもん。変なやつに決まってるじゃん」
洋子　「変なの」
淳　「変だよ。いいじゃん。変で。変な家族で…」

淳、ノートパソコンを横に押しやり、上半身をちゃぶ台に投げ出す。
完。

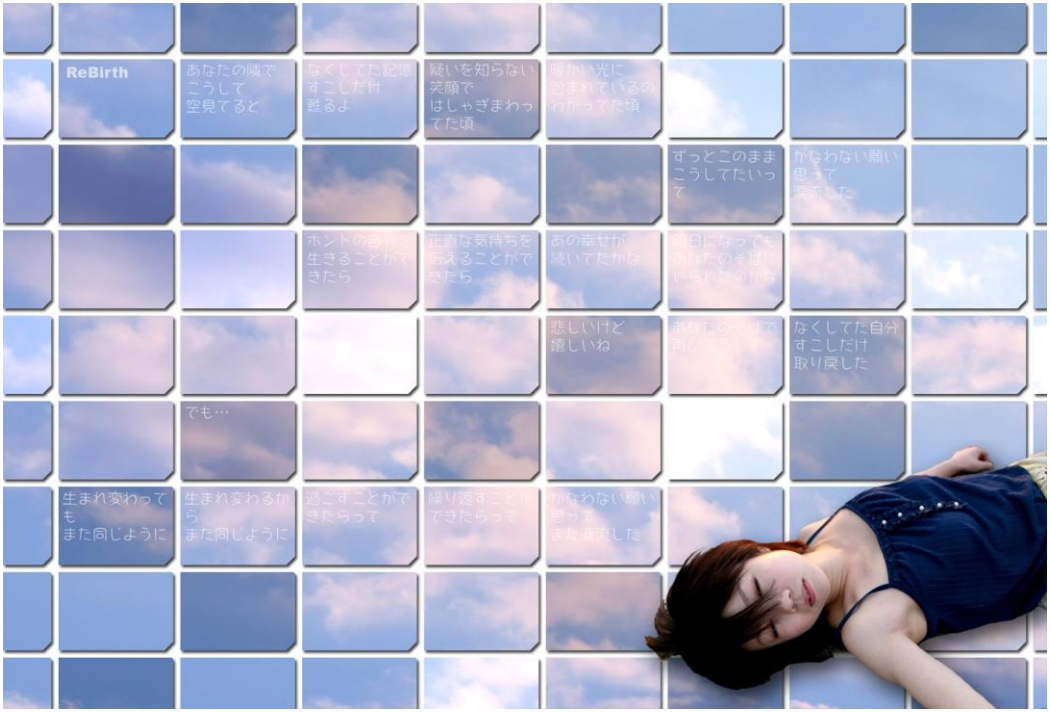
美月がちゃぶ台に上半身を投げ出している。
キッチンでは洋子が食事の支度をしている。

美月　「おかーさん。わたし、学校、辞めようと思ってる」
洋子　「え？」
美月　「学校。辞めるつもり」
洋子　「二学期から？」
美月　「んー。そんなにすぐには無理かもしれないけど」
洋子　「宇山先生には話したの？宇山先生には先に言っ

ときなさいよ」
美月　「うん。最初に言う。…おかーさんも、おとーさんと同じこと言うんだね」
洋子　「おとーさんと？」
美月　「うん。おとーさんも言ってた。『最初にウジャに言え』って。…学校辞めるときは最初に宇山先生に言えって」
洋子　「いつ？おとーさん、いつそんなこと言ったの」
美月　「今年のゴールデンウィーク」
洋子　「なに言ってるの」
美月　「昨日も会ったよ。おとーさんに」
洋子　「一人で行ったの？お墓参り。今年は十二日はどうしてもダメだから、今日にしようって言ったのは美月じゃない」
美月　「ううん。行ってないよ、お墓参りは。ただ、会っただけ」
洋子　「変な子ね」
美月　「変な子だよ。おとーさんとおかーさんの娘だもん。変な子に決まってるじゃん」
洋子　「変な子ね」
美月　「変な子だよ。いいじゃん。変で。変な家族で…」
美月はちゃぶ台に上半身を投げ出している。
完。

登場人物

上原淳　うえはらじゅん　（22）　男
　大学４年（理工学部数学科）
上原美月　うえはらみつき　（24）　女
　高校歴史科教師　淳の娘
宇山弘行　うやまひろゆき　（22）　男　淳の同級生
溝口圭子　アヤカ　（25）　女
　トルコ嬢　淳の向かいのアパートの住人
岡田タエ子　おかだたえこ　（62）　女
　アパートの大家
上原洋子　うえはらようこ　（24：三年後）　女
　淳の妻（美月と二役兼ねること）


ReBirth
あなたの隣で
こうして
空見てると
なくしてた記憶
すこしだけ
甦るよ
疑いを知らない
笑顔で
はしゃぎまわってた頃
暖かい光に
包まれているの
わかってた頃
ずっとこのまま
こうしてたいって
かなわない願い
思って
涙流した
ホントの自分で
生きることができたら
正直な気持ちを
伝えることができたら
あの幸せが
続いてたかな
明日になっても
あなたのそばに
いられたのかな
悲しいけど
嬉しいね
なくしてた自分
すこしだけ
取り戻した
でも…
生まれ変わっても
また同じように
生まれ変わるから
また同じように
過ごすことができたらって
繰り返すことができたらって
かなわない願い
思って
また涙流した

電王版「らら」

電王版「らら」

スポット登場人物

上原美月　うえはらみつき　女(16)
　高校生　やさしい性格だが、猫にだけは敵対心を持っている
佐藤真古斗　さとうまこと　男(21)　ゴロツキ
佐藤蹴太　さとうしゅうた　男(19)
　ゴロツキ　真古斗の弟　猫好き
岡田タエ　おかだたえ　女(90)　老婆
上原淳　うえはらじゅん　男(40)　美月の父
蛯川久司　えびかわひさし　男(24)　バイクの男

1.　路地（坂道）

上原美月が坂道を歩いている。猫が美月の横に現れる。美月、猫に気がつき、逃げ腰の姿勢で立ち止まる。

坂の上から良太郎が自転車で降りてくる。
良太郎は美月に気がついていない。

美月、こぶしを振り上げ、猫を威嚇する。
猫はビクッとして、塀に上る。美月はこぶしを振り上げたまま、猫を睨む。
猫、塀の上で戦闘態勢をとり、美月に向かって飛びかかる。
美月はサッと猫をかわす。
と、そのとき、自転車の良太郎が美月の横を通り過ぎる。
猫、良太郎の顔を引っ掻く。自転車から転びおちる良太郎。
猫、さらに良太郎の足を引っ掻く。

良太郎　「なんで、こうなるの？」

美月、猫に向かって蹴飛ばすフリをする。逃げる猫。

美月　「だいじょぶですか？」

美月、良太郎に近づく。その様子をイマジンが離れたところから見ている。

良太郎　「大丈夫です」

良太郎、お辞儀をして自転車を押しながら立ち去る。
そんな良太郎を見ている美月。イマジン、背後から美月に近づく。

イマジン　「望みを言え」

美月、ビクッとして振り返る。

イマジン　「望みを言え。代償は…」

先ほどの猫が少し離れたところから美月の様子を窺っている。美月、それに気がつく。

美月　「猫。この辺から、猫。消して。この辺の猫。すべて消して！」

泣き出しそうな美月の顔。

オープニング、流れる。

2.　喫茶店『ミルクディッパー』

愛理が良太郎の顔にキズグスリを貼っている。その様子を、羨ましそうに尾崎が見ている。

良太郎　「うぁっ」

痛がる良太郎。

愛理　「でも、なんで猫に引っ掻かれたの？」
尾崎　「猫、虐めたりしたんじゃないですか」
愛理　「良太郎がそんなことするわけないじゃないですか！」
尾崎　「そ、そうですね。良太郎君は優しいですものね」
愛理　「そうですよ。良太郎はいつも運が悪いだけです」

愛理、そう言いながら、今度は良太郎の足に薬を塗る。

良太郎　「うぁっ」
愛理　「大丈夫？」

その様子を、羨ましそうに尾崎が見ている。

3.　商店街

岡田タエが大きなバッグを車道側の手で持って、ヨタヨタと歩いている。
その背後、少し離れたところからスクータに乗った佐藤真古斗がその様子を見ている。
真古斗、横に立っている佐藤蹴太に目で合図する。蹴太、タエを見る。
ニヤリと笑う真古斗と蹴太。
真古斗、スクータのエンジンをかける。蹴太はスクータの後部座席に飛び乗る。

別の角度。
美月がヨタヨタと歩いているタエを見かける。
サッとタエに近寄る美月。

美月　「荷物、重そうですね。持ちましょうか？」
タエ　「あ、ありがとうね」
美月　「どこまでいらっしゃるんですか？」
タエ　「駅まで」
美月　「じゃあ、駅までお持ちします」

美月、タエからバッグを受け取る。
その瞬間、その横を真古斗と蹴太が乗ったスクータが通り過ぎる。
スクータのあまりの近さにタエがよろける。それを美月が支える。
舌打ちをする蹴太。

蹴太　「ちくしょう！」

蹴太、後ろを振り返り、美月を睨みつける。
と美月のさらに先をイマジンが横切る。イマジンは猫を抱えている。

4.　デンライナー食堂車

モモタロスとハナが暇そうにしている。

モモタロス　「暇だな」
ハナ　「暇のほうがいいじゃない。暇だってことはイマジンが暴れていないって事なんだから」
モモタロス　「言っとくが俺は、暇には慣れてないんだ。これじゃあ、体が鈍ってしょうがないぜ」
ハナ　「何言ってるの」
モモタロス　「そもそも、何でいつも受身なんだ。たまにはこっちから仕掛けてもいいだろ」
ハナ　「また何か悪いこと企んでいるのね！」
モモタロス　「そうじゃなくて。…そうじゃなくて、イマジン相手でも、たまにはこっちから向こうに乗り込んでいってもいいだろが」
ハナ　「そうね…」

思案顔のハナ。

5.　商店街～路地（坂道）

駅。改札前。
美月が改札の中にいるタエに手を振っている。タエ、美月に向かってお辞儀をする。
美月、振り返ると歩き出す。

路地。
真古斗と蹴太の乗ったスクータがやってきて止まる。
蹴太がスクータから降りる。

蹴太　「なんだ、あの女。邪魔しやがって！」
真古斗　「そんなに熱くなるなよ」
蹴太　「だって、兄貴…」

子猫が蹴太に近づく。蹴太はしゃがみこんで子猫をなでる。

その路地に美月がやってくる。
真古斗が美月に気づく。

真古斗　「おい。蹴太。あれ」

蹴太、いきおい立ち上がる。子猫はビクッとして美月のほうへ走り出す。

蹴太、美月を睨む。

蹴太　「あの女！」

子猫、美月の前に飛び出す。

美月、ギクッとして一歩、後ずさりする。が、すぐにこぶしを振り上げる。

子猫、それを見て、美月を回り込むようにして逃げる。

美月は子猫に向かってこぶしを上げつづけている。

蹴太　「何しやがるんだ！あの女！」

蹴太、美月に向かって走り出す。

美月、後ろから繰る蹴太に気が付かない。

蹴太　「おい！お前！」

美月、声がしたほうを向く。

そこには蹴太が鬼の形相で立っている。

蹴太　「俺たちの邪魔しやがって！」

美月　「なんのことですか」

蹴太　「それに！猫。いじめるな！」

美月と蹴太の様子を見ていた真古斗がスクータで二人に近づく。

蹴太、美月の胸倉を突き飛ばす。

そこへ、良太郎が自転車で通りかかる。

真古斗のスクータが美月に迫ってくる。

良太郎　「あぶない！あぶないですよ！」

良太郎、美月と佐藤兄弟の間に割って入る。

蹴太　「邪魔すんな。関係ないやつは引っ込んでろ！」

良太郎　「でも、男の人二人で、女の人一人を襲うなんて、よくないですよ」

蹴太　「じゃあ、男のお前が相手ならいいんだな！」

蹴太、良太郎に殴りかかる。

真古斗は良太郎と美月の周りをスクータでクルクルと廻

っている。
良太郎、美月を守るように蹴太の相手をするが、簡単にノビてしまう。

デンライナー内。
モモタロス、立ち上がる。

モモタロス　「お！俺の出番か！」

再び路地。
倒れていた良太郎が急に立ち上がる。良太郎にはモモタロスが憑依している。

M良太郎　「俺。参上」

M良太郎、周りを見回す。

M良太郎　「か弱い女の子を守るって言うのは『いい事』だよな。じゃあ、思いっきり暴れさせてもらうぜ！」
蹴太　「カッコつけてんじゃねーよ」

M良太郎、近くの道路標識を引き抜くと、クルクルと回す。

M良太郎　「俺は最初からクライマックスだぜ！」

闘うM良太郎と蹴太。が、圧倒的にM良太郎が強い。
やられまくって、這々の体で逃げ出す真古斗と蹴太。

M良太郎の頭の中で良太郎の声が響く。

良太郎の声　「う～ん。いたい～」
M良太郎　「ちぇ。もう終わりかよ」

M良太郎と良太郎が入れ替わる。

良太郎　「いた～」

良太郎。急にうずくまる。
美月、良太郎に駆け寄る。

美月　「だいじょぶですか？…あ、あなた、あのときの」
良太郎　「えっ。…あ。こんにちは」

坂の上にいたさきの子猫が美月と良太郎を見ている。
サッと現れたイマジンがその猫を抱えて飛び去る。

良太郎　「あっ！」

良太郎、立ち上がろうとするが、すぐにしゃがみこむ。

良太郎　「いた～」
美月　「だいじょぶですか」

美月の足元に砂がこぼれる。

坂の上に尾崎が息を切らしてやってくる。
あたりを見回す尾崎。良太郎に気がつく。
尾崎、小走りで良太郎に近づく。

尾崎　「良太郎君。またこんなところでコケてるんですか」
良太郎　「あ。尾崎さん」
尾崎　「あ、そうだ。それより、ネコ抱えたバケモノ見なかったですか」

再び美月の足元に砂がこぼれる。
それに気がつく良太郎。

6.　喫茶店『ミルクディッパー』

尾崎が良太郎を連れて店に入ってくる。続いて美月もやってくる。

愛理　「良太郎！また転んだの？」
美月　「いえ。わたしが男の人に絡まれてたのを助けてくれたんです」
尾崎　「僕は、たまたまそのあと通りかかって」
愛理　「そう。それは大変だったですね。…そうだ、コーヒーでも飲んでいきませんか。尾崎さんも、今日は特別にご馳走します」
尾崎　「そ、そうですか！ありがとうございます！」

尾崎、いつものカウンター席に座る。
美月と良太郎はテーブル席につく。

愛理　（小声で良太郎に）「大丈夫なの。怪我してない？」
良太郎　「うん。大丈夫」

愛理、安心した様子でカウンター内に入り、コーヒーを淹れ始める。

尾崎　「知ってますか？猫騒動」
愛理　「猫騒動？なんですか、それ？」

愛理はコーヒーを淹れつづけながら尾崎の相手をしている。

尾崎　「最近、ここら辺の猫が立て続けに誘拐されているんですよ」
愛理　「誘拐事件ですか？」
尾崎　「それで調査していたら、バケモノが猫をさらっていくのを見かけて…」
愛理　「化け物？それって映画か何かのお話ですか？」
尾崎　「いえ、そうではなくて…」

店の扉が開いて、ハナが飛び込んでくる。

愛理　「あら、いらっしゃい」

ハナ、愛理に会釈をすると店内を見回す。そして、良太郎を見つけ近寄る。

ハナ　（小声で）「良太郎。ちょっと」

良太郎、立ち上がると、ハナに近づく。

ハナ　「イマジンの契約者って彼女？」
良太郎　「たぶん」
ハナ　「どういう願い事したって？」
良太郎　「それは、まだ…」
ハナ　「彼女の一番心に残っていること、聞き出すわよ」
良太郎　「なんでですか？」
ハナ　「先回りするの。さきに彼女が一番心に残っている過去と場所を聞き出して、イマジンが来るのを待ち伏せするのよ。そして過去を変えさせないようにするの！」
良太郎　「いい考えですね」

良太郎とハナが美月のテーブルに戻る。

ハナ　「いきなりで変に思われるかもしれないけど、イマジン…鬼になにか願い事、頼まなかった？」

美月　「えっ？…すみません。あなた誰ですか？あ、わたしは上原美月です」

ハナ　「ごめんなさい。わたしはハナ」

良太郎　「野上良太郎です」

愛理がコーヒーを持ってやってくる。

美月　「ハナさんは野上さんのカノジョですか？」

ハナ　「えっ。…いえ…」

ハナ、驚いた顔で美月を見る。

愛理も微妙な表情でハナを見る。ハナと愛理と良太郎の視線が微妙な雰囲気で入り交じる。

美月　「ごめんなさい。わたしが聞くことじゃなかったですね」

ハナ　「いえ」

愛理　「はい。コーヒー。どうぞ。…ハナさんもどうぞ」

愛理、テーブルにコーヒーを三つ置き、カウンターに戻る。

良太郎　「理由は詳しく話せないんですが、鬼のこと聞きたいんです。話してもらえませんか？」

美月　「はい。…ていうことは、やっぱ、あれって現実だったんですね」

ハナ　「願い事、頼んだのね。…一体何を？」

美月　「猫。ここら辺から猫をなくして欲しいって」

良太郎　「猫？何でですか」

ハナ　「話してもらえない？」

美月　「…それこそ何故ですか」

ハナ　「猫をなくして欲しい原因を作った『時』が、あなたの今までの人生の中で一番、心に残っている時間でしょ。どうしてもその『時間と場所』が知りたいの」

良太郎　「お願いします。話してくれませんか」

美月　「…わたしが一番話したくないことを。思い出したくもないことを話せって言うんですね」

良太郎　「すみません」

美月　「わかりました。野上さんには二回も迷惑をお掛け

したので、話します」

美月、良太郎をじっと見る。

美月の目から、涙が流れ出す。

美月　「父を。猫が父を殺したからです」

良太郎　「えっ？」

驚く良太郎とハナ。

7.　路地（坂道）　美月の回想

夕暮れ。

坂の上からスーツ姿の上原淳が下りてくる。坂の下からは美月が歩いてくる。

淳はいかにも疲れたように下を向いたまま歩いていて、美月には気が付かない。

美月も携帯を操作しながら歩いていて、淳には気が付かない。

美月と淳がすれ違うとき、肩がぶつかる。その反動で、美月が携帯を落とす。

美月　「あ！」

淳　「すみませ…」

美月、しゃがんで携帯を拾う。

淳、美月を見る。

淳　「なんだ。美月か。ちゃんと前見て歩け」

美月も淳を睨むように見る。

美月　「あ、お父さん。…お父さんこそ、ボーっと歩ってるからいけないんでしょ！」

淳　「なんだと。それになんだこんな時間に。これから出かけるのか。帰りは何時だ。まだ、高校生なんだから、夜に遊び歩くな！」

美月　「別にお父さんに迷惑かけるわけじゃないからいいでしょ！」

淳　「迷惑かけない！？帰りが遅いと心配するだろ」

美月　「ふん。いいよ、わたしの心配なんかしなくて。お父さんのそういう押し付けがましいところがキライなの」

美月、吐き捨てるように言うと、淳を無視して歩き出す。
坂の上から蛯川久司の運転するバイクがすごい勢いでやってくる。
淳　「美月！待ちなさい！」
美月は淳を無視して歩きつづける。
キキーッというブレーキの音。そしてドンッという鈍い音。
美月、振り返る。
そこにはバイクにはねられ、頭から血を流している淳の姿がある。苦しげな、怒ったような淳の顔。
淳、美月に向かって手を伸ばす。
淳の手前にはバイクと蛯川が横になっている。
蛯川はゆっくりと立ち上がる。
その様子を道の真中で凍りついたように立っている黒猫が見ている。
淳　「みつ…き……」
血だらけの淳の顔。
美月　「おとーさん！」
蛯川　「猫が。急に猫が飛び出してきて…。猫が…」
苦痛にゆがむ淳の顔。口をパクパクさせる。そして息絶える。
美月、気を失うように倒れる。

8.　喫茶店『ミルクディッパー』

美月、怒ったような顔で涙を流している。
美月　「父は猫に殺されたんです。わたしを恨みながら死んだんです」
ハナは下を向いてテーブルを見ている。
ハナ　「それ、いつのこと？何月何日の何時？」
美月　「去年の八月十二日。時間も知りたいですか！午後

六時十七分です！」

良太郎とハナが顔を見合わせる。
良太郎はうなづいて店を飛び出す。
美月を見るハナ。ハナの目から涙がこぼれ出す。

美月　「いいたくないこと無理やり言わさせて、同情ですかッ。どうせあなたも言うんでしょ。本当にいけないのは、猫じゃなくてわたしだって。父がわたしを恨みながら死んだのは、わたし自身のせいだって」
ハナ　「そんなこと言わないわ。それにあなたのお父さんだって、きっとあなたを恨んでなんかいなかったと思うの」
美月　「あなたはそのときの父の顔を見ていないから、そんな気休めが言えるんです。父のあの鬼の形相を見ていないから！」

美月、立ち上がる。そして荷物をまとめるとカウンターに向かう。
そして、愛理に向かって頭を下げる。

美月　「わたし、帰ります。ごめんなさい。コーヒー残しちゃいました」

美月、もう一度、頭を下げると、店を出て行く。

尾崎　（独り言）「猫…ですか」

ハナ、カウンターに近づく。目を伏せながら愛理に話し掛ける。

ハナ　「いい子ですね」
愛理　「いい子…ですね」
ハナ　「私はダメですね。彼女を傷つけちゃいました」

曖昧に笑う愛理。

愛理　「良太郎は？」
ハナ　「あの子を助けに行きました」
愛理　「…？…そう」
ハナ　「いい弟さんですね。良太郎君も」
愛理　「ええ。いい弟ですよ。良太郎は」

愛理、うれしそうに微笑む。

9. デンライナー

デンライナー走る。時を越えて時間を過去へと遡る。

逆回転映像のフラッシュ。

『ミルクディッパー』に後ろ向きに入ってくる美月。

ハナの流した涙が目に戻っていく。

うずくまる良太郎から離れる美月。

良太郎の顔から猫が後ろ向きに塀へと飛ぶ。

街中を走るデンライナー。

10. 喫茶店『ミルクディッパー』前の道〜店内

『ミルクディッパー』の前の道。

うつむきながら歩く美月の前にイマジンが姿をあらわす。

イマジン　「望みどおり、あの場所の一キロ四方から猫を排除したぞ」

美月　「そんなこと、どうでもいいから、あっち行ってよ！」

イマジン　「そうはいかない。契約は守ってもらう」

イマジン、美月の体を割り、中に入る。

『ミルクディッパー』店内。

ハナが異変を察知する。

ハナ　「えっ」

ハナ、周りを見回す。そして、店の外に飛び出す。

その様子をいかぶかしげに見ている尾崎。尾崎も店を出る。

『ミルクディッパー』の前の道。

美月、呆けたようにしゃがみこんでいる。

ハナが美月に駆け寄り、美月の頭にパスをかざす。

パスの日付『２００６．０８．１２　１８：１７』

ハナ　「やっぱり」

遅れてきた尾崎も美月に駆け寄る。

ハナ　「この子を見ててください！」

ハナ、そう言うと、美月を尾崎に預け、走り出す。

11.　路地（坂道）　二〇〇六年八月十二日

良太郎、坂の上に駆けてくる。

キキーッという音。バイクが淳をはねる。

それを振り返って見ている美月。

良太郎、美月に向かって走り出す。

淳の苦しそうな顔。

美月、倒れる。と、美月の目が赤く光り、サッと立ち上がる。

良太郎　「いけない！…変身！」

良太郎、電王に変身する。

赤い目の美月の目が、さらに赤く光る。

電王　「やめろ！お前の相手はこっちだ！」

美月、電王を見る。

美月　（イマジンの声で）「ちっ」

美月からイマジンが抜け出す。

崩れる美月。飛び去るイマジン。

電王、美月とイマジンの飛び去った方向を交互に見る。その様子は美月に駆け寄るか、イマジンを追うかを迷っているようである。

そこへ、ハナが駆けてきて、美月を抱える。

ハナ　「こっちは、私が」

電王、うなづくと、イマジンを追いかける。

ハナ、美月の顔を覗き込む。美月は気を失っている。

淳　「うっ」

淳のうめき声に気付いたハナが淳に近づく。
淳の目はかすんでいて、近寄るハナがよく見えない。

淳　「美月か？」
ハナ　「しっかりして。しっかりしてください」
淳　「美月。お父さんは美月のことが好きだから。どんなに美月がお父さんのことを嫌っても。好きだから。ずっと。これから…も…」

淳、息絶える。血まみれの淳の顔にかすかな照れ笑いが浮かんでいる。

12.　広地

空を飛んで逃げるイマジン。そのイマジンをバイクで追う電王。
イマジン、地上に降り立つ。電王、そこに到着する。

イマジン　「なぜ邪魔をする」
電王　「時の流れを守るため」
イマジン　「理想の世界を作るために、不適切な過去を変えて何が悪い」
電王　「利己の欲望は理想の世界ではありえない」
イマジン　「そうかな。現実は欲望が世界を作っているのではないか」
電王　「たとえそうだとしても、自分の欲望のため、過去を変えるのは許さない！」
イマジン　「そうか…。ならば、弊れろ」

襲い掛かるイマジン。闘う電王。
電王、簡単にダメージを食らう。

イマジン　「たやすいな。口だけか」
モモタロスの声　「俺と代われ！」
良太郎の声　「うん」

電王、モモタロスタイプに変身する。

電王　「俺は最初から最後までクライマックスだぜ！」

闘う電王とイマジン。ほぼ互角の戦いが続く。が、最終的

は電王が勝利する。
勝ち誇ったような電王。

13.　喫茶店『ミルクディッパー』

美月、怒ったような顔でハナを睨みつけている。
ハナも美月を見る。ハナにも美月にも涙はない。

美月　「どうせあなたも言うんでしょ。本当にいけないのは、猫じゃなくてわたしだって。父がわたしを恨みながら死んだのは、わたし自身のせいだって」
ハナ　「そんなこと言わない。それに…。あなたのお父さん、あなたを恨むと思う?本当にそう思う?」
美月　「あなたはそのときの父の顔を見ていないから、そんな気休めが言えるんです。父のあの鬼の形相を見ていないから!」
ハナ　「お父さん。あなたのお父さん、あなたのことどう見ていたか思い出してみて。ちゃんと思い出してみて。あなたのこと恨むと思う?」
美月　「……」

ハナを見る美月。じっとハナを見る。そして小さく頭を振る。

美月　「…そうですね。…ごめんなさい。ホントは自分でもわかってたんです。父はわたしを大事にしてくれてるって。でも…。でも…自分の気持ちの整理ができなくって…」

美月、涙を流す。ハナも涙を流す。

美月　「同情しないでください」
ハナ　「同情じゃないの。すごいな。立派だなって思って。…うん。すごく立派」
美月　「わたし、そんなんじゃないです」

美月、コーヒーを飲み干す。そしてゆっくりと立ち上がる。

美月　「わたし、帰ります」

美月、荷物をまとめるとカウンターに向かう。
そして、愛理に向かって頭を下げる。

美月　「わたし、帰ります。コーヒー、おいしかったです」

美月、もう一度、頭を下げると、店を出て行く。

ハナ、カウンターに近づく。そして愛理に話し掛ける。

ハナ　「いい子ですね」

愛理　「いい子…ですね」

ハナと愛理、美月の去った方向を見る。

14.　デンライナー食堂車

食べかけのランチ。旗が倒れる。

ナオミ　「残念でした」

オーナー、ため息をつき、立ち上がる。

オーナー　「今回、過去は変わりませんでしたが、現在は変わりましたね」

ハナ　「え？…ええ」

オーナー　「判りましたか？過去を変えなくても現在は変わるのです。…今が今のままでも、未来を変えることができるのです」

ハナ　「はい」

オーナー　「それが判ったのなら…。今度はこちらから討って出てみましょうか」

ハナ　「え？…はい！」

モモタロス　「おっ。面白くなってきたな！」

オーナー、食堂車を後にする。

15.　路地（坂道）

歩く美月の前に猫が姿を見せる。

美月、一瞬腰が引けるが、猫を無視して歩き出す。

エンディング、流れる。

ReBirth

あなたの隣でこうしていると
なくしてた記憶　すこしだけ甦るよ
疑いを知らない笑顔で　はしゃぎまわってた頃
暖かい光に　包まれているのを　わかってた頃

ずっとこのまま　こうしていたいって
かなわない願い思って　涙流した

ホントの自分を生きることができたら
正直な気持ちを伝えることができたら
あの幸せが続いてたかな
明日になっても　あなたのそばにいられたのかな

悲しいけど嬉しいね
あなたのそばで　再びこうして
なくしてた自分　すこしだけ取り戻した

でも…

生まれ変わっても　また同じように
生まれ変わるから　また同じように
過ごすことができたらって
繰り返すことができたらって
かなわない願い思って　また涙流した

Designed by

雨混じりの雪が降ってくる

「雨混じりの雪が降ってくる」

二月一日（ついたち）、朝、晴れ。
ＴＶの天気予報が『東京は午後から雪』って云ってる。二月一日、朝、晴れ。

二月一日、昼、曇り。
天気予報で雪が降ると宣言されたからか、いかにも降りだしそうな灰の空。
降りだしそうではあるけど、それはもうしばらくあとになるだろうって勝手に判断して、散歩がてら隣駅のＢｏｏｋＯｆｆへ。

二月一日、昼。
欲しかった本はやっぱり売ってなくて、ＢｏｏｋＯｆｆの前の歩行者用信号はもう点滅していて。
二三歩前行く人は、左折車を器用によけながら交差点に突入していく。
ぽつん。
歩道に独り取り残される。
ぽつん。
頭に雨粒があたる。

二月一日、昼、雨の降りはじめ。
電車に乗って一駅戻れば、そこから先は濡れずに帰れるけどまだ大丈夫。ちょっとだけ早足でうつむき加減で川沿いの歩行者専用道を歩く。
ぽつん。
私の頭に雨粒があたる。
ぽつん。ぽつん。
手に額に雨粒があたる。
ぽつん。ぽつん。ぽつん。
公園の噴水、ポケットに手を突っ込んだまま小走りで走る人、枯れてしまった街路樹に冷たい雨粒があたる。
ぽつん。
雨にあたっているのは私独りじゃないんだ。雨があたってくれているのは私独りじゃないんだ。
この人もあの人もみんな雨にあたっているんだ。雨があたってくれているんだ。
私は急に立ち止まって、腕を広げて雨粒を受け止める。

私の目尻に雨粒があたって頬をつたわる。
周りの人は汚らしいもの穢らわしいものを見るように私を遠巻きにしてよけていく。
私は立ち止まったまま腕を広げつづける。
灰の雲を抱（いだ）くように、その上の空を抱くように。
私の全てに雨があたってくれる。

二月一日、夕、雨。
寒いところに長い間いたせいなのか頭が痛い。
給湯室で粉末のロイヤルミルクティをいれる。
その場で一口口をつけて『ほっ』
わざと声に出してみる。
マグカップのリラックマは私を通り越して私の先を見てる。
もう一度声に出して『ほっ』
リラックマは相変わらず、私などそこにいないかのように私の後ろの壁を見ている。

二月一日、夜、雨混じりの雪が降ってくる。

雪が降ってくる　風のーと

「雪が降ってくる」［風のーと］

1.みなみ自宅

二〇一〇年二月一日、朝。
こじんまりとしたマンションの一室。四畳半ほどの洋間には衣装箪笥と鏡台と簡易机。机にはパソコンのディスプレイが乗っている。
かすかにニュースショウ「めざましテレビ」の声と食器を洗う音が聞こえる。
パソコンのディスプレイにはゲーム「マビノギ」のウィンドウとエキサイトのメール画面を表示しているインターネットブラウザのウィンドウがある。
食器を洗う音、水道水の流れる音が止まり、しばらくして寝巻き代わりのトレーナーとスウェットの下を着た太田みなみが部屋に入ってくる。
みなみ、トレーナーを脱ぐ。ブラジャーをつけ、ブラウスを着、スウェットを脱ぐ。そして、ビジネススーツに着替える。
着替え終わると鏡台に向かい、ササッと紅をひく。
テレビからは長野美郷の読む天気予報の声が流れてくる。
みなみ、ディスプレイ前に移動すると、椅子には座らずマウスを操作しパソコンを終了させる。その動作は手馴れたもので無駄がない。

長野の声　「今、東京は晴れていますが…」

みなみ、テレビの方を見る。
開いている部屋のドアの先にリビングがあり、テレビが見える。

テレビの中の長野　「午後からは雪になって、都心でも積もるほどの雪になるでしょう」

パソコンが終了してディスプレイが黒くなる。みなみ、緑から橙に変わった電源ボタンを押す。
そして、窓に近づきレースのカーテンを少し開け外を見る。

みなみの声　「テレビの天気予報が『東京は午後から雪』

って云ってる二月一日（ついたち）、朝、晴れ」
テロップ　「二〇一〇年二月一日　晴れ」
みなみ、レースのカーテンをきっちり閉めると、リビングに行き灯りを消す。そしてリモコンでテレビの電源を切る。
部屋の中が暗くなる。
暗い玄関でローヒールの靴を履くみなみの足。
みなみ　「（聞こえないほどの小声で）いってきます」
玄関扉が開けられると一瞬明るくなるがすぐに扉は閉められまた暗くなる。
マンションの階段を下りるみなみの足。
マンションから出てくるみなみ。空を見上げる。
空は多少の雲はあるもののきれいな冬の青空である。

2.タイトルバック（通勤）

みなみの通勤姿。
細くて急な坂道をゆっくりと降りていく。みなみの横を何人かの人が早足で通り抜けていく。
信号待ちをしている。同じく隣で信号待ちをしていた男性は、歩行者用信号が青になる前に歩き出す。
駅前。地下へ続く階段を下りていく。
湘南新宿ライン車内。右手で吊革を持ち、左手に持った文庫本を読んでいる。
人ごみに流されるように、大崎駅北口の改札を出て行く。
大崎センタービルに入る。

3.オフィス（大崎センタービル内）

すりガラスの埋め込まれた重そうな扉。その横にセキュリティボックスがある。
そこにＩＤカードをかざし、手のひら認証を行うみなみの手。
ピッという電子音と共にセキュリティボックスの赤色ＬＥＤが緑色に変わる。
扉の先は通路となっていて、先にはさらに仕切られたブ

ースがある。仕切りは透明なプラスチック板になっていて、オフィス内が見えている。
ほとんど人のいない広いオフィス。一島が十数人分の席になっており、その島が七八島ほどある。
みなみ、二つ目のセキュリティボックスを操作し扉を開け、オフィス内に入ってくる。
コートのまま扉から一番近い壁際の島の中央まできて、パソコンの電源を入れる。ディスプレイにはセキュリティログインの画面が映る。ＩＤとパスワードを入力する。
「ＩＤ、Ｗ０５７２２ｏｍ。パスワード、＊＊＊＊＊＊＊」
入力完了と同時に、ウィンドウズが起動されていく。
みなみ、席にバッグを置くとコートのボタンを外しながら扉の横のコートロッカーへ向かう。
ロッカーまで来たとき、ピッという電子音と共に扉が開き、高梨和哉が入ってくる。

高梨　「あ、おはようございます」
みなみ　「おはよう」

みなみ、一瞬だけ高梨を見て挨拶を返すと、コートをロッカーの中に仕舞う。
パソコンのディスプレイ。ウィンドウズのログイン画面。

ディスプレイ。メールクライアント画面。画面右下の時刻表示は『０９：０３』
みなみは姿勢よく椅子に腰掛けパソコンを操作している。
窓側の斜向かいの席には高梨が座っている。周りにはその二人しかいない。
無言でパソコン画面に向かっているみなみ。

ディスプレイ。エクセル画面。画面右下の時刻表示は『０９：４７』
無言でパソコン画面に向かっているみなみ。
カタカタとキーボードやマウスを叩く音がする。そして、遠くで人が話す声。
オフィス内の席は半分ほど埋まっている。

ディスプレイ。数個のテキストエディターとエクスプローラー画面。画面右下の時刻表示は『１１：３５』
固まったように考え事をしているみなみ。あちらこちらで人の話し声がする。

ディスプレイ。エクセルの上にテキストエディター画面。画面右下の時刻表示は『１１：５９』それが『１２：００』に変わる。と同時に、パソコンから小さな『ポンっ』という音が流れる。
みなみ、手を止め小さく息を漏らす。
キーボードがディスプレイ側に押し出され、キーボードの手前に弁当包みが置かれる。
弁当包みの右横でマウスを操作するみなみの手。
ディスプレイからはエクセルとテキストエディターが消えていき、ウェブブラウザーが現れヤフーのサイトが表示される。

ディスプレイ。ウェブブラウザー。マイヤフー。画面右下の時刻表示は『１２：０４』
広げられた弁当包み。その弁当包みの上にリラックマのマグカップ。マグカップの中にはコーンスープが満ちている。

ディスプレイ。ウェブブラウザー。ヤフーニュース。画面右下の時刻表示は『１２：０９』
マグカップのコーンスープは半分ほどになっている。

ディスプレイ。ウェブブラウザー。情報サイト。画面右下の時刻表示は『１２：１６』
再び包まれている弁当包み。情報サイトの広告の位置には『閲覧禁止』の文字が書かれている。マグカップは空になっている。

ディスプレイ。空のディスクトップ。画面右下の時刻表示は『１２：１８』
弁当包みもマグカップも見当たらない。
立ち上がり、窓に近づくみなみ。ブラインドの隙間から外を見る。

高梨　「もう降ってます？雪」
みなみ　「ん。まだみたい」

みなみ、窓から離れる。
高梨の隣の席の田中昭二が高梨に話しかける。

田中　「今日、雪降るの？」

高梨　「テレビの天気予報で言ってましたよ。積もるって」
田中　「積もるんだ」

みなみ、田中、高梨の後ろを通り過ぎる。

高梨　「今日も散歩ですか？」

みなみ、高梨に向かって曖昧な笑顔を見せる。

4.大崎センタービル川側の階段

ビルの川側階段。ビルの側面がほぼほぼ全面二階からの階段となっている。
その階段を下りてくるみなみ。途中で立ち止まり、空を見上げる。
灰色の曇り空。
みなみの声　「雪が降るって云われたから、いかにも降ってきそうな二月一日、昼、曇り」
テロップ　「二〇一〇年二月一日　曇り」
みなみ、階段を下りる。

5.ブックオフ西五反田店店内

漫画本コーナーを迷いなく進むみなみ。ひとつの棚の前で止まり、立ち読みしている人の肩越しにざっと棚を見渡す。が、すぐにまた歩き出す。そして店の一番奥の棚まで来ると、再び人の肩越しに棚を見る。
今度は少し肩を落とし、ゆっくりとした足取りで歩き出す。

ブックオフ店内のみなみ。
ゲームコーナーのプレイステーション2の棚でゲームを手に取り、パッケージをしばらく眺めた後、棚に戻す。その動作を数回繰り返す。
ゲームＭＯＯＫのコーナーで何かを探すようにしばらく棚を眺める。
文庫本のコーナーをゆっくりと巡る。
壁の時計。十二時五十分。その時計を見上げるみなみ。

6.西五反田一丁目交差点

ブックオフの自動ドアが開く。目の前には西五反田一丁目交差点。
向かい側に渡る歩行者用信号は青だが、ほとんどの人は渡り終わっていて、横断歩道の上には右折車、左折車が入り込んでいる。
みなみの少し前を歩く青年は、小走りに交差点に進入し、器用に車を避けながら道を渡っていく。
更なる歩行者を拒むように、車が動き出す。
歩行者用信号、点滅。そして赤。信号待ちのみなみ。
反対の信号が青になったのか、反対側の信号待ちをしていた固まりが信号を渡り始める。

テロップ　「ぽつん」

交差点の俯瞰。ぽつんと一人取り残されるみなみ。

テロップ　「ぽつん」

みなみの頭に雨粒があたる。みなみ、空を見る。空を見回す。
徐々にみなみの周りにも信号待ちの人が現れる。
歩行者用信号、青になる。信号待ちの固まり、動きだす。
こころなしか人の歩きも速いように見える。
みなみも交差点を渡る。

川沿いの道を歩くみなみ。
東急池上線のガード下。
隧道のような鉄道立体交差。隧道の側面には稚拙な雪だるまが描かれている。
川面。ぽつりぽつりと雨の波紋が見える。
雨粒があたる三連の石の一人用ベンチ。
光の滝公園の噴水。
すっかりと葉の落ちたオウゴンメタセコイア。
アートヴィレッジの鏡の側面。
ソメイヨシノの根元の円弧。
それら全てに雨が降る。

アートヴィレッジとセンタービルを繋ぐ橋。
みなみ、その中ほどに立つ。空を見上げる。天を見る。
みなみの頭に雨粒があたる。手に額に雨粒があたる。

ふと後ろを振り返るみなみ。
雨はひどくはないものの、ぽつぽつと降っている。
腕を広げて雨粒を受け止めるみなみ。
目尻に雨粒があたって頬をつたわる。
みなみの周りの人はまるで穢らわしいものを見る目つきでみなみを見ると、遠巻きにしてよけていく。
立ち止まったまま腕を広げつづけるみなみ。
そのみなみに雨が降る。
カメラ、みなみを中心にして、みなみの周りを回り始める。
手を広げたみなみ。
アートヴィレッジとセンタービルを繋ぐ橋の上で手を広げたみなみ。
石のベンチで手を広げたみなみ。
葉の落ちたオウゴンメタセコイアの前で手を広げたみなみ。
光の滝公園の噴水で手を広げたみなみ。
アートヴィレッジの鏡の側面の前で手を広げたみなみ。
川面で手を広げたみなみ。
円弧の中央で手を広げたみなみ。
アートヴィレッジとセンタービルを繋ぐ橋の上で手を広げたみなみ。
カメラ、みなみの周りを回りながらさまざまな場面に切り替わっていく。

7.オフィス

ディスプレイ。数個のテキストエディターとエクスプローラー画面。画面右下の時刻表示は『１６：５２』
キーボードを叩いているみなみの指。その指が止まる。
目頭を押さえるみなみ。目を瞑る。しばらく目頭を押さえた後、ふと立ち上がる。

8.給湯室

粉末のロイヤルミルクティをリラックマのマグカップに入れるみなみの手。
『熱湯注意』と書かれた蛇口から、湯をマグカップに注ぐ。
その場で一口口をつける。

みなみ　「（聞こえないほどの小声で）ほっ」

無表情のマグカップのリラックマ。

みなみ　「（先ほどよりは大きな声で）ほっ」

無表情のマグカップのリラックマ。

みなみの声　「リラックマは私などそこにいないかのように後ろの壁を見ている。二月一日、夕、雨」

テロップ　「二〇一〇年二月一日　雨」

9.エンドロール（帰宅）

みなみの帰宅姿。

夜の湘南新宿ライン車内。右手で吊革を持ち、左手に持った文庫本を読んでいる。

10.地下通路からのエスカレーター

地下から地上への上りエスカレーターでみなみがやってくる。

みなみ、エスカレーターを降り二三歩進んだところで立ち止る。

雪が降っている。

みなみ、腕を伸ばして雪を受け止める。

向かいからやってきた二十代後半の女性がそんなみなみを見てやさしく微笑む。

みなみの声　「雪が降ってくる。二月一日、夜、雪」

テロップ　「二〇一〇年二月一日　雪」

タイトルテロップ　「雪が降ってくる」

雪が降っている。

完

「雪が降ってくる」設定

○人物

太田みなみ(36)　168cm。痩せ型。ＯＬ。
長野美郷　天気キャスター
高梨和哉(23)　165cm。高い声。
田中昭二(51)　170cm。中年太り。

○場所
みなみの自宅マンション
オフィス
五反田から大崎

○映像
ストーリーのテンポはかなりゆっくりと。
コントラストは低くモノトーン気味の映像とする。

雨粒のない雨 -Cry-

「雨粒のない雨 -Cry-」

ずっと前から、また泳ぎたいなって思ってた。
泳ぐことをやめて、もう何年たつんだろう。何十年、何百年、たつんだろう。
やり残した何かがあるって訳じゃないけれど、いつかまた泳ぎたいって思ってた。

だから、また泳ぎ始めた。

生きるのとか死ぬのとか、そんなに大事なことなんだろうか。
一生懸命やらなくちゃいけないことなんだろうか。

霧雨。雨粒のない雨。雲の中のよう。
私をすっぽり包み込んで、まるで水の中。
息ができるのが不思議なくらい。
声を殺して泣けるくらい。

雨粒のない雨　風のーと

「雨粒のない雨」［風のーと］

1.スポーツジムのプール

全六コースのプール。右側の二コースは半分ほどしかなく、数人が水中ウォーキングをしている。
右から四つ目のコースでクロールを泳いでいるみなみ。
他にも数人が泳いでいる。

タイトルテロップ　「雨粒のない雨」

みなみの泳ぎはスピードはないものの、他の半ば溺れるように息継ぎをしている者から比べるとそのフォームは段違いに美しい。

泳ぐみなみ。息継ぎをする。

みなみの声　「やり残した何かがあるって訳じゃないけれど、いつかまた泳ぎたいって思ってた」

泳ぐみなみ。きれいにタッチターンする。

みなみの声　「だから、また泳ぎ始めた」

泳ぐみなみ。息継ぎをする。そのみなみの顔が十七歳のみなみの顔にオーバーラップしていく。

2.舞子高校のプール

泳ぐ十七歳のみなみ。屋外プールで日差しが強い。
みなみは全八コースの二十五メートルプールの第六コースを泳いでいる。
プールサイドでは下はジャージ、上はTシャツ姿の脇田恵理子がストップウォッチ片手にコースを回っている。

脇田　「ラスっ五十！」

脇田がみなみに向かって叫ぶ。
みなみ、くるっとクイックターンでターンしていく。

脇田、七コースに移り、同じく声をかける。
四コースを泳いできた森健一がタッチすると泳ぎをやめゴーグルを外す。
森、飛び込み台の横に手をつくとスッとプールから出る。
そして脇田と二三言言葉を交わす。
三コースの鳥井もゴールする。鳥井、みなみの方を見る。
みなみ、鳥井より少し遅れて到着する。
みなみ、肩で息をしている。鳥井、森と同じような動作でプールから出る。
みな、次々と泳ぎ終わる。

脇田　「じゃ、十分休憩！」

みなみ、八コース側の梯子を使いプールから出る。
森がタオルで顔を拭きながら更衣室に向かう。その姿を鳥井が見止める。

鳥井　「部長。上がりですか？」
森　「予備校ゃ。そや。おおたん。今日で最後やろ。『し』のコース、使ぃ」
みなみ　「ありがとうございます！お疲れ様でした！」
森　「おつかれさん」

他の部員も森に向かい「おつかれ」と叫ぶ。
森、手を振りながら更衣室に入る。

3.青の中のみなみ

三十六歳の全裸のみなみ、やや水色がかった青の中でひざを抱えて丸くなっている。
頭を下にして丸まっているその姿はまるで胎児のようである。

4.舞子高校のプールサイド

Tシャツを羽織って体育座りをしているみなみ。横には脇田がいる。
プールをはさんだ向かいには鳥井が他の男子と話している。

脇田　「おおたん、気付いた？」
みなみ　「はい？」
脇田　「森部長が『おおたん』って呼んだの」
みなみ　「…はい」
脇田　「ずっと呼んでみたかったんだって『おおたん』って。最後なんだから呼んじゃえばって云ってあげたん。…結構多いんだよ、おおたんの隠れファン」
みなみ　「そんなことないです」
脇田　「前から聞きたかったんだけど、何であたし以外の人とはあまり話さないの？」
みなみ　「…私は。こっちの言葉。しゃべれないから。…エジコ先輩は、私と同じ言葉。しゃべってくれるから」
みなみ、漠然と鳥井の方を見ながら答える。
脇田　「なんや、ソンなこと気ぃしとったんか。アホやなぁ」
脇田を見るみなみ。脇田の関西弁はどことなくイントネーションがおかしい。
脇田　「…気にするよね。特に子供って残酷だから」
みなみ　「うん」
脇田、鳥井をあごで示す。
脇田　「話さなくていいの？」
みなみ　「……」
脇田、空を見上げる。
脇田　「夕立、来るかもね」
みなみも空を見る。西の空が厚い雲が見える。
脇田　「おおたんと知り合って、一年ちょっとだけど、あたしもこの一年。すごく楽しかったし、嬉しかったよ」
みなみ　「私はエジコ先輩のこと知ってから二年です」
脇田　「ん？」
みなみ　「エジコ先輩、声大きいから。元気な人だなって、中学三年のときから見てました」

後ろを振り向くみなみ。脇田も同じ方向を見る。そこには多聞東中学の校舎がある。

脇田　「そう云えば、おおたんって隣の中学だったっけ。あたしの声、そんなに大きいかなぁ」

笑う脇田。笑うみなみ。脇田、立ち上がる。

脇田　「休憩終わり！次、百を十本！」

脇田の声はひときわ大きい。

5.青の中のみなみ

十七歳の全裸のみなみ、やや水色がかった青の中でひざを抱えて丸くなっている。

6.舞子高校のプール

四コースの飛び込み台に立つみなみ。三コースの飛び込み台には鳥井がいる。他のコースにもそれぞれ人が立っている。一、二、八コースはそれぞれ二人が立っている。

脇田　「百。インターバル四十五秒。一本目。…位置について…ヨーイ…GOっ！」

みな、一斉に飛び込む。

みなみ、七メートル付近で浮かんできて泳ぎ始める。鳥井はみなみより少し遅れて浮かび上がる。

右ブレスのみなみと左ブレスの鳥井。二人の顔がブレスのたびにコースロープをはさんで向き合う。

ターンする鳥井とみなみ。

泳ぐみなみ。鳥井から顔をそらせるようにブレスする。

みなみの声　「第四コース。『し』のコース。エースコース」

泳ぐみなみ。ターン。

再び見詰め合うように向き合ってブレスするみなみと鳥井。

7.スポーツジムのプール

四番目のコースを泳ぐ三十六歳のみなみ。
プールサイドには『初心者コース　右側通行』と書かれたボードが立てられている。

8.舞子高校のプール

泳ぐみなみと鳥井。鳥井がみなみの少し前を泳いでいる。
泳ぎ終わる鳥井。少し遅れてみなみもゴールする。鳥井、みなみに向かって笑いかける。

9.青の中のみなみ

三十六歳のみなみ、ひざを抱えて丸くなっている。
みなみの声　「第四コース。『し』のコース。エースコース」

そのみなみが身じろぐ。

10.舞子高校のプールサイド

みなみと鳥井が座っている。日差しは弱い。

鳥井　「今日」
みなみ　「ん？」
鳥井　「最後？」
みなみ　「うん」

それっきり黙ったまま座っているみなみと鳥井。長い間。
脇田の大声　「そろそろラスト行くよ。二十五。十本」
と、いきなり大粒の雨が降ってくる。
プールサイドにいたほとんどが更衣室に避難していく。

脇田　「雷来そうだね。危ないから今日はもうやめにする？」

小走りに更衣室に向かう何人かが同意の声を上げる。

みなみ　「あと五十だけ！」

勢いよく立ち上がるみなみ。

そんなみなみを見る鳥井と脇田。

脇田　「判った！じゃあタイム計ってあげる。鳥井君付き合ってあげて！」

鳥井　「はい！」

大雨の中、位置につくみなみと鳥井。三コースに鳥井。四コースにみなみ。二人の背後に脇田。

脇田　「五十。…位置について…ヨーイ…ＧＯっ！」

一斉に飛び込むみなみと鳥井。

ブレスのたびにコースロープをはさんで二人の顔が向き合う。

ターン。

みなみの方が鳥井より少し速い。

そしてゴール。遅れて鳥井。

みなみ、鳥井に向かって笑いかける。苦笑いの鳥井。

鳥井　「負けた」

みなみ　「私、雨の中で泳ぐの。好き。上も下も水で、まるで水の中にいるみたいだから」

脇田　「三十二秒六。ベスト？」

みなみ　「零点二。足りないです」

プールの中で苦笑するみなみ。

雷鳴。

脇田　「出て。雷は危ないから。…今日はこれで終了！」

大雨の中で脇田が叫ぶ。

11.青の中のみなみ

十七歳のみなみ、ひざを抱えて丸くなっている。
そのみなみが身じろぐ。
十七歳のみなみが三十六歳のみなみに変わっていく。
身じろぐみなみ。息を吐き出す。その息があぶくになって上がっていく。

12.スポーツジムの前

中から出てくるみなみ。
すっかり日が暮れていて、さらに霧雨が降っている。

みなみの声　「霧雨。雨粒のない雨。まるで水の中」

みなみ、傘もささずに歩き出す。

「雨粒のない雨」設定

○人物

太田みなみ(36)　168cm。痩せ型。ＯＬ。
太田みなみ(17)　167cm。痩せ型。高校二年。
鳥井誠(17)　179cm。ガッチリ型。高校二年。
脇田恵理子(18)　158cm。高校三年。水泳部マネージャー。
森健一(18)　170cm。高校三年。水泳部部長。

○場所
スポーツジムのプール
舞子高校のプール

○映像
全体に青味がかった映像とする。

プロット集

雷電文書　抜粋

太田美花 (24)-176
柏尾研司 (16)-168
上田宏太 (15)-175
上田勇太 (18)-180
高木麻里 (17)-150
長山ひろみ (17)
福島佑輔 (15) メボレ
川村奈津 (18)

松永亜矢子 (36)

伊藤賢 (51)-174
西岡彰 (51)-178
東原政之 (52)-157
東原瑞穂 (27)

増谷努 (61)

服部由香 (32)
小野雅昭 (29)

平塚栄 (40)
住谷直樹 (31)

竹内笙子 (58)

○ 柏尾
剛司 (84)
和司 (55)
真司 (45) ー鳥(?)
清子 (81)
真知子 (46)
司紗 (15)-153

○ 佐久間
貴仁 (77)
貴明 (50)
さくら (26)-162

○ 上田
雄大 (45)
隆大 (18)
大吾 (28)
理大 (27) - 須山
将人 (38)-181
人志 (25)-179
弘人 (30)
亮太 (45)-182
香織 (43)
小太朗 (-)
李尚均 (28)
サンギュン

○ 雪風月花
くまちゃん♪
リサージュ
monostone
ララッシュ
十ドン十

日	月	火	水	木	金	土
		22	23	24	25	26
27	28	29	30	31	1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16

7. 柏尾本家　8/18　夕方(?)　(16:12)　差 サー

かて」司紗「司の字を付けると思う」人志「ありがとうございました」司紗「人志は自分の子供に人の字を付けるて」人志「つけません」司紗「上田に出しない？」人志「本人が望めば良いですが」司紗「上田はイヤな仕事？」人志「やりがいはあります。ムズカシイことも多いですが、好きな仕事です」司紗「ありがとう」尚内「上田の仕事は楽しい仕事ですか？」人志「今日。まだ半日だけど楽しくなかったですか」尚内「楽しかったですね。ここ何年で一番楽しい日です」人志「毎日こうだと時々疲いますけどね」将人「それならケイセ界内になるか？」人志「そうならざるを得ないかもしれません」司紗「たがうこにとられはぎない様にね」人志「司紗様はどっちの味方なんですか」司紗「かっこよく云うと。がんばってる方の味方」人志「もう少しだけ休ませてください。美花様はしばらくしたら僕を呼ぶと云ってました。あの人、人使い荒いから。呼ばれるまでは ゆっくり休ませてください」司紗「云いつけてやろ」尚内「云いつけなくても、美花様は自分が人使いが荒い自覚を持ってると思いますよ」笑う司紗と人志。コーヒーを飲む人志と尚内。

8. 古い家　8/18　17:20

コタツテーブルで同人誌を読んでいるさくら。コタツテーブルの上で黒のノートパソコンでサクラネットのメールを読んでいる美花。メール『発信者：くまちゃん♪ タイトル：インスコスコスコ？ メッセージ：インスコできましたか？判らないことがあったらどんどん聞いてください』美花「って最初から何も判んないわよ」さくら「はい？」さくら 顔を上げて美花を見る。美花「あ、そう云えば」さくら、システムの会社の人だったよね。さくらなら判るかな。メールサーバーとウェブサーバーにくま

12

㊀ 自転車を 門の中に入れると」
㊁ 文机にノートパソコンをのせて」

・1・15

来るまで、もうちょっと話しようか」宏太「俺はいいから、みっちゃんにおやすみコールしてやれよ。流石にまだ起きてるだろうから」研司「そうする。じゃおやすみ」宏太「おやすみ」研司、㊀ 家の中へ入っていく。宏太、夜空を見る。

5. 上田道場　8/4　23:15

居間。美花、（Tシャツにパンティ姿の）タオルを頭にまいて（フルハウ）ケータイで話をしている（機嫌よさげ）が、やがてケータイを卓の上に置く。（卓の上に目もうつ 背ケータイがみえる）髪をタオルでふく。隣の部屋では さくらが座って サクラアルケミーを遊んでいる。美花「ねえ、さくら。私のノーパは？」さくら「は？こちらですが？」美花「それじゃなくて、私のVAIO」さくら「家に置いたままではないのですか？美花様のお宅には、今日寄っておりません」美花「そっか。じゃいいや」美花 ショルダーバッグから手帳を出す。さくら「こちらのパソコンではいけませんか」美花「人のパソコンのセキュリティ、信用できないんでしょ」さくら「ゲームされるのではないのですか」美花「ちょっと仕事」さくら「学校の仕事でしたか」美花、手帳を広げる。美花「学校じゃなくて、柏尾の仕事。今日の反省点とか、思ったこととかまとめとこうと思って」さくら「お手伝いいたします」美花「（今は）いいよ。ちょっと一人で考えたいから。（あとで）明日、手伝って」さくら「はい。…（あの）美花様にとって、（司）柏尾は仕事ですか？」美花「ん？シュミでやってる訳じゃないよ」さくら「それはそうでしょうが…」美花「お金、もらえるんでしょ、司。なら仕事なんじゃない」美花、考えながら手帳に何かを書いていく。さくら「司には何かしかいません」美花「そうかぁ。じゃあ仕事じゃなくてボランティアかなあ」美花、心ここにあらずといった感じで答える。さくら「では 司は仕事ではないということにしてください」美花「ん？何で？」さくら「今だけでもいいです。今だけでもいいから司は仕事じゃないって云ってください」美花「んー。うん。じゃ今だけね」美花、（面白くなさそうに答え）手帳にメモを

㊀ 美花「仕事関係はダメってもいてあるから、仕事じゃないって云って欲しかったの？」さくら「はい」美花「さくらは私の（プロ）味方だから 特別に（?）OKしてあげる」さくら「ありがとうございます」

書いている。さくら「ありがとうございます」さくら ノートパソコンを操作する。サクラアルケミーの画面が（最小化され）、サクラネットソサエティが表示される。美花、考えながらメモをとる。右手をおでこにあて考え事をしている美花。目だけが激しく左右に動いている。（美花、おもむろに）手帳から一ページ（抜きとる）と、丸囲みの（文）字と矢印を（いくつも）書き、その内のいくつかには×をつける。しばらくその図を見まわし、いくつかの修正を書き足す。再び図を見まわし、手帳に清書する。そして下書も手帳に戻す。卓の上の美花のケータイがメールを告げる。美花、ケータイを（確）認する。『タイトル：佐久間さくら様からのフレンド申請が届いています。差出人：サクラネットソサエティ　本文 ”：佐久間さくら様からサクラネットソサエティのフレンド申請が届いています。メッセージ：佐久間です。フレンド申請させていただきます。受理、よろしくお願いいたします。みっちゃん大スキなさくらより。（フレンド）承認する場合は次のURLにて承認ボタンを…』美花「さくら。今、手、離せる？」さくら「はい」さくら、やってきて美花の横に正座する。さくら「何でしょうか」美花 横を向きさくらを見る。そして目をつむりあごをあげる。さくら、チュッと美花にキスをする。美花「ありがと。また呼んだら すぐ来てくれる？」さくら「もちろんです」美花「ちょっと待ってて」美花、ケータイを操作する。㊀ メールを打ち込んでいる様である。㊁ そして（美花、）ケータイを閉じる。（そして）さくらを見る。さくらも美花を見る。見つめあう二人。足音がする。司紗と宏太、亮太が居間に入ってくる。美花「あ、おかえり。話は済んだ？」司紗「うん」宏太「ああ」亮太「布団一組上に上げます」美花「何で？」亮太「司紗様は宏太と寝ます」美花「はぁ？何云っちゃってんの？亮太何云ってんか判ってんの？」亮太「好きあってるんだからいいでしょ。もう宏太も司紗様も高校生なんだから」美花「いい訳ないでしょ！」司紗「僕なら大丈夫」美花「司紗は黙ってなさい！」宏太「俺も…」美花「宏太も

6

6-1

玉話のプロ

物語/猿の回/白波瀬竜司/上羽正義/芦田實/桐村

郊外/ダンプがデモ隊を前に停ってる/デモ隊の行列に瀬/クラクションとホイッスルと瀬のシュプレヒコール/警備隊がデモ隊を排除する/怒鳴/芦田(警備側)「これは公務執行妨害は犯罪」/もみあう人々/オープニング/郊外/囲いの中で工事が始まってる/プレハブの事務所/工事の音/桐と芦/桐「もっと強く」/芦「しかし」/桐「政治家を使え」/桐「言ってたい分は別請求」/竜の部屋/勉強をしてる瀬/本棚には恐竜のフィギュアがいくつも/瀬フィギュアを手にとる/瀬「竜は大きくなったら何になる?野球?」/竜「古生物」/瀬「恐竜の」/竜「絶滅理由」/竜「人が滅びる理由」/瀬「それは驕りと自然破壊」/瀬「テレックスになり」「工場や革命は文メ」/正入ってくる/瀬と正で政治論/竜「けんかはやめて」/正「けんかじゃない」/竜「なぜ、人は何度も戦う」/正「戦争を視野」/竜「元?」/正「いや、そんなでもない」//囲いの前で芦と瀬の押し問答/デモ隊の人数は少ない/環境考慮/警備に強制排除される瀬/横を桐が通る/目が合う桐と瀬/近くを通る犬と猫/桐、車に乗り込む/ナンバーを控える瀬//学校/川の授業/地域サービス/竜「地域センターは環境破壊?」/川「どう思う?」/夏「考慮してるって」/竜「でも」/夏「テレビで」/竜「自で見てない」/川「じゃあ行こう」//料亭/桐と芦と背を向けている男/酌をする白/無っている白/料亭の脇に瀬/おてくる男。芦が寄り添い、桐が後に続く/頭を下げる桐/桐「では先生、よろしく」/目配せする桐と芦/芦案内するように前に立って歩きだす/それを見送る桐/瀬すこし離れて男の後をついていく//バンの中/運転席に川、助手席に正、後に竜、瀬、夏、隅/瀬スマホ/竜「ルール?」/瀬「工事の調べ物。昨日も調べたんだけど気になることでてきて」/車、工事現場に着く/車からみんな降りる/入口は封鎖/その前に芦/川「休みにすみません」/芦「公報も仕事」/芦「工事は休み、中は文メ。となりの区民会館。車も」/川「車に乗る」/他は芦についてって会館へ/それを監視小屋から見ている瀬/瀬プレハブから飛びだしてくる/会館の入口/芦の説明/瀬が来る/芦「紹介」/瀬「保護者」/正「政治的発言なし」/瀬「しかし」/正「だめ」

エンピツ書き

絶滅危惧

ももたろう（仮題）

目次

翼なき者　風のーと　…　1
「翼なき者」は風のーとシリーズとして書いたもの。このＵｅＨＡＵＰの冒頭に書こうとしていた文章に近いので、扉としてそのまま掲載。（２０１０年）

ふらいあうえい　…　3
確か、歌→ガンダム→短話の順番に書いたはず。ガンダムμは２００３年？２００４年？から書き出して、第一部が途中数ヶ月の休憩を入れて一年弱で完了。第二部はそれから数年後（二年後？）にやはり一年ぐらいかけて完了。全三部の予定で、現在は第三部第一話のみ完了で、第二話のプロット完了。この状態で数年放置状態。ガンダムのふらいあうえいは第二部第七話。最初に歌を書いたが、最初から二の七の特別主題歌として構想。（２００５年？）

らら　…　36
ナイロン１００℃のナイス・エイジが自分の中で消化不良を起こしたので、それに対する舞台劇として作る。第二場が弱すぎるので加筆を考えているがアイデアが浮かばず。（２００６年）

電王版らら　…　103
仮面ライダー電王が始まってすぐの頃。「電王」って面白いかもと思って、「らら」を電王仕様に焼直した作。しかし、この後すぐに電王の進み方が気に入らなくなって、電王は見なくなった。（２００７年）

雪が降ってくる　風のーと　…　123
雨粒のない雨　風のーと　…　133
風のーとは女性主人公による散文調を意識したシリーズ。やまだ紫と秒速五センチの雰囲気を意識した。シナリオは歌の補足説明。（２０１０年）

雷電文書　…　143
第一部と第三部のプロットが完了。当初はシナリオ形式で書き始めたのだが、話を書くのが面白くなり、完全時系列の台詞主体プロットとして書き進める。丸一年全力を出す。プロットはＢ６ノート１７冊。定年後に取りまとめる予定。（２０１０年から２０１１年）

ももたろう　…　144

時代劇版の仮面ライダーってどうだろう?と考えたのが発端。だが、流れ流れて現代劇になってしまった。タイトルは未定。コードネームは「ももたろう」。全十二話（一クール）のプロット完了。（２０１４年）

「ＵｅＨＡＵＰ編纂について」

思うところあって、ＵｅＨＡＵＰをまとめる。80は昭和８０年代の意味である。

つくづく自分は昭和の人間だと感じる。生きてきた期間は平成のほうが長くなってしまったが、心に残ることのほとんどは昭和のうちに体験した。だから昭和の人間なのだろう。

ＵｅＨＡＵＰ'90の頃には平成の人間になれているだろうか。

ＵｅＨＡＵＰ'80

編集者　植原　淳

編集日　平成二十七年九月二十二日